藤沢周平

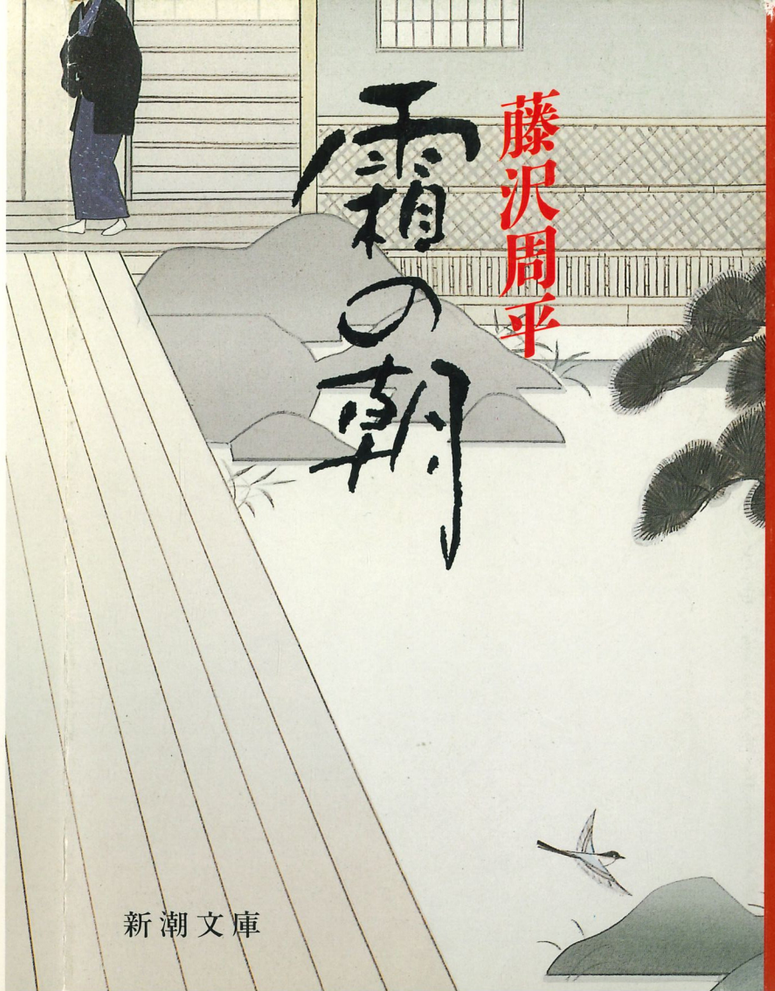
霜の朝

新潮文庫

藤沢周平
Fujisawa Shûhei
(1927—1997)

山形県生れ。山形師範卒業後、結核を発病。上京して五年間の闘病生活をおくる。'71(昭和46)年、「溟い海」でオール読物新人賞を、'73年、「暗殺の年輪」で直木賞を受賞。時代小説作家として、武家もの、市井ものから、歴史小説、伝記小説まで幅広く活躍。『用心棒日月抄』シリーズ、『密謀』、『白き瓶』(吉川英治文学賞)、『市塵』(芸術選奨文部大臣賞)など、作品多数。

カバー装画　蓬田やすひろ



霜の朝

藤沢周平

ふ 11 17 新潮文庫 ¥552

9784101247175

1920193005523

定価：本体552円(税別)

その財力を賭けて粋を競った相手の紀ノ国屋文左衛門は、悪銭廃止令によって没落した。勝ち残った奈良屋茂左衛門の胸を一陣の風が吹き抜けていった。紀文と共に一つの時代が過ぎていったようだ……(表題作「霜の朝」)。ほかに、若い武家夫婦の無念を晴らす下男の胸中(「報復」)や、意に染まぬ結婚をした女のあわれ(「歳月」)等、人の心に潜む愛と孤独を、円熟した筆に綴った時代小説傑作集。

ISBN978-4-10-124717-5

C0193 ¥552E

新潮文庫

新潮文庫
藤沢周平の本

用心棒日月抄
孤剣　用心棒日月抄
刺客　用心棒日月抄
凶刃　用心棒日月抄
消えた女
—彫師伊之助捕物覚え—
漆黒の霧の中で
—彫師伊之助捕物覚え—
ささやく河
—彫師伊之助捕物覚え—
橋ものがたり
春秋山伏記
密謀(上・下)
本所しぐれ町物語
たそがれ清兵衛
竹光始末
時雨のあと
冤罪(えんざい)
神隠し
時雨み
驟雨
闇の雨穴
霜の朝
龍を見た男
ふるさとへ廻る六部は
静かな木
天保悪党伝

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

霜の朝

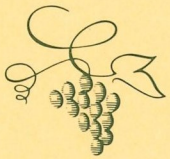
藤沢周平著

新潮社

霜の朝

藤沢周平著

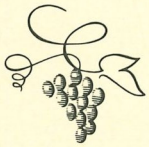
新潮文庫



新潮文庫

霜の朝

藤沢周平著



新潮社版

3780

目次

報復……七
泣く母……三
嘘……七
密告……一〇七
おとくの神……一四九
虹の空……一五五
禍福……一六一
追われる男……一九三

怠け者……二六三
歳月……二九九
霜の朝……三三五
解説　皆川博子

霜の朝

報復

一

柚木邦之助が横死をとげ、葬儀が済むまでの間、松平は主人の邦之助に言われたひと言をじっと考えつづけた。だが、どうしたらいいのか少しもわからなかった。葬儀も、その後の柚木の家の者の身のふり方を決める相談ごとも、すべて松平の手のとどかないところで行なわれていた。

その夜のことを、松平はいまもあざやかにおぼえている。忘れられることではなかった。

星の光も見えない暗い夜だった。一たん城からもどった邦之助は、夜の五ツ（午後八時）過ぎになって、もう一度外出の支度をして玄関に出て来ると、大声に松平を呼んだ。供せい、と言った。

ふだんはこういうとき、妻女の康乃が松平に指図するならわしである。提灯の支度がととのい、松平が履物をそろえたところで、邦之助が奥から出て来る。だがその康乃は、夫のあとを追うようにして玄関に出て来たものの、大いそぎで履物をそろえたり、提灯を支度したりする松平には眼もくれなかった。

「短気なことはなされますな。くれぐれも頼みまする」

板の間に膝をついて夫を見上げながら、康乃はそう言った。土間にうずくまって、提灯に灯をともしながら、松平は康乃の声にすがりつくようなひびきがあるのに気づき、何とも言いようのない不安に胸をしめつけられるのを感じた。

「わかっておる」

邦之助はひと言答えただけである。提灯に灯が入ると、邦之助は自分から先に外に出た。松平はあわてて走り出ると先に立った。百石取りの家なので、粗末だが表に門構えがある。松平が潜り戸をあけていると、うしろで康乃の声がした。

「松平」

と康乃は呼んだ。康乃の呼び声は、尻上がりにまつへと聞こえる。松平ははいと言った。

「旦那さまを頼みます」

康乃は玄関の戸につかまって、二人を見送っていた。松平はふたたび不安に胸をしめつけられるのを感じた。

外に出ると、邦之助は小鹿町と言った。小鹿町は城の大手前から南に行ったところで、大身の屋敷がならんでいる場所である。心得ましてござります、と松平は言った。

邦之助は大股のいそぎ足で歩き、先に立って提灯をさしかける松平は、時どき小走りに走らなければならないほどだった。五ツを過ぎると、通行の人気はばったりと絶える。左内町を抜けて五間川の橋をわたるとき、遠い河岸にぽつりとひとつ、提灯の灯が動くのを見ただけである。

――この夜更けに……。

主人はどなたの屋敷をたずねるつもりだろうかと、松平は思った。

松平は三年前の十八のとき、はじめて柚木家に下男奉公に上がった。病死した父親が、倒れる直前まで柚木家の下男だったので、親子二代の勤めである。

松平が勤め出したころ、柚木家は若夫婦の代になっていた。邦之助は二十五、妻女の康乃は二十一だった。康乃はちょうど男の子を出産したばかりで、二人は匂うような若夫婦に見えた。

邦之助は勘定方に勤めていたが、城下の秦野という無外流の道場の高弟だった。無口で男らしい風貌をしていた。康乃は美貌の女性だった。弱よわしいほどほっそりした身体つきと、やや眼尻が切れ上がった勝気な容貌が、美少年を思わせるようなひと

だったが、子を生んだあとは、身体に丸味が出来た。

松平は、この主人夫婦を誇りにしていた。どちらかの供をして町を歩くときなどは、晴れがましさに顔がほてるようだった。

柚木家の主人夫婦は、武家はいったいにそういうものだと聞いていたとおり、家の中ではもの静かだった。町の者のように、大声で話したり、笑ったりすることはほとんどない。それでも夫婦仲がむつまじいことはわかった。わずかな言葉のやりとりや、動作にそれが現われる。

だが今夜はいつもと違っていた、と松平は思っている。外に出る旦那さまを、奥さまは強く引きとめたそうな気配を示し、旦那さまはそれを振り切って出て来られた。松平はそんなふうに感じている。歩きながら、松平はそのことが不安だった。

「ここだ」

と邦之助が言った。松平は足をとめて眼の前の屋敷を見た。めったに通る町ではないので、このあたりの屋敷を全部そらんじているわけではないが、大きな門構えのその家だけはわかった。次席家老都築頼母。いま、藩中にならぶ者がいないと言われる権勢家の屋敷だった。

「ここで待っておれ」

邦之助はそう言ったが、ちょっとうつむいて考えこむような顔をしてから、松平の顔を正面から見ると、念を押すようにまた言った。

「あとを頼むぞ」

松平は、はいと言った。だが、主人がなぜそんなことを言ったのかはよくわからなかった。

邦之助はすぐ背をむけた。潜り戸を叩くと灯が洩れている門番小屋の内に人影が動き、やがて戸が開かれて、邦之助は屋敷の中に姿を消した。邦之助をのみこんだ潜り戸が、かすかにきしる音を立ててしまり、松平は門前に取り残された。

そのまま刻が経った。半刻（一時間）は経ったと思われたが、門内は静まりかえったままだった。前の道を通る者もいなかった。松平は提灯の灯を吹き消すと、門の下に腰をおろした。足が疲れて堪え切れなくなったのである。

門番小屋の小窓には、まだ灯がともっていて、かすかな光を門前に投げかけている。その光にうかぶ夜の道を眺めながら、松平は次第に胸の中の不安が高まって来るのを感じた。

その不安は、やはり柚木家を出るときの、主人夫婦のやりとりにつながっている。短気なこととは何のことだろうか、と松平は思った。たずねて来た主人を、都築の屋敷では待っていたようでもある。いったい主人は、この屋敷に何の用事で来たのだろうか。なぜ自分を玄関まで入れずに、外に残したのだろうか？

次から次とうかび上がる疑問が、少しずつ不安のいろを濃くした。九月の夜は、夜更けて少し夜気が湿りを帯びて来たものの、さほど寒くはないはずだった。だが松平の身体は、さっきから小さく顫えつづけている。

一刻（二時間）が過ぎたが、門内はひっそりしたままだった。何の物音も聞こえず、ひとの話し声もしなかった。そして、不意に門番小屋の灯が消えた。あたりは闇に包まれた。

その闇の中で、松平の不安はついに頂点に達した。なにかはわからないが、奥さまが旦那さまを頼むと言われたのは、このことなのだという気がした。

松平ははね上がるように立つと、駆け寄ってはげしく潜り戸を叩いた。

「もし、ご門番の衆」

松平は大声で呼んだ。

「おたずね申しまする。夜分おそれ入りますことにござりますが、おたずねの儀がござりまする」

厚い潜り戸の板を、拳で打ちつづけると、一度消えた門番小屋の灯がともり、小窓

がひらいた。そこからひとが外をのぞいている。松平はうしろにさがって、自分の姿がよく見えるように立った。

「さきほどお屋敷に参じました柚木の家の召使いでござります。主人の用がいかい長びいておりまするが、お帰りは何刻ごろになりましょうか。ごめんどうながらお確かめ願いとうござります」

外をのぞいている男は声を出さなかった。明かりを背にしているので、顔の表情もわからなかった。しばらく松平の姿を見おろしていたが、やがてすっと窓をしめた。

だが灯はそのままだった。多分奥の屋敷に問い合わせに行ったのだろう。

——よけいなことをしてしまった。

不意に松平はそう思った。さっきまで胸をしめつけていた不安のかわりに、恥ずかしさがこみ上げて来た。

遅いのは、ただ用事が長びいているだけかも知れなかった。もしそうだったら、都築の屋敷の人びとは、いまごろ門前の下男のうろたえぶりを嘲笑っているだろう。あとで主人の邦之助にきつく叱られるかも知れなかった。松平はそう思い、冒した失態に身がちぢむのを感じながら、門の前に立ちつくした。

だがさらに時が経っても、潜り戸からは誰も出て来る気配がなかった。頼みにしていた門番小屋の灯が、何のことわりもなく、再び消えた。松平は茫然と立ちすくんだ。

時刻はあらまし九ツ（午前零時）に近づいたろうと思われたころになって、ようやく門内に明かりがちらつき、ひとの足音がして、潜り戸があいた。しかし駆け寄った松平の顔に提灯をつきつけたのは、松平が見たこともない中年の武士だった。

「柚木どのの家の者だな？」

都築家の家士と思われるその武士は、そう確かめ、松平が返事をすると押しかぶせるように言った。

「裏門に回ってもらおう。柚木どのが腹を召されたのでな」

松平はあっと叫んだ。総身を名状しがたい寒気が走り過ぎたようである。その姿を見ながら、都築家の家士は、はやくしろと言った。だが門内に駆けこもうとした松平の胸を、武士は強く押した。外から回れと言った。

長い塀に沿って、松平は裏門に走った。途中二度ほど、足がもつれて地面にのめったが、痛みは少しも感じなかった。すぐに立ち上がって走った。走りながら、家を出たときからの不安の正体は、これだったのだと思った。

家老屋敷の裏門は、異様なほどの明るさの中にうかび上がっていた。提灯が十近くも出ていて、その灯明かりの中で、ひとが右往左往している。

松平が駆けつけたとき、ちょうど門内から戸板に乗せられた邦之助の遺骸が出て来たところだった。松平は走り寄ると遺骸の上にかけてある羽織をめくった。蒼白な邦之助の顔が現われた。眼も口もかっとひらいて、おそろしい形相に見えた。顫える手で、松平はその瞼を撫でおろした。この死に顔を奥さまに見せてはならないと思っていた。松平が手をひくと、戸板を持った男たちが、ゆっくり動き出した。

さっき表門に出て来た武士が、松平の肩をつかんで言った。

「遺骸は柚木どのの家まで送らせる。貴様、案内に立て」

二

奥の小座敷に落ちつき、酒が運ばれて来ると小沼甚左衛門は露骨にうれしそうな顔をした。

小沼は主人の柚木邦之助と同じ勘定方に勤める男で、酒好きで知られている。へべれけに酔って柚木の家に立ち寄り、一人では帰れなくて松平が主人に言いつけられて家まで送りとどけた、ということが二、三度あった。知らない顔ではない。

「なかなかいい場所を知っておるではないか、松平」

酒をついでもらいながら、小沼は上機嫌で言った。

「おまえも隅におけんな」

「とんでもございません。ここは友だちに聞いた店でござります」

つつましく膝をそろえたまま、松平は小沼に酒をすすめた。

喜六屋というこの酒屋は、店売りをするかたわら土間に飯台と樽腰かけを置いて酒をのませる。出入りするのは多くは町人百姓だが、土間の奥に小座敷があって、時おりはそこで武家がむっつりした顔で酒を飲んでいるのを、松平はみていた。

柚木家の仏事が行なわれる間、親戚や知人が多数出入りした。その間に、主人の邦之助が家老屋敷で自裁したという奇怪な出来事について、誰かが事情を話すのではないかと、松平は聞き耳を立てたが、そういう話はどこからも聞こえて来なかった。

出入りする男女が、ひそひそと話し合うのは、まだ若い寡婦と、三つになる男の子が残された柚木家の先行きがどうなるかということだけだった。あるいはそれに関連して、邦之助の自裁の真相がどこかで話されたのかも知れないが、それは少くとも松平の耳には入って来なかった。

もどかしかった。家老屋敷の門を入る直前に、顔をのぞきこむようにして言った邦之助のひと言と、裏門の煌々とした光の中でみた無念の形相が、松平には忘れられな

い。胸の中に、葬儀や初七日の仏事のほかに、何かしなければならないことがあるはずだという思いが、しつこくまつわりついて離れなかった。それが何かは、主人の死の真相を確かめないことにはわからないことだという気がした。

松平が白羽の矢を立てたのは小沼甚左衛門だった。松平の話を聞くと、小沼はしぶい顔をしたが、どこぞで一献さし上げながらと誘うと乗って来た。

「くわしいことは、わしは知らんのだぞ。またたとえ知っておっても、わしは言える立場ではない」

酒が出てからも、小沼は用心深く松平に釘をさしたが、酔いがまわると、少しずつ自分から話し出した。

「誰も聞いておらんだろうな」

小沼は途中で障子をあけ、ひょいと土間をのぞいた。だがそこには、いい機嫌の町の者が高調子でしゃべっているだけなのをみると、障子をしめて声をひそめた。

「そういうわけでな。お蔵元逼迫ということで、国元も江戸も費えは締めに締めておる。江戸屋敷の留守居からは、これではわが藩の体面が保てんと怒って来ているそうだ」

「はい」

「そのさ中にだ。柚木は、帳簿から次席家老が藩の公金を不正に流用した跡を見つけ出し、その証拠も押さえたのだ」

「……」

「いくらの金だと思う？　ん？」

小沼は猿のように赤くなった顔を寄せて、松平をのぞきこんだ。松平はわかりませんと言った。

「柚木がはじき出した金は、千五百両を越えておった。わが藩の千五百両は大きいぞ。その金を、ご家老は城下の旦那衆に回し、わが閥を固めるのに使い、また伊原村の知行地に別宅を構えるのに使っておる。むろん、旦那衆から入る利息はわが懐に入れておるわな。ご家老は公金を私しておるのだ」

松平は小沼に酒をついだ。手が顫えた。

「その証拠をそろえて、柚木は勘定方支配に申し出たが、支配は書類を握りつぶした。筆頭家老の浅川さまにも行ったようだが、浅川さまも動かなんだ。当然の話だ。いまの都築さまに立ちむかえる者など、藩中に一人もおらんのだて」

「……」

「ただ一人、わが殿だけは都築さまの近年の増長ぶりをにがにがしく思われてな。失

態があれば即座に押さえこもうと身構えておられるというお噂だが、殿はいま江戸だ。そして江戸屋敷と来たら、残らず都築の閥で固めておるから、こちらの声など殿にとどくものじゃない」

「……」

「柚木ははやまった。殿がご帰国になられた折に直訴するという手はあったのだ。それとてむつかしいことはむつかしいが、出来んことじゃない。そうしろとわれわれは言ったのだが、聞かずに都築家老に直訴してしまった。相手を間違えたとしか言いようがない」

「……」

「もっとも、そこが柚木のいいところでな。公金流用のことは、われわれもうすうす感付いていたが誰も手をつけなかったのだ。二番家老に味方はせんが、さればといって命は惜しい。みんなそう思っておる」

「主人の死は、公式にはどのように言われていますか？」

「諫死だと言われておるな。執政に疑義を申し立ててご家老の面前で腹を切ったと。しかし諫められたご家老の方は、よけいな真似をする、とご立腹だというから、松平、こりゃ柚木の家が持つかつぶれるかは、きわどいところだぞ」

「主人は、ほんとうにご自分で腹を召されたのでしょうか？」

「大目付の検死ではそのとおりだったらしいじゃないか。しかし、大勢で取って押さえて、無理に腹切らせるという法もあるからの」

小沼はそう言ったが、不意に酒がさめたような顔をし、今夜のことは他言するなよ、と念を押した。

小沼は酔ってしまって、家まで送ってもらいたそうだったが、松平は酒屋の前で別れた。一刻のひまをもらって出て来たのだが、帰りが遅れている。大いそぎで柚木の家までもどった。

はたして婆さん女中のおくめに叱られた。

「いつまで夜遊びをしてるんだね」

腰が曲っているが、台所を預かってそこの主みたいにしているおくめは、険しい顔をした。

「お客さまが見えてんだよ」

「どなたですか？」

「杉浦さま。お話はもう済んだらしくて、松平はまだかと、奥さまが二度も台所をのぞきにみえたよ。お客さまを送ってもらいたいらしいんだよ」

小沼など送っていかなくてよかった、と松平は思った。すぐに奥の客間に行った。杉浦というのは、柚木家の本家筋の老人である。柚木家の跡目相続の話はまだ決まっていなくて四十九日の仏事が済んでからも、親戚が寄り集まったり、入れかわり立ちかわりひとが来る。杉浦老人もその話で来ているに違いなかった。

客間に近づいた松平の耳に、老人の声が聞こえた。低い声だったが、その話の中味が、ふと松平を立ちどまらせた。老人が言っている。

「ご家老は、とにかく一度そなたに会おうと言っておられるのだ。話はそれからだと申される。ここはお会いして詫びる一手じゃ」

ご家老というのが都築頼母のことらしいことは、容易に推察出来た。松平は胸が固くなるのを感じた。

「ともかく段取りはつけた。あとはそなた次第だが、あくまでお会いすることを拒めば、柚木の家は、まず立ち行くまいぞ」

「……」

「なに、お詫びして、酒が出ておったら一、二献酌もしてさし上げれば、ご家老の機嫌はそれでなおる。思い悩むほどのことではないわ」

そう言った杉浦老人の声に、かすかに卑しいひびきがまじるのを松平は聞いた。立ったまま、松平は足が顫えた。康乃の声は聞こえなかった。

三

康乃は見送りの女中もなく、一人で小春の玄関に出て来た。履物をはこうとしてよろめいた。待っていた松平から、顔をそむけるようにして外に出た。松平はあわてて、支度していた火縄の火を吹いて、提灯に灯をともすと、康乃の後を追った。

小春は家中の者なら上士、重役、町人なら町の分限者たちしか上げない料理屋である。料理屋、小料理屋がならぶ町の一劃にはあるが、酔客でにぎわう通りからは少し離れている。人通りはほとんどなかった。

それでも康乃は繁華な通りの方から洩れてくる明かりを恐れるように、足をはやめた。ふだんの足どりにもどったのは、足軽屋敷がならんでいる般若町まで来てからだった。

康乃は無言で足を運んでいる。松平も無言のまま、主人の足もとを照らしながら歩いた。ひとにも会わなかった。途中で、闇の中から現われた白い犬が、提灯の光の中に入って来ると、生垣に身を寄せて立ちどまり、二人をじっと見送っただけだった。

康乃があまりに無言のままなので、松平は不安になった。振りむいて、そっと女主人の顔を盗み見た。とたんに松平は、胸を何者かにわしづかみにされたような気分に襲われた。

松平は足もとを照らしながら、みちびくように康乃の半歩先を歩いている。その提灯の光に、無言のまま頬に涙をしたたらせている康乃の顔がうかんでいたのである。康乃はうつむいて、少し放心したような表情で歩いていた。松平が振りむいたのにも気づかないらしく、涙を拭こうともしなかった。

——やはり……。

と松平は思った。康乃は辱かしめを受けて来たのだ、と確信した。

杉浦老人の話し声を盗み聞いたときから、そのことはうっすらとわかっていたのである。そして今日、都築家から康乃を小春に呼び出す使いが来たとき、その危惧ははっきりした凌辱のいろに染まって、松平をおびやかしたのだ。

だが、松平に出来ることは何もなかった。松平は、料理屋のひえびえとした玄関の隅に腰かけて、康乃が出て来るのをじっと待ちつづけただけである。松平に出来たのは、その間料理屋の奥深いところで行なわれているかも知れないことから、つとめて考えをそらすことぐらいだった。それは康乃のためであるだけでなく、自分のためでもあった。松平は、敬愛するうつくしい女主人が、男に穢されているかも知れないと思うことに堪えられなかったのである。

松平は胸が変に空っぽになるのを感じた。その空っぽの胸に少しずつ悲しみが流れこんで来た。

邦之助がいて、そばに赤ん坊を抱いた康乃がいる。庭の花畑の中で、康乃がなにか話しかけるのに、邦之助はふむ、ふむとだけ答え、一度だけ太い声で笑った。春の日射しがさしかけるその一幅の絵の中には、奉公に出たばかりで、真新しく藍が匂う半纏を着た松平もはめこまれている。

柚木という家のその絵は失なわれてしまって、跡かたもなかった。松平は唇を噛みしめた。すると、胸の中のものは、歯の間から洩れて、低いすすり泣きになった。

「松平」

不意に鋭い声がした。振りむくと、康乃がきっとした顔で松平を見ていた。

「そなたが、なにを泣きますか？」

「はい。おゆるしください、ご新造さま」

松平は詫びた。叱られて気を取り直したが、胸の中のものは消えなかった。提灯を持つ手が顫えた。しかし康乃はそれ以上咎めようとはしなかった。

「松平」

屋敷にもどって、松平が門をしめると、康乃が呼びかけた。はいと答えて、松平は首を垂れた。また叱られるかと思ったがそうではなく、康乃は淡々とした声で言った。

「都築さまは、豊次郎に跡目相続を約束されました」

「はい」

「柚木の家は安泰です。そなたにも、これまでどおりに勤めてもらいます。何の心配もいりませんよ」

有難いことでござります、と松平は言った。康乃は松平と向かい合ったまま、少し沈黙したが、やがて低い声でつづけた。

「今夜、小春に参ったことは、誰にも洩らしてはなりませぬ。わかりましたな」

暗い声に聞こえた。松平は眼を足もとに落としたまま、かしこまりましたご新造さま、と答えた。

都築頼母の約束は守られた。三日後に、藩から使者が来て、願い出ていた跡目相続が許されることになったから、子供の豊次郎に、親族の大人一名がつき添って城にのぼるようにと伝えた。その都築家老の気前のいい措置から、松平は三日前の夜推察したことが、間違っていなかったことをさとった。

仏事がことごとく終ったあと、あらためて親戚の男たちが寄りあつまり、ささやかに豊次郎の跡目相続を祝った。その席で、男たちは事件以来の康乃の気丈な立居振舞いをほめたが、都築家老の名前を口にした者は一人もいなかった。そのあつまりが最後で、そのあとは柚木家の客足はぷっつりと途絶えた。しじゅうざわめいていた空気がおさまり、柚木家に静かな日常がもどって来た。その静けさは、時折り耳鳴りをおぼえるほど、底深いものでもあったが。

親戚の最後の寄りあつまりが終ったころから、康乃は目立つほど元気を失なった。痩せて皮膚は乾き、眼は光を失なって、時には数歳も齢を加えたひとのように見えることがあった。家事を指図する声も、ものうげに聞こえた。

「ご病気なんじゃなかろうね」

と、おくめが心配そうに言ったが、松平は、ご新造さまはお疲れになっただけだ、と言った。だがそのころ、松平はひそかに奉公をやめることを考えていたのである。

四

松平が庭木の手入れをする道具を背負って家を出ようとすると、母親がどこへ行く

かと聞いた。しかし松平が庭木の手入れを頼まれていると言い、青柳町にある商家の名を言うと、母親はすぐに納得した顔になった。

松平が柚木家の下男奉公をやめてから、一年経つ。奉公をやめて家にもどると、松平は近くの町の庭師に見習いについた。だが庭師の家に通ったのは三月ぐらいで、あとは生垣を刈りこむ手間仕事程度の仕事を見つけて時どき働くだけで、大方は家でごろごろして過ごした。

息子のそういう変りようがのみこめないらしく、母親は横目で様子を窺うようにしているのだが、今日はどうやら仕事に出かけるらしいとわかって、ほっとした顔色をみせた。

だが松平は、青柳町にはいかなかった。真直に小鹿町に行くと、都築頼母の屋敷の裏門から邸内に入った。まだところどころに雪が残っている庭に回った。途中、年寄の家士と、太った女中に見咎められたが、都築屋敷に出入りしている庭師の名前を言うと、二人は怪しむ様子もなく、松平を通した。

――これか。

松平は庭のそばにある梅の木のそばに立ちどまると、背負っていた荷をおろした。梅は老樹で、白い花がいま満開だった。枝をまるく刈りこんであるので、梅の花は白い半球を形づくっている。都築は、この梅におぼろ月と命名しているという。なるほど、日暮れかあかつきの光の中で見れば、この梅はおぼろな月にも見えよう。

この梅のことを、松平は都築家の若党市助から聞いたのである。ご家老がご自分の命よりも大切にしているものといえば、御子がたかと松平が聞くと、酔った市助は嘲笑い、都築の家の息子は、二人が二人とも放蕩者だと言った。そしてそういうのがあるとすれば、この梅の木だと教えたのである。都築は、自身鋏を持って庭におりるほどの植木道楽で、中でもっとも愛着しているのがこの梅だった。

そして、おぼろ月と名づけられたこの梅は、今年の花が終ると、掘り起こされて城中に移され、殿さまに献上される約束だという。殿さまの方から所望したのである。

その話を市助から聞き出したとき、松平はようやく、これから自分が何をしたらいいのかがわかった気がしたのである。松平が奉公をやめたいと申し出たのはそれから間もなくだが、康乃はとめなかった。ものうげにうなずいただけである。康乃は生ける屍のように見えた。

――小沼さまが言われたことがほんとなら……。

この梅を切り倒せば、殿さまと都築家老の間の溝が深まるかも知れない。そこまではのぞめなくとも、少くともご家老に一矢報いることは出来る。

——下男には下男のやり方がある。

松平は藁の背負い籠の中から、斧を抜き出した。ふだんは持ち歩かない道具である。松平は振りかぶった斧を、はっしと梅の木に打ちこんだ。木は身ぶるいして花を振りこぼした。香ばしい木の香が匂い立った。背後の建物はひっそりして、松平がやりはじめたことに気づいたものはいないようである。

「おい、そこの男」

不意にうしろで鋭い声がした。松平は振りむいた。木はもうひと打ちで幹が折れるところまで来ている。松平は全身汗まみれになっている。

松平の眼に一人の男の姿が映った。四十半ばの恰幅のいい武士で、袖無しを羽おり、短か刀を帯びただけの姿に威厳がある。

——ご家老だ。

と松平は思った。松平は身体が顫えた。だが、都築と思われる男に、そこで何をしておると咎められると、横に動いて木をよく見せてやった。

や、と縁側の男が言った。驚愕、狼狽さまざまの表情が、その顔をゆがめるのを、松平は見まもった。男の顔が不意に赤くふくれ上がり、男は足袋はだしのまま庭におりて来た。斬られるか、と松平は思ったが、男は数歩前で立ちどまった。

うなり声をあげて、つくづくと木を眺めてから男は松平に言った。

「貴様、狂人か？」

松平が答えないでいると、男は急に気づいたように、建物を振りむいて叫んだ。

「誰かおるか？　林、山崎、ここへ来い」

屋敷の中から、ひとが駆け出して来る足音がした。松平は振りむいて、足をふみしめると、最後の一撃を木に打ちこんだ。

幹の半ばから切りはなされた梅が、ゆっくりと傾むき、枝を鳴らしながら地面に崩れ落ちた。無数の花がはじけ飛び、梅の香が匂い立った。はじけ飛ぶ花のむこうに、松平は一瞬顔を見合わせて笑っている、邦之助と康乃のまぼろしを見たように思った。

松平は地面に膝をつき、裁きを待つ人間の姿勢になった。数人の足音が、荒あらしく松平に駆け寄って来た。

泣く母

一

師範代の三谷容助と、その少年が道場に入って来たとき、伊庭小四郎は一瞬二人に気をとられた。とたんに面を打たれた。

「あ、いたッ」

「気を抜くな」

すばやく一歩さがって竹刀を構えながら、篠崎鉄蔵がどなった。

「まだ終っていないぞ。もう一本来い」

「ちょっと待て」

小四郎は手をあげて鉄蔵をとめると、打たれた額を鉢巻の上から撫でながら、改めて三谷と少年の方に眼をやった。その視線を追って、鉄蔵も二人を見た。

「ほう、新入りか」

鉄蔵は浅黒い顔をほころばせた。小四郎は首をかしげた。少年は、小四郎や鉄蔵より二つ、三つ年下に見えた。十二か、十三といったところだろう。上品で、おとなしそうに見える少年だった。

無住心剣流を指南する藤井道場は、荒稽古で知られている。あつまる門弟も、どちらかというと微禄の家の子弟が多く、上士の家の者は少ない。活気はあるが品がないという理由から、上士は藤井道場を嫌い、大方は一刀流の菅生道場に子弟を通わせる。小四郎が少年に眼をひかれたのは、その少年がどうみても、藤井道場に似つかわしくないように見えたせいかも知れない。着ている物も立派だった。小四郎のように、継ぎをあてた木綿着などは着ていなかった。

「入門じゃなさそうだな」

と小四郎は言った。鉄蔵は、ん？　という顔をした。まわりには、二人と同じように竹刀を打ち合っている連中が、おめき叫び、足を踏み鳴らしてとびかっているので、小四郎の声が聞きとれなかったらしい。

小四郎は、声を張り上げて言い直した。

「ありゃ、入門じゃない」

「どうしてわかる？」

「着ている物をみろ」

と言ったとき、小四郎はうしろから激しくひとに突きあたられて、前にのめった。

鉄蔵が肩をつかんで支えた。

振りむくと、突きあたった人間も小四郎を振りむいて、いきなりどなった。

「ぼんやり突っ立っているな。じゃまだ」

むっとして、小四郎が言い返そうとしたのを、鉄蔵がつかんでいる肩を押さえつけるようにして制した。

突きあたった二人組は、そのままはげしく竹刀を打ち合いながら、離れて行った。小四郎に罵声を浴びせたのは森雄之助である。父親が郡奉行を勤め、禄高も百八十石の家だから、藤井道場ではめずらしい上士の子弟で、時どきその身分をちらつかせることがある男だ。小四郎がむっとしたのは、ふだんそういう森を快く思っていないためだが、森雄之助は、小四郎や篠崎鉄蔵と同じ十五歳なのに身体はひと回りも大きい。

鉄蔵にとめられて、小四郎は気を取り直したように竹刀を構えた。

「もう一本、行くか」

小四郎がそう言ったとき、師範代の三谷が、そこの二人、ちょっと来いと言った。呼ばれたのは小四郎と鉄蔵だった。

そばに行くと、三谷は少年を眼で示した。

「今日入門した矢口八之丞だ。正式には明日からの稽古になるが、当分二人で面倒みろ」

三谷がそう言うと、矢口という少年は緊張した表情で、よろしくお願い申しますと言って頭をさげた。二人を見た眼に、ちらと臆したようないろが動いたが、躾の行きとどいた挨拶ぶりに見えた。

「はじめてですか」

興味深そうに矢口を眺めていた鉄蔵が、三谷にそう聞いた。いや、そうじゃない、と三谷は言った。

「四天流の作間道場で、二年ほど手ほどきを受けている。しかし父御のお考えで、今度こちらで修業することになった」

「父御と申されると？」

鉄蔵が、三谷のうやまうような口ぶりをいぶかしんだというふうに訊いた。

「番頭の矢口主税どのだ」

三谷はそう言うと、では明日から頼むぞと念を押して、少年を促すと母屋に通じる出口の方に去って行った。三谷の背に、少年をいたわるような気配が出ている。

三谷は、手を取って稽古をつけるときは、鬼のようにきびしい顔つきになるが、ふ

だんは温厚な人物である。だが、少年に対する態度がことにやわらかいのは、少年が番頭の息子だということも頭においているのかも知れなかった。

そう思いながら、小四郎はそういう考えとはべつに、いまの少年のことで何かひっかかるものが気持の中に残った気がした。だが、それが何であるかはわからなかった。

「おい、あれは番頭の倅かい？」

小四郎と同じように二人を見送っていた鉄蔵が、振りむいて言った。

「そうらしいな」

「すごいな。番頭というと三百石はもらう身分だぞ」

「それがどうした？」

「みっちり仕込んでやろうぜ。丁寧にな。番頭の倅とつき合いが出来れば、ゆくゆくわれわれにも悪いことはなかろう」

「さもしいことを言うな」

小四郎は鉄蔵をにらんで、険しい声を出した。小四郎の家は二十五石、篠崎鉄蔵の家は十七石の軽輩である。鉄蔵のいう意味はすぐにわかったが、まだ十五の鉄蔵が、そういう世故に長けたようなことを言うのを聞くと、情ない気がした。

森雄之助は小四郎や鉄蔵が入門してから二年ほどあとに、菅生道場から移って来た。

そのとき、いま鉄蔵がいったような意味で、森にくっついて行った男たちがいたのを、小四郎は見ている。

その当時はっきりそうとわかったわけではないが、二年たち三年たち、その間森雄之助の取り巻きと言われている男たちの言動を見ているうちに、小四郎にも、そういう男たちが、何で森にくっついているかわかって来たのである。

城内で役持ちの家の倅にくっついていれば、どっちみち損はなかろう。そういう気配が、取り巻きの男たちの顔にも、しゃべり方にもあらわれた。森の言うことに調子をあわせ、わずかでも冗談を言えば、待っていたように声をあわせて笑う。

道場の稽古でも、男たちはいいように森に打たれた。森よりあきらかに技倆が上の連中まで、競ってそうするのである。百石以上の家の子弟は、森一人に限らない。そういう人びとは、森とその取り巻きをにがにがしい眼でみていたし、稽古のときの取り巻きの阿諛ぶりに気づいた師範代の三谷が、激怒して半刻（一時間）もの間森に稽古をつけ、森が立ち上がれなくなるまで打ち据えたのも、小四郎は見ている。

「さもしいか」

篠崎鉄蔵は、小四郎の険しい声に当惑したように言った。

「あたりまえだ。おれは手荒くやるぞ。あんな子供にへつらうなどはもってのほか

だ」

「わかった、わかった」

鉄蔵は閉口したらしかった。笑い顔になった。

「あやまる。貴様の言うとおりだな。どうも日ごろ家の貧乏ぶりをみていると、考えもさもしくなるらしい」

「あやまることはないさ。おれは森の取り巻き連中のような真似はしたくないと言っただけだ」

「そのとおりだ。では、おれもせいぜい手荒くやるか」

と鉄蔵は言った。鉄蔵のよさは、そういう率直なところにある、と小四郎は改めて思った。

少年に会ったとき、心にひっかかったものが何だったかに思いあたったのは、稽古がおわって、鉄蔵と一緒に道場の門を出たときだった。

一瞬、小四郎は日暮れ近い早春の光の中に立ちどまった。少し顔色が変った気がした。

「おい、どうした」

怪訝そうに振りむいた鉄蔵に、小四郎はちょっと寄るところがあるから、先に帰ってくれと言った。

二

青柳町の表通りの中に、小ぢんまりした履物屋がある。下駄、草履、雪駄などを隙間なくならべ、天井からは束にした草鞋がぶらさがっているので、狭い店の中は薄暗かった。

小四郎が入って行くと、店の奥から若い女の声が、あらおひさしぶりね、伊庭さまの兄ちゃ、と言った。狭い店なりに帳場があって、そこから立って来た娘が、土間に降りて小四郎を迎えた。

小肥りだが、色白で肌の美しい娘だった。小四郎よりひとつふたつ年上にみえるが、むかい合うと小四郎の方がずっと背が高かった。娘もそのことに気づいたらしく、手で口を覆って笑った。

「ちょっと見ない間に、ずいぶん大きくなんなすって」

「おかつはいるか」

と小四郎は言った。

「はい、おりますよ。ともかくお上がりなさいまし」

娘は先に立って店に上がった。小四郎もそのあとにつづいた。娘は小四郎を茶の間にみちびくと、ここで待てと言って台所の方に入って行った。

すぐに大きな足音がして、四十恰好の女が前かけで手を拭きながら出て来た。娘をひとまわり大きくした感じに肥った、大柄な女だった。

「いらっしゃいまし。ほんとにおひさしぶり」

おかつはしげしげと小四郎を見た。

「大きくなりましたね、坊ちゃま。お家ではお変りありませんか」

「変りないよ。じいさんもばあさんも元気だ」

「じいさんだなんて。怒られますよ」

おかつは、やはり娘に似ている細い眼を笑わせて言った。

「それで、今日は？」

「うむ。道場の帰りだが、ちと聞きたいことがあって寄った」

小四郎がそう言ったとき、娘が甘酒をはこんで来た。娘は、自分も坐りそうにしたが、店の方で人声がしたので、どうぞごゆっくりね、と小四郎に言い置いて立って行った。

「聞きたいことって、何でしょうね」

おかつが、甘酒をすすめながら、ゆっくりした太い声で言った。

「母のことだ」

小四郎がそう言うと、おかつは持っていた甘酒の椀を置いて、手を膝に重ね、じっと小四郎を見つめた。

「母が嫁いだ先の家だが、矢口とは言わなかったかな」

「そうですよ」

「矢口主税か」

「はい」

「ふむ」

小四郎はおかつから眼をそらして、縁側の先の小さい庭を見た。草も木もまだ枯れていて、水たまりのように小さい池の底には、去年の落葉が沈んだままだった。薄暗い庭を眺めていると、うしろが明るくなった。

おかつが行燈に灯を入れたのだった。小四郎の前にもどって来ると、おかつは気づかわしそうな眼で小四郎をのぞきこんだ。

「お母さまが、どうかなさいましたか、坊ちゃま」

「うん」
小四郎は、おかつに眼をもどすと、苦笑した。
「矢口の伜が、今日入門して来たのだ」
「まあ」
おかつは細い眼を、いっぱいにみひらいた。
「お美尾さまのお子が、坊ちゃまの道場に？」
「そうだ」
「おいくつぐらいのお子ですか？」
「十一、二といったところだな」
「あの……」
おかつはやはり気づかわしげな眼で、小四郎を眺めながら言った。
「喧嘩をなすったりしてはいけませんよ。坊ちゃまは、ひょっとしたらお母さまをうらんでおいでかも知れませんが、そのお子は何もご存じないのですから。それに何といっても、お父さまが違うだけでご兄弟には変りないのですからね」
おかつの家を出て、店先に懸け行燈をつらねている青柳町を、足早に抜けながら、小四郎は複雑な気持が胸に動くのを感じていた。

小四郎の父伊庭重助は、五十石を頂いて普請組小頭を勤めていたが、乾櫓下の石垣の大修理があった年に切腹して死んだ。修理したあとの秋、一夜の大風雨が石垣をくずし、その責任を負って自裁したのである。重助は小四郎の祖父宗右衛門が病身で、はやく隠居したので、十九で家督をつぎ、自裁したときは二十一だった。
乾櫓石垣の大修理は、重助の指図する組が中心で行なわれたので、あきらかに重助に責任があったが、即座に腹を切ったいさぎよさと、小禄ながら藩祖以来の家柄を認められて、伊庭家は家禄を半減されて残った。一たん隠居した宗右衛門が、ふたたび当主にもどり、今日に至っている。
父が自裁したとき、小四郎は母の腹の中にいた。しかし母の美尾は、小四郎を生み落としたあと伊庭家を去り、一年後他家に再嫁した。
小四郎は生まれると間もなく、以前行儀見習いの女中で伊庭家に働いていたおかつの家に預けられ、おかつの乳で育てられた。家禄を半減された家に、乳母をやとうゆとりがあるはずもなく、事情を知って小四郎を預かりたいと言ってきた、おかつの情けにすがったという形だった。
小四郎は、時どきおかつに抱かれて家にもどることはあったが、乳離れしたあともしばらくはおかつの家で育てられ、四つになったとき、ようやく家にもどった。おか

つは青柳町の履物屋の家つき娘で、伊庭家の女中をやめたあと婿をもらった女なので、そういうことが出来たのである。

小四郎は祖父母に育てられ、父母は早く死んだと聞かされていた。そのことを疑いもせず、また父母がいない家をさほどさびしいとも思わずに大きくなったのだが、あるときおかつの家に遊びに来て、何かの拍子に、おかつがふっと母の美尾のことを口にしたのを聞いたのである。

死んだと聞かされていた母が生きていて、しかも他家に再嫁していることを知って、小四郎はやはり衝撃をうけた。そして母の嫁いだ家が、家中で上士に入る身分の家だと知って、もう一度衝撃をうけた。とっさに、母に捨てられたのだ、という思いが胸にうかんだのである。

そのとき小四郎は、おかつに根ほり葉ほり母のことをたずねた。しかしおかつが小四郎の家に奉公したのは、美尾が嫁入って来る前のことで、そのあと時おり伊庭の家をたずねたときに会ったことはあるものの、おかつは美尾が伊庭家を去った事情までは知らなかった。

ただ美尾が美しいひとだったこと、小四郎を生んだあと、あわただしく伊庭家を去ったこと、再嫁した先が、当時二百五十石で江戸屋敷の留守居を勤めた矢口家であることなどを話した。

「その矢口さまは、江戸のお勤めをおえられました。いまはこちらにおもどりになっていると聞きましたよ」

「母のことで、ほかにおぼえていることはないか」

「さあ。そうそ、お姿も何でございますが、声のおきれいなひとでしたねえ」

おかつとかわしたそういう問答を、小四郎はおぼえている。それは小四郎が十歳になったかならずのときだったろう。

おじいさま、おばあさまには内緒でございますよ、坊ちゃま。お母さまのことを話したなどということが知れますと、あたしが叱られます、とおかつは言ったが、むろん小四郎は祖父母に母のことを話すつもりはなかった。その日、家に帰っても、小四郎はおかつに聞いたことは黙っていた。

ただ生きていて、しかも他家のひとになっている母に、かすかなこだわりが残った。事情は不明だが、生み落としただけで、乳もくれずに家を去った母に、快い気持は持てなかった。おれを捨てたひとだ、と思った。

だがその気持が、不意にくらりとひっくり返って、一度でいいからその不実な母に会ってみたいと思うこともあった。交互におとずれるその気持に、小四郎はしばらく

悩み、一時は祖母に不審がられるほど無口になったが、それはしかし、せいぜい一年ぐらいの間のことだった。

そのころから藤井道場に通うようになったこともあって、小四郎は次第に母のことを忘れた。母のことを、一度も口にしたことがない祖父母に対する遠慮も働いたようである。そして、ここ二、三年は、まったく母のことなど思い出すこともなく過ぎて来たのである。

小四郎はいま十五だった。半ば大人の世界に足を踏みいれていた。かりにいま、眼の前に母があらわれたとしても、どうということもない、という気持がある。だが、思いがけなく眼の前にあらわれた異父弟は、小四郎の気持の平静を乱したようだった。いかにも上士の家の子弟といった、品のいい少年のうしろに、一度も会ったことがない母の姿が、まぼろしのようにうかぶのを感じる。

家の前まで来て、小四郎は立ちどまると、それまでの物思いを断ち切るように、小さく首を振り、衣服を改めた。

生垣の家がならぶそのあたりは、つつましげにともる家々の灯がみえるだけで、道は暗い。通るひともなく、あたりはひっそりとしていた。小四郎は、押すといつも軋(きし)る音を立てる粗末な門をくぐると、屋敷の中に入った。

家の中に入ると、祖母は台所にいるらしく、そちらで水の音がし、茶の間に祖父がいて、お茶を飲んでいた。小四郎が挨拶をすると、祖父はじろりと小四郎をみて言った。

「遅かったではないか」

「は。篠崎の家に寄りまして、遅くなりました」

「若い者が、帰りが夜になるのは感心せんぞ」

「はい。以後気をつけます」

小四郎が神妙なので、祖父の小言はそれで済んだ。着換えて参ります、と言って小四郎は席を立った。

部屋を出るとき、小四郎はふと祖父を振りむいた。宗右衛門は、髪は真白で痩(や)せている。年は五十八だった。六十になったら、城勤めをやめて小四郎に家督をゆずり、隠居すると日ごろ言っている。

息子が急死したあと、気の張りだけで家をささえて来た祖父の老いが、いたいたしいものにみえた。その祖父に、隠しごとをしているやましさが、ちくりと小四郎の胸を刺した。

三

——また、やっておる。

道場に入ると、小四郎は思わず舌打ちした。森雄之助が、矢口八之丞に稽古をつけているのだが、それは稽古というものではなかった。力にまかせて打ち据えている、としか見えない。

無住心剣流の藤井道場には、相撃ちを至極とするという伝統がある。上手の者に対しても相撃ちを覚悟で打ちこんで行く。その稽古の間に心魂も養われ、やがて一瞬早く相手を撃つ技も磨かれるという考え方である。ことに初心者ほど、技巧を念頭におかず、ひたすら打ち合うことを教えるので、ほかの道場から荒稽古だと言われるのである。

上手の者も、たとえ相手が下手の者といえども、相撃ちを目ざして打ちこんで来るのだから、気を抜かずに打ち据える。だが、上手にはおのずから上手のゆとりがあって、技倆が劣る相手に対して、いつも無残に打ち据えるということはしない。適当にあしらいながら稽古をつけるのが普通である。

森の打ちこみには、その配慮がなかった。八之丞の肩を打ったぴしりという音が、小四郎の耳にとどいた。だが八之丞はひるまなかった。うしろにとんで構えをとり直すと、もう一本と叫んでいる。

そして矢のように打ちこんで行った八之丞の竹刀が、森の胴をとらえた。だが同時に、森の竹刀は、うなりを乗せて八之丞の額を一撃している。八之丞はうしろにひっくりかえって、板の間にはげしい音を立てた。頭を打ったらしく、そのまま立ち上がれないでいる。

小四郎は、その様子を黙然と見つめていた。森の、八之丞に対して何か底意を含んでいるような態度に腹を立てていたが、八之丞にもさして同情はしていなかった。

小四郎には、時おり八之丞に対して、いまのようにひややかな気持が動くことがある。そういうとき小四郎は、育ちのいい少年の背後に、自分を捨てた母の姿を見ている。だがそういう気持のあとで、小四郎が不意に自分を嫌悪する気持に襲われるのも事実だった。男らしくないな、と自分をかえりみる。

そういう気持の動揺は、稽古にもあらわれて、小四郎が八之丞につける稽古は、必要以上にきびしくなったり、逆にやさしくなったりする。小四郎は、自分でそういう気持をもてあましていたが、まだ誰にも気づかれてはいないはずだった。

「またやってるじゃないか」

不意に声がして、おくれて来た篠崎鉄蔵が横に立っていた。鉄蔵も、森雄之助が何か含むところがあるように、二人の隙をねらって八之丞をつけまわし、荒い稽古をつけていることを知っている。

つい数日前にも、八之丞は森の稽古に引っぱり出されて、額を割られていた。

「なぜ、とめん」

鉄蔵は、いぶかしそうに小四郎を見た。八之丞はふらふらと立ち上がりながら、また竹刀を構えようとしている。

「あいつの根性をみているところさ」

「近ごろ、根性は出て来たぜ」

八之丞は、この道場に来る前に、四天流の道場に通っていたということで、はじめて竹刀を握ったわけではなかったが、移って来た当時は気の弱さが目立った。荒っぽい藤井道場の稽古におぞけをふるうようにみえた。

しかし小四郎と鉄蔵、それに時おり師範代の三谷容助がつける稽古を、どうにか耐え抜いた。そしておよそ半年たっている。

八之丞は、入門して来た当時にくらべると、身体つきもいくらかたくましくなり、竹刀の振りも鋭さが出て来た。同年輩の少年たちとなら、打ち合っても負けないところまで上達している。だが、まだ森の敵ではない。

「いかん。森にこわされるぞ」

鉄蔵が言って、前に出るようにしたのを、小四郎は肩を押さえて自分が出た。足がふらついている八之丞に、森は体あたりをくわせ、よろめくところを、また面を打った。

森の稽古の異常さは、ほかの連中にも見えたらしく、それまで稽古していた者も手を休めて、二人の様子を窺っている。まだ時刻が早く、三谷も、小四郎たちより年長の者たちも姿を見せていないので、道場は空いていた。それだけに、森と八之丞の異常な稽古ぶりは目立った。

尻もちをついた八之丞が、またふらふらと立ち上がった。そこに走り寄ると、小四郎は竹刀を出して、構えている森の竹刀を手荒くはじき、二人の間に身体をすべりこませた。

「何をする」

叫んだ森にむかい合うと、小四郎は低い声で言った。

「だいぶ楽しんだようだが、もういいのではないか」

「楽しんだ？　どういうことだ」
「そう見えたが、違ったか」
小四郎の鋭い凝視を、森はものも言わずににらみ返したが、急にふんと言ってその場所から離れて行った。たちまち、二、三人が阿諛するように森を取り囲んだ。
それまで鳴りをしずめていた連中が動き出し、道場には、また何ごともなかったように、竹刀を打ち合う声がひびきはじめた。
「森の相手をするのは、もうやめろ」
小四郎は、八之丞を叱りつけた。
「はあ、しかし……」
八之丞は、こめかみに出来た大きな瘤を手でおさえながら、抗議するように小四郎を見た。
「しかし、あのひとがあまりしつこく誘うもので」
「いいから、やめろと申すのだ」
八之丞は、ようやくはいと言った。おとなしそうな顔の下に、意外に強情な気性が隠されているようだった。森にはむろん腹を立てていたが、小四郎はそういう八之丞にも腹を立てた。

「控え部屋で、少し休め。身のほど知らずな真似をするからこういうことになる」
「まあ、そうぽんぽん怒りなさんな」
鉄蔵が寄って来て、にやにや笑いながら言い、八之丞の顔をのぞいた。
「だいぶ、手荒くやられたな」
「はあ、あのひとの稽古はきついです」
「こりゃ、少し冷やさんとだめだな。こっちへ来い」
鉄蔵は、そう言って八之丞を控え部屋の方に連れて行った。
その日の夕方、小四郎と鉄蔵は、三谷に言われて八之丞を家まで送って行った。八之丞は、控え部屋に横になっているうちに、気分が悪くなって少し吐いた。それで森と、小四郎、鉄蔵の三人は、三谷に呼ばれて叱られたのである。
だが、道場を出て歩いているうちに、八之丞はすぐに元気を取りもどしていた。
「あのひとは……」
と、八之丞は森のことを言った。
「私が気に入らん様子ですが、何かわけがあるのですか」
「貴公が番頭の伜だからさ」
と鉄蔵が言った。

「藤井道場じゃ、これまで森が一番家格が上だった。それで取り巻きにちやほやされていたのが、矢口が来てから少し風向きが変ったのだな。以前のようにはもてなくなったらしい」

「そんなことですか」

「そんなことさ。つまらん男だよ、森というのは」

「矢口も取り巻きなどつくらんように、気をつけることだな」

と小四郎も言った。それとなく八之丞に近づこうとする連中がいるのを、小四郎はみているが、八之丞の方にはそういう気がないらしいのだけは、好ましく眺めていた。

「はあ、十分に気をつけます」

と八之丞は素直に言った。

三百石の番頭の家は、びっくりするほど大きかった。小四郎や鉄蔵の家のように、生垣の上から庭がのぞけるような屋敷ではなく、黒板塀、長屋門の構えがいかめしかった。

「ちょっと、寄っていただけませんか」

と八之丞は門の前で言った。

「お二人のことは、父にも母にもいつも話していますが、母に一度お連れするように言われています。父はまだお城でしょうが、母はいますので」

「どうする？」

鉄蔵が小四郎を振りむいた。小四郎は、突然に胸がとどろいた。この門の中に、母がいるのだと思ったのである。思いがけない成行きに対して心構えが出来ていなかった。

「さあて」

小四郎はあいまいに言った。胸のとどろきをさとられまいと、軽く咳払いをした。

「寄ってみようじゃないか」

鉄蔵は好奇心をあらわにした顔つきで、こんな大きな家に入るのははじめてだ、と言った。小四郎がやはりあいまいにうなずくと、八之丞が先に立って、くぐり戸から中に入った。

玄関に入ると、八之丞は、ちょっとお待ちください、すぐもどりますからと言って、あわただしく上にあがって行った。広い玄関に、小四郎と鉄蔵は取り残された。

「寄るとわかっていたら、着る物をもう少しちゃんとして来るのだったな」

と鉄蔵が言った。鉄蔵の着物は、肩に継ぎがあててある。小四郎は黙って微笑した。だが胸の中は、何ともいえない不安に波立っていた。

遠くで八之丞の声がした。それに答える女の声がする。もの静かでふっくらとした声音だった。また女の声がした。八之丞と一緒に玄関に出て来るらしく、その声が近づいて来る。

「篠崎」

小四郎は不意に鉄蔵を振りむいた。

「急用を思い出した。悪いがおれは帰る」

おい、ちょっと待てと呼びとめる鉄蔵の声を振りきって、小四郎は逃げるように玄関を出た。小走りに門にむかいながら、小四郎は自分の顔が青ざめているのを感じた。先方が小四郎を自分の子とわかっているのかどうかは知らない。だが、いずれにしろ、死んだと教えられて来た母に会うということが、こわかった。会ったら、やはり平静ではいられないだろう自分自身もこわかったのである。

——しかし、会ってみればよかったかな。

ようやくそう思ったのは、佐内町の武家屋敷をはずれて川端に出たときである。母というひとに、一度は会ってみるべきだったかも知れない。その後悔が、急に胸に溢れて来た。千載一遇の機会をのがしたようにも思えて来る。

日暮れの河岸の道には、まだ人通りが混んでいた。その中をうつむいて歩く小四郎の胸に、孤児のような感情が生まれていた。

四

「得物は？　まさか真剣ではあるまいな？」

「いや、木刀だ」

「バカな。それじゃ真剣と同じじゃないか。約束の時刻はわかっているのか？」

「七ツ（午後四時）」

「もう間がないな」

小四郎はうなったが、すぐに決心してせわしなく鉄蔵に言った。

「貴様はすぐに矢口の屋敷に行ってくれ。八之丞を押さえるのだ。おれは森にかけ合う。いいか、八之丞を外に出してはならんぞ」

「よし、心得た。そちらは一人で大丈夫か」

大丈夫だと答えると、鉄蔵はすぐに玄関をとび出して行った。

小四郎は自分の部屋にもどるといそいで袴をつけ小刀を帯びた。そして袋に包んだ木刀を手にさげると、部屋を出た。茶の間の障子をあけると、縫物をしていた祖母が

顔をあげて小四郎を見た。
「おや、お出かけかえ？」
「はい。ちょっと道場まで行って参ります」
「おそくならぬようになされ。夜になると、またおじいさまの機嫌がわるくなるから」
「承知しました」
小四郎は玄関に出て履物をはいたが、ふと思いついて、また茶の間にもどった。
「忘れものかえ？」
「いえ」
小四郎は祖母の前に坐った。
「おばあさまに、少々おうかがいしたいことがあります」
「何であろうの？」
祖母は縫物を置いて、小四郎を見た。
「母上のことです」
「……」
「死んだと聞かされて育ちましたが、母上は生きておられましたな。いまは番頭の矢口主税どののお家のひとになっておられる。再嫁して生んだ子供が、いま藤井道場に来ております」
「やれやれ」
と祖母は言った。びっくりした様子はなく、笄を抜くと、小さな髷をのせた頭をちょっと掻いた。
「いつかはわかることと思わぬでもなかったが、そのようにして知れるものかいの。それで？」
祖母は、いたわるような眼を小四郎にそそいだ。
「母親の何が知りたい？　ん？」
「母がこの家を出たのは止むを得ぬことと思います。だがその去り方が、逃げるようにあわただしかったというではありませんか。それはなぜです？　母は元来そういうひとでしたか？」
祖母はゆっくり首を振った。そのままうつむいて、黙っていたが、やがてため息をひとつついて、話し出した。
「そのことがあるから、いっそ小四郎には知らせぬ方がよかろうと、おじいさまとも話したのじゃが、さて、そなたがそこまで事情を知っているなら、話さぬわけにもい

くまいの」

「……」

「おじいさまには、内緒ぞ」

伊庭重助は、乾櫓の石垣修理の責任を負って自裁したが、修理は重助ひとりが指図したわけではない。図面をひき、石を選び、石工、人夫の手配りをした上役がいた。普請奉行助役の斎賀藤兵衛である。つまり美尾の父、重助の義父である斎賀が、その工事の全般を指揮したのである。

修理の現場を指図したのは、たしかに伊庭重助だったが、石垣崩壊の責任は、当然上役の斎賀、さらには普請奉行にもおよぶべきものだった。だが重助が腹を切ったので、上役に対する処分は軽い譴責で済んだ。

奇怪だったのは、そのあとの斎賀藤兵衛のやり方だった。重助が自裁したとき、美尾は臨月の大きな腹を抱えていた。小四郎を生んだのも、夫を失った涙がまだかわかぬ間のことである。そこまでは、藤兵衛は沈黙していた。だが、美尾が身二つになると、早速に美尾をひき取りたいと申し入れて来たのである。

「それが重助の四十九日の法事も済まぬうちの話じゃぞ」

と祖母は言った。

伊庭家では、美尾を無理にひきとめておく気はなかった。子供ひとりを生んだとはいえ、美尾はまだ十九だった。伊庭家を離れれば、どこにでも再嫁出来る。小四郎の母親として、伊庭家にしばりつけておく気はなかった。

だから藤兵衛の言うがままに、美尾を伊庭の家の籍から抜いたが、斎賀の家の情の冷たさは胸に残った。

斎賀藤兵衛が、なぜあわただしく娘を実家にひきとったか。そのわけが腑に落ちたのは、およそ一年ほど経ったころである。伊庭重助は、藤兵衛と普請奉行の松根甚五右衛門に因果をふくめられ、責任を一身にひきうけて腹を切ったのだという噂が流れた。自裁したその夜、重助が斎賀藤兵衛と一緒に人目をさけるようにして、普請奉行の屋敷から出て来たのを見た者がいる、という話も聞こえた。

おじいさまは、激怒して斎賀の家に乗りこむと息まいたが、わたしが必死にとめたのだと祖母は言った。

「そう聞けば、なるほど藤兵衛どのの、あとの仕打ちもよく腑に落ちる気はしたがの。しかし確かな証拠はない話じゃ。それに、さわいだところで、重助はかえらぬと、ばばはおじいさまを諫めた」

「……」

「気の毒なは美尾よ。そなたの母は、重助に死なれて涙もかわかぬうちに、今度はそなたと別れねばならなんだ。実家へは帰りとうないと申した。ここへおいてくだされと、ばばの膝にすがって泣いたことをまだ忘れぬ。いまはしあわせかも知れぬが、あのころは、こんなに不しあわせな娘が、またとあろうかと、ばばも手をとって一緒に泣いたものよの」

——八之丞を、森と立ち合わせてはならん。

家を出て、宝物町にある森の家にいそぎながら、小四郎は胸のとどろきをおさえかねた。

森が八之丞に試合を申しこみ、八之丞がそれを受けたと知らせて来た鉄蔵の言葉を思い出していた。森は八之丞に、先輩を嘲笑する言動があったと言っているらしかったが、それは口実だろうと思われた。森雄之助には、八之丞が藤井道場に入門して来たころから、含むものがあったのだ。

——バカな奴だ。

二つも年少の相手に、試合を申しこんだ森の大人げなさにも腹が立つが、その申しこみを受けた八之丞にも憤りがわいて来た。

万一のことがあれば、母がどれほど嘆くか知れない、と思うと、眼の前に八之丞がいれば殴りつけたいほどの腹立ちがこみ上げてくる。母は、十分にひとの嘆きをみたひとなのだ。これ以上の悲しみをあたえるべきでない。

殴りつけてやりたいと思う腹立ちのなかに、小四郎ははじめて、八之丞に対して血を分けた弟の無分別を怒る気持が動いているのを感じた。あれは母の子なのだ。

森はすでに家を出ていた。小四郎はすぐに五間川の河岸まで降りて、河岸ぞいの道を北へいそいだ。町をいくつか抜けると、あたりは、まばらに百姓家が散らばる町はずれの畑地になった。

その畑がつきて、その先に八里ヶ原と呼ぶ未墾の荒れ地がひろがるところに、巨大な一本杉がある。川ぞいの道を、小四郎が近づいて行くと、杉の陰から人影があらわれてじっと小四郎を見まもった。森雄之助だった。

「なんだ、貴公か」

と森は言った。言いながら、森の眼は、小四郎が提げている木刀の包みにそそがれている。

「立合い人で来たのか」

「いや、違う」

小四郎は立ちどまると、袋の口をほどいて木刀を取り出した。

「子供が相手では不足だろうと思ってな。おれがかわりに来た」
「ふん、矢口め！」
森は鼻を鳴らした。
「あいつ、臆病風にさそわれたな」
「いや、矢口はおれが来たことを知らん」
小四郎は強く言った。
「だいぶ大人げない話だからな。貴様のためにも、大人の試合にしてやろうと思っただけの話よ」
「よかろう」
森は薄笑いすると、手にしていた木刀を捨てた。
「貴様でもかまわん。しかし貴様とは木刀ではやらん。刀を抜け」
「……」
「それでもやるか」
小四郎は黙って草履をぬぎ捨てた。下げ緒をほどいて小刀の鯉口を切ると、摺り足でうしろにさがった。
森雄之助に負けるとは思わなかった。道場では互格の勝負をしている。だが森の膂力は警戒しなければならん、とちらと思った。

森も小刀の鯉口を切った。その姿に眼をそそぎながら、小四郎はひややかな声をかけた。
「貴公が前にいた菅生道場のことは知らん。だが藤井道場では相撃ちが極意だぞ。それは承知だろうな」
一瞬森の顔がこわばった。だが、すぐにどなるように答えた。
「わかっているさ。来い」
森は刀を抜いた。十五には見えない大柄な身体に、構えた小刀が小さくみえた。
――ここで、死ぬことになるかも知れんな。
ゆっくり抜いて構えながら、小四郎はちらとそう思った。まだ見たことがない母の顔を思いうかべようとしたが、それはおかつの顔になった。心にうかんだその顔を振り切るように、小四郎は足もとを固めると声をかけた。
「行くぞ」
はじめに斬りこんだのは、小四郎の方だった。森は口ほどにもなく逃げた。また小四郎が斬りかけ、森は逃げた。だが同じことが数度くり返されるうちに、森は肩と腕を斬られ、手首まで血がしたたった。

その血が森に覚悟を決めさせたようだった。青ざめた顔の眼がつり上がった。森はすばやく足を送って三間ほど距離をあけると、道場の稽古のときのように、わめくような気合いをかけながら走り寄って来た。

小四郎も前に出た。肩に薪で打たれたような鈍い痛みが走ったが、小四郎は同時に斬りこんだ剣先が森の肋を斬ったのを感じた。振りむくと、森が刀を投げ出してどっと倒れるところだった。

その姿を見まもりながら、小四郎はようやく柄からひき放した片手を、斬られた肩にあてた。ぱくりと着物が口をあけ、手でさぐると肉が割れているのがわかった。噴き出す血に指が濡れる。

——血をとめねば……。

そう思ったとき、小四郎は視界が斜めにかたむくのを感じ、ついで身体が、どこまでもやわらかく地面に沈みこんでゆく感触にとらえられた。

気がついたとき、最初に眼に映ったのは、八里ヶ原の荒れ地を染める夕焼けのいろだった。

——日が暮れるところだな。

と思った。次に小四郎は、自分が誰かのやわらかい膝の上に抱えあげられているのを知った。顔を動かすと、女の白い顔が、おどろくほど近く自分をのぞきこんでいるのが見えた。

「気がつきましたか、小四郎どの」

と女は言った。その声に聞きおぼえがあった。矢口家を訪れたとき、奥から聞こえて来た声だ。母だと思った。

小四郎は身体を動かそうとした。だが身体は石のように重く、肩に激痛が走っただけだった。

「動いてはいけません。いま、八之丞と篠崎さまがひとを呼びに行きました。すぐに来ますからじっとしていなさい」

「森は？」

「ひとが来て運んで行きました。あなたと同じに、大怪我をしましたが、命に別条はありません」

「……」

「何という無謀なことをしたものであろ」

小四郎は黙って眼をつむった。いい匂いがした。母の匂いだった。

「でも、八之丞のためにしたのですね。あなたには、八之丞が弟だとわかっていたのですね」

美尾はそう言うと、小四郎の背にまわした腕にやわらかく力をこめ、頬に頬をつけた。小四郎は、頬が濡れるのを感じた。美尾が涙を流しているのだった。母の涙が、小四郎の頬をつたい落ちた。

——いや、違います、母上。

と小四郎は、心の中でつぶやいた。八之丞のためではなく、あなたのためにしたことです。そう言いたかったが、母という言葉が出て来なかった。

八之丞や鉄蔵が来る前に、ひとこと母上と言ってみたい、と小四郎はぼんやりとかすむ意識の中でそう思いつづけ、その思いのために、傷の痛みを忘れていた。

嚔

一

その日登城すると間もなく、布施甚五郎は家老の鬼頭弥太夫に呼ばれた。
「ご家老がもうお出になっておられるか」
甚五郎は、呼びに来た小姓組の黒江という少年に言った。
「朝早くから登城されており申す」
と黒江は言った。
いやな予感がした。鬼頭は今月の月番であるが、登城するのは大方昼近くである。早朝から城に登っているなどということは異例だった。用件は、ろくなことではあるまい、と甚五郎は思った。
「それがしのほかに、誰か呼ばれておるか」
「いえ、布施どのをお呼びしろ、とそれだけでござる」
俺に何か落度でもあったか、と甚五郎は自分を振り返ってみるが、思い当たることはなかった。甚五郎は馬廻組に属しているが、月のうち十日出仕すればよい。出仕すると、組頭の指図を受けて城内の馬匹倉と呼ばれる厩を巡視したり、武具を点検したりするだけで、あとは定めの間に詰めていればよかった。勤めの上で失態があるという難しい仕事ではない。

家も隠居した父のほか、妻の弥生、半年前に生れた息子の総之助だけという人数で、至極円満に暮らしている。
甚五郎は家老の呼び出しを詮索することを諦めた。淡い日射しが落ちている長い廊下を、黒江の後に従って行くと、廊下に漂っている冷気が、首筋を刺した。廂から青い空がのぞいている。だがこういう晴れた日の後に、不意に雪がやってくるのである。
鬼頭は、障子を閉めた部屋で、唐金の火鉢にしがみついていた。首に襟巻を巻いて、それでも寒いとみえて、背を丸めている。
「早速じゃが……」
鬼頭は黒江を去らせると、すぐに言った。
「ご上意が出た。殿のご決心がついて、織部さまをご成敗なさることに決まっての。ついては……」
鬼頭は咳払いをし、漸く火鉢から小柄な身体を離すと、威儀を正した。
「布施に討手を申しつける。承れ」

甚五郎はぎょっとした。

織部というのは、藩主左近将監光晃の異母弟織部正吉龍のことである。幼時から利発の噂があった。左近将監は、この異腹の末弟を愛して、五年前幕府に願って、領地六万三千石のうち一万石を分け、小形郡を采領させて支藩とした。

だが、その頃から、織部正に悪い噂が立った。領地に入部すると、やがて色を好み、酒に溺れるようになったという。小形郡は山をへだてて、城下からもっとも遠く隣国との境にある。噂はその遠い土地から流れてきた。百姓の年貢を、本藩の二割増しにし、また郡代屋敷に住んでいたのを新たに居館を作る工事を起こし、荒れ地に無理に疎水を通そうとして、百姓に重い夫役を課している、と聞こえた。

夫役を拒んで反抗した百姓五十人を捕えて、牢に繋いだため、小形郡の百姓の間に、不穏な動きが出ている、という噂もあった。事実本城に「政事旧ニ戻サレタキコト、一郡泣訴」しているという嘆願書が提出され、城中では、この嘆願書をめぐって、左近将監の前で激論が闘わされたということだった。

左近将監は、急遽幕府に願い出て、小形郡一万石を本藩に回収する処置をとった。僅か二年足らずの間のことである。

藩では織部正から一万石を取り上げ、本領三方郡の中に一千石を与え、城下に住ま

わせて騒ぎを鎮めたが、この措置のため、左近将監は幕府のお叱りを受けた。三年前の明暦元年のことである。左近将監は腹を立て、以来織部正に目通りを許していない。

だが織部正の素行は、城下に戻ってからも少しも改まらなかった。日夜酒を絶やさず、女色に耽っていると、大目付小妻滝蔵から度々報告が出された。

そのうち奇怪な噂が流れた。去る七月に御槍組の山崎年弥が、妻女を殺害して自分も腹を切った。ある夜山崎の妻が織部正の屋敷脇を通ったとき、中に連れ込まれて織部正に汚されたのが原因だというのであった。

筆頭家老月岡但馬以下の重臣が、藩主左近将監に対して、織部正に強硬な措置をとるよう迫っていると、ひそかな噂があった。

「いかがした？」

と鬼頭は言った。甚五郎が一度は頭を下げたものの、そのまま黙然と俯いて、返事をしないからである。

「しかと返事をせんか」

「恐れながら……」

と甚五郎は言った。

「そのお役目、ちとそれがしには大役に過ぎ申す。余人を以て、代えて頂けば、有難

く存じまする」
「余人だと？」
鬼頭は顔をしかめた。
「上の者の相談で、貴様と決まった。代るべき余人などおらん」
「藤井源助がおりましょう」
と甚五郎は言った。藤井は近習組にいて、城下の越田道場の師範代を勤めている。一刀流の技倆は師の越田庄兵衛房友を凌ぐといわれ、宝山流の小具足術でも精妙な術を使う。甚五郎は、藤井と三度立会い、二度負けている。藤井は二十八で、甚五郎より三つ年上である。
「藤井は病気じゃ。いま寝ておる」
と鬼頭は言った。
「藤井か貴様かという相談だったが、藤井が秋口から肝を病んで寝ているというので、異議なく貴様と決まった。文句を言わずに承れ」
鬼頭は言ってから、また背をまるめて火鉢にしがみついた。そのままの恰好で、探るように甚五郎の顔を上目遣いにみた。
「それとも何か。布施は臆したか」

「いや」
甚五郎は顔を挙げ、胸を張った。そう言われては命令を受けないわけにはいかない。
「いかにも、お受け致しました」
「よろしい」
鬼頭は満足したように言い、そばに置いてある茶道具を使って茶を入れ、自分だけ飲んだ。
「それでは手順を話す」
左近将監光晃は、七日後の十月二十日に、城中に織部正を呼ぶ。一盞の後、後座の茶室で、茶を振舞う。その後藩主は城中に戻り、陪席する月岡但馬、鬼頭弥太夫らは、暫時織部正と話があって、共に茶室を出る。そこに甚五郎が待ちうけて織部正を刺すのである。
「織部さまは、わが藩の悪疾とも申すべきおひとでな。すでに一度、江戸のご不快を蒙っているわが藩にとって、この方がなさることは目放しならん。下手をすると藩の命を縮め兼ねないおひとだ。遠慮はいらん。きっぱりとやれ」
「畏りました」
「さきほど辞退した理由は何じゃ」

「は。織部さまはお上の血縁。恐れ多いことと存じますれば、一応……」

「なに、殿も覚悟を決められた。近頃は織部さまにきつくお腹立ちである。気遣いはいらんのだ、布施」

廊下を詰の間に戻りながら、甚五郎は気持が塞いだ。

甚五郎が上意討の討手をためらったのは、鬼頭に言ったような、尋常なことではない。ほかに理由がある。

甚五郎には、ひとが知らない奇癖がある。奇病と言ってもよいが、病いというには軽いものなので、誰もそれに気づいていない。妻女の弥生だけは知っている。

嚔持ちである。心身が緊張したときに、それが激しく出る。織部正を討ちとめるとき、それが出るだろうことは、すでに明らかだった。嚔のために剣を揮えない恐れがある。甚五郎の嚔はそういうものだった。

廊下をゆっくり戻りながら、甚五郎はそれを思っただけで、鼻腔の奥に微かな掻痒感が動くのを感じ、憂鬱になった。

二

この奇癖に、最初に気づいたのは、元服した翌年に、初めて登城し、藩主左近将監に拝謁を賜わったときである。

藩では、毎年正月七草の日に、前年に元服を終ったお目見得以上の藩士の子息を城中に呼び、藩主のお言葉を賜わるのが恒例だった。雪の道を、裃姿に威儀を正し、父の勢左衛門に連れられて城中に向かうときから、甚五郎は緊張していた。

賜謁は城中の大広間で行なわれる。前方に子弟が二列に並び、その背後に父親たちが並ぶ。やがて左近将監が席に着くと、その年は番頭の岸田庄八が、一人一人を紹介した。

甚五郎の番が来た。甚五郎は完全にのぼせていた。手足はこわばり、身体全体が自分のものでないように、心細く空中に浮いている感じである。それだけならよい。甚五郎は、鼻腔にくすぐられるような掻痒感を感じていた。それが何の徴候であるかは、甚五郎には解っている。

指一本動かすのも憚かられる厳粛なこの席で、嚔が出ようとしているのである。そのことに気づくと、甚五郎は必死にそれをこらえようとした。眼をつぶり、鼻を曲げ、口をゆがめて、出かかる嚔を押し殺そうとした。甚五郎の席は前列である。手を動かすことも出来ない。

「馬廻組百三十石、布施勢左衛門が後継ぎ、甚五郎でございます」

岸田は言い、甚五郎が幼年から剣の指南所に通い、城下の原庭道場で神陰流のすでに目録を取っていることを披露した。

ここで、甚五郎は「布施甚五郎にござります」と姓名を申し上げて平伏しなければならない。だが、そのとき甚五郎の鼻の奥の掻痒感は極限に達していた。

「布施……」

と言いかけて口を開いたとき、嚔が激発した。それも、御前を憚らない豪快な嚔が、立て続けに三つも出たのである。背後の親達の席から失笑が洩れた。

左近将監は苦い顔をした。番頭の岸田は、凄い眼つきで甚五郎を睨んでいる。甚五郎は縮み上がった。背後の席で、律儀な父親がどんなに肩身の狭い思いをしているだろうと思うと、大きな身体が竦むようだった。

お詫びを申し上げ、漸く姓名を名乗り終ったとき、左近将監の声がはっきり聞こえた。

「粗相な男じゃな」

姓名を申し上げると、藩主からひと言言葉がある。「よい身体じゃの」とか、「学問が出来るか。精出せい」とかいった類いであるが、甚五郎にはその言葉がなかった。

嚔は大事なときに出た。

例年城下の八幡神社の秋の大祭に奉納試合が行なわれる。

十九の時、甚五郎は勝ち進んで、最後に同じく勝ち進んできた藤井源助と顔が合った。藤井はすでに藩随一の遣い手として知られている。ここで勝てば、甚五郎の剣名は一度に上がるところだった。

だが木剣を構えて向い合ったとき、甚五郎は、鼻の奥に例のむず痒いものが動くのを感じた。一度意識すると、その感じはしっかりと甚五郎をつかまえて放さず、際限なく膨れ上がってくる。木剣は構えているものの、甚五郎の戦意はみるみる萎えた。甚五郎の意識は、藤井から離れて鼻の奥深いところにうごめいている、微妙な感覚に集中している。掻痒感は、一斉に騒ぎ立てたり、不意に消えたりしながら、嚔になって外に飛び出す隙を狙っていた。

藤井の眼に怪訝な色が浮かび、やがて飛び込んでくると、無雑作に額の前一寸のところまで木剣をつめた。

「参った」

いうと同時に、甚五郎は腰を折って大きな嚔を二つした。快感が身体を走り抜けた。

「どうした？」

藤井は寄ってくると、心配そうに声をかけた。

「具合いが悪いか」

「いや」

甚五郎は首を振ったが、まだ茫然としていた。藤井と十分に打ち合えなかった口惜しさが込み上げてきたのは、席に退いて鉢巻を解いているときだった。

妻の弥生を娶ったのは二年前である。

道場仲間の橋本民之助が、紹介の労を取り、橋本の家で会って、その日に心を決めたのだが、その縁談は、甚五郎の嘘のために、危うく流れるところだったのである。

「親戚に年頃のがいるが、一度見に来ないか」

と、橋本が言ったのは二年前の三月であった。

橋本は父親を早く亡くして、十八で家督をついだ。家督をつぐと同時に嫁をもらい、二年前のその時は二人の子持ちだった。そのせいか、橋本には老成ぶった面がある。

橋本の家は、父親が江戸留守居役を勤め、三百五十石の高禄だったが、橋本自身はごく気さくな男である。剣の腕はさほど上達しないが、甚五郎は橋本のさっぱりした気性が気に入って、それまで行き来していた。

橋本が会わせるという娘を、ひと眼見ようかと思ったのは、そういう橋本の人柄に誘われたあんばいだった。

「あまり美形とは言えんぞ」

と橋本は弥生のことを、前もってそう言った。

「ただ小太刀を遣う。俺には解らんが、かなりの腕前らしいな。そのへんが、貴公に似合いかも知れぬ」

橋本は、自分は一向に腕が上がらない人間らしく、しきりにそのことを強調した。

鷹匠町にある橋本の家は、甚五郎の家とはくらべものにならない広い構えで、庭には桜の大木があり、開け放した縁側から三分咲きの見事な桜の花が見えた。

弥生が型のごとくお茶を運んでくると、橋本は、これも型のごとく、

「少々布施どののお相手をしなさい」

などと言って座を立った。

後に甚五郎と弥生が残された。あまり美形ではない、などと橋本は言ったが、弥生は振袖に身を包み、匂う花のように甚五郎には見えた。やや丸顔で、小麦色の肌が、難といえば難だが、小さな口もと、伏せた眼の睫が可憐に見える。肌がつややかに光り、小柄ながら身体が丈夫そうなのも好もしい。

――なんと可憐なおひとだ。

と甚五郎は思う。何か言わなければならぬ、と思ったが、甚五郎の舌はこわばっている。

——年若い女子と向かい合ったのは初めてだ。

と思った。

そう思ったとき、甚五郎は、あの馴染み深い掻痒感を鼻腔の奥に感じた。

——これはいかんぞ。

ぞっとしたとたん、掻痒感は一気にじわりと膨れ上がった。甚五郎は狼狽して弥生から眼を逸らし、庭の桜を見たが、無駄だった。眼はうろたえて花の色を探ったばかりで、その間にもうごめく嚔の気配に、甚五郎の意識はたちまち引き戻される。

鼻を曲げ、口をゆがめ、眼を開いたり閉じたりして、暴発しようとする嚔を殺しながら、甚五郎は絶望的な瞬間を待った。

そっと弥生が顔を上げた。

弥生は甚五郎が何か話しかけるものと思って、つつましく俯向いていたのだが、何の音沙汰もないので、訝って顔を挙げたのである。

弥生の前に、甚五郎の奇妙な表情があった。弥生は一瞬呆気にとられた顔になったが、忽ちさっと顔を染めた。

「布施さま」

弥生は鋭い声で言った。

「わたくしを愚弄なさるおつもりですか」

弥生は甚五郎の奇妙な表情を、自分を嘲弄していると取ったのである。鈴を張ったような眼で甚五郎を睨んだ。

甚五郎はうろたえた。両掌を、壁を塗るあんばいに前に押したてて弁解した。

「いやいや、決して。誤解されるな、弥生どの」

「お黙りなさい」

と弥生は叱咤した。弥生は屈辱で身体が顫えるようだった。布施に会わせる、と橋本から聞いたとき、弥生の胸はときめいた。弥生は布施の評判を、一度ならず耳にしている。剣は藩中一、二を争う腕だという。それだけでも、小太刀を嗜む弥生の胸は憧れに騒ぐ。その上布施は、丈高く立派な男振りだという。

弥生の胸はときめいたが、同時にうら哀しい気分があった。弥生は自分を不器量だと思っている。弥生の母親は色白で面長の美人だが、弥生は母親の良いところをひとつも譲り受けず、丸顔の父親に似てしまった。鼻恰好がちんまりしているところまで、父親譲りである。甚五郎と会うことに、弥生は希望を持たなかった。

——布施さまのような立派な殿御には、似合いますまい。

弥生はただ、布施と剣の話でもしてみろ、という橋本の言葉を頼りにやってきたのである。振袖さえも気恥ずかしい。

弥生には引け目があった。それが布施の表情をみて、頭に血がのぼった。布施の表情はあからさまに言えば、下を向いた弥生に向かってべっかんこうをしていたのである。

「不器量は、自分で承知致しております。でもそのようなお顔をされるいわれはありません」

弥生は言いつのったが、不意にもの悲しくなった。正直に言った。

「あなた様のようなご立派な方に、もしやと思って着飾ってきた、自分の浅墓さが悔まれます」

弥生の眼に、ぽつりと浮かんだ涙が、甚五郎を一層あわてさせた。失礼致します、と一礼して立ち上がろうとする弥生を、甚五郎は団扇で煽ぐように、両手を煽ってなだめる。

「お待ちあれ。暫時お待ちあれ。お怒りはごもっともだが、思い違いじゃ」

「……」

「嘘でござる」

「……？」

「さよう。それがし嘘をこらえただけでござる」

「嘘……でございますか」

弥生は怪訝そうに首をかしげて、甚五郎をみた。立ち上がるのは止めている。

「さよう。厄介な病いでござる」

甚五郎は重々しくうなずいた。弥生に、嘘との、そも馴れ染めの初めから、話した。

甚五郎は雄弁に語った。

最後にもう一度重々しく念を押した。

「このことを、ひとに語ったのは初めてでござる。さればひとには洩らされるな」

「聞いたのは、わたくしが初めて……」

弥生は満足そうに言った。それから口に手をあててとめどなく笑い出した。ころころとよく響く弥生の笑い声に、やがて甚五郎の豪快な笑い声が重なった。

漸く笑いが納まった弥生が言った。

「失礼致しました。でもあまりにおかしゅうございました」

「それがしも、弥生どのに打明けて、何やら心が晴れ申した」

甚五郎は言ったが、ふと首をかしげた。
「不発じゃったな」
甚五郎は呟いて、なおも首をかしげた。あれほど膨れ上がった嚔が、不発だったことに気づいたのである。
「どうなされました？」
弥生が聞いたとき、甚五郎は手を打った。
「相わかった」
甚五郎は昂奮している。
「弥生どのが、きつい声でそれがしを叱られた。その拍子に嚔が引っ込んだらしゅうござるな。いや、それに間違いござらん」
「まあ、そのようなことが」
弥生は顔を赤らめ、消え入りたげに俯いた。
――なんと可憐な。
甚五郎は再びそう思った。そう思ったとき、甚五郎は、弥生との、このすばらしい出合いを完結するにふさわしい、天啓のような殺し文句を思いついた。
「さよう。弥生どののお叱りが嚔の良薬でござった」

甚五郎は重おもしい声で続けた。
「されば、弥生どのに生涯わがそばにいてもらうのが、嚔の病気のためによろしかろうと存ずる。いかがでござろう」
「生涯、おそばに……」
弥生は恍惚とした表情で呟いた。
このときは禍が転じて福になった。だが、今度はそういうわけにはいくまい、と甚五郎は思う。

三

上意討ちの決行が二日後に迫った日、甚五郎は弥生にそのことを打明けた。話を聞いた弥生の顔色が変った。
弥生は娘のときに小太刀を習い、目録をもらった。いまは子持ちの主婦で、家事にかまけているが、剣の何たるかを知っている。甚五郎の嚔は、いざというときに、彼の剣を無力にする危険があるのだ。
「お断わりすることは出来ませんか」

と弥生は言った。必死な表情になっている。
「一たん引き受けておる。もうお断わりは出来ん」
甚五郎はきっぱりと言った。
「藤井はどうかと、一度は申し上げた。だが彼は病気じゃ。どうにもならん」
「藤井さまに……」
弥生はその言葉に縋りついた。
「一度お会いになって、ご様子をうかがわれてはいかがでございますか。まだ日にちがございますもの」
「そのとき嚔が出るかどうかは解らんのだ。まあ、そう心配するな」
そうは言ったが、甚五郎は藤井源助に会ってみる気になった。
鉄砲町の家を訪ねると、藤井はやはり寝ていた。甚五郎は落胆したが、取次に出た藤井の妻女が、源助が会いたいと言っていると勧めるので上がった。
薬くさい香が立ち込めている座敷に通されると、藤井が床の上に胡坐をかいていた。
「こんな恰好で済まん」
と藤井は言った。藤井は肩の上から掻巻を羽織っている。
「ぐあいはどうじゃ？」

と甚五郎は言った。
「やっと起き上がれるようになったが、ひどいめにあった」
藤井は笑ったが、その笑いには弾みがない。藤井は小柄だが、浅黒い精悍な風貌をしている。その浅黒い顔も、寝巻の裾から突き出ている脛も、どことなく生気がなかった。
——これでは無理だ。
と甚五郎は思った。
甚五郎は、藤井の妻女が運んできた餅菓子を喰い、茶を啜りながら、城中の話や、甚五郎がまだ時おり通っている原庭道場の話などをした。
「萱野道之助というのが筋がよい。お弓頭の息子じゃ」
お、長居してしまった、と呟いて甚五郎は背後の障子を振り返り、坐り直した。さっきまで日が射していた障子が、青白く日暮れの翳を映し始めていた。初冬の日没は、あっという間にやってくる。
「では、また来よう。失礼する」
「ちょっと待て、布施」
と藤井は言った。ダルマのように着膨れた恰好のまま、藤井の眼はじっと甚五郎に

注がれている。
「何か、話があるのではないか」
「いや」
と言ったが、甚五郎は不意に苦笑して、もう一度胡坐に戻った。
「貴公の眼は欺けんな。実は相談を持って来たのだが、貴公の様子を見て、まだ無理じゃと判断した」
「話してみろ」
と藤井は言った。
藤井は百石取りの近習組で、勤めも違い、通っている道場も流派も違うが、甚五郎は、十九の時八幡神社で初めて藤井と試合をしてから、深く藤井と許し合ってきた。組の者とも、道場仲間とも違う、心の通い合いが藤井との間にはある。
甚五郎は、他言するな、と前置きして、上意討ちの一件と嘘を打ち明けた。
「嘘の件を、もう少しくわしく話してくれ」
と藤井は言った。その表情には笑いはなく、鋭い眼になっている。甚五郎は、初めからの顛末をくわしく話した。
「わかった」

藤井は深くうなずいた。藤井はさすがに、甚五郎の懼れを、正確に理解したようだった。眉を寄せて呟いた。
「俺が代れば一番いいようだが、この身体ではのう」
不意に藤井は顔を挙げた。
「貴公に、俺は一度敗れている。見事な太刀筋だったが、あの折は貴公は僅かもあがっておらなんだ。あれはなぜだ？」
八幡神社の奉納試合で、甚五郎は二年続けて藤井に敗れたが、三年目に勝った。
「あのときは、初めから自信があったぞ」
「だから、それはなぜだと聞いておる」
甚五郎は首をひねった。そして漸く思い出した。
試合の二日前、原庭道場で遅くまで剣の工夫をこらしていたとき、一人の浪人者がやってきて試合を申し込んだ。修業のために諸国を廻っている者だ、と名乗り、お教え頂きたいと言葉は丁寧だったが、男の態度には満々たる自信が見える。
男の流儀が一刀流だと聞いて、甚五郎は道場に上げた。道場では他流試合を受けない定めだったが、甚五郎は男に木剣を渡し、道場の床に向かい合った。この立合いは、嘘など出るひまもなく、甚五郎が圧勝した。男の技倆はかなりのものだったが、藤井

源助と立合っている甚五郎からみると、男の太刀筋は裸をみるように透けて見えたのである。

奉納試合で藤井と向かい合ったとき、甚五郎は、逆に二日前に破った浪人者の太刀筋を思い出していた。心のどこかに、そのときの余裕があった。

「つまり、それがしが見えたわけじゃ」

と藤井は言った。

「自信ということかな。相手が、そも何者か十分に解らんから、貴公は心がこわばり、奇妙な嚔が起きるのかも知れんな。その証拠に……」

藤井は指を折った。

「殿に初めてお目通りしたとき、それがしと立合ったとき、お内儀どのに初めて会われたとき、ほかもそうじゃ」

「そうかも知れんが、そうだとしたら一そう事じゃ」

と甚五郎は言った。

「それがしは織部さまを知らん。会うのは今度が初めてじゃ」

「織部さまは、正体が見えておる」

と藤井は励ますように言った。

「小形郡で、苛政をなされた暴君じゃ。これがひとつ。山崎年弥の内儀を攫って、わがものとなされた。高い声では申されぬが、犬畜生の所行じゃな。そういうお方じゃ。臆することなど、ありはせんぞ、甚五郎」

藤井の家を出て間もなく、甚五郎は酉の上刻（午後六時）の鐘を聞いた。鐘は雀町の端れに広大な伽藍と敷地を持つ泉龍寺のもので、泉龍寺の大鐘は、城下町の隅々まで届く。

細い月が空にあった。甚五郎は襲ってくる寒気に身顫いした。寒気は、やがて来る雪の気配を含んでいる。

まだ数軒、路上に灯の色をこぼしている商家の町通りを過ぎて、御成町に入って間もなく、甚五郎は、前方に人がざわめく声を聞いた。罵しり声が聞こえ、その間に鋭い掛け声のようなものが混じる。

……喧嘩か。

と思った。小走りに甚五郎は駈けたが、駈けながら、そこが織部正吉龍が住む屋敷の、長い塀沿いの道であることに気づいた。

ぼんやりと見えてきた。塀にぴったり背をつけている小柄な人間を、脇差を差した男が一人、無腰の男が二人、三方から囲むようにして動いている。

飛び込んで行った男が、わッと叫んで後に逃げた。塀際の人間は、手に棒のようなものを持っているらしく、すばやく動いた身体から繰り出されたものが、したたかに男の頭を打ったようだった。月のために、路の半ばまで塀の影がのびて、男を打った者の姿はよく見えなかった。

脇差の男が、刀を抜くのが見えた。五間ほどのところに立ち止っている甚五郎の姿には気づかないらしい。

「女、おとなしく来ないと斬るぞ」

男は威嚇すると、刀を構えた。塀際の人間は黙っている。

——女？

甚五郎がゆっくり前に進んだとき、男が刀を振り下ろした。峯打ちだな、と甚五郎は見た。そのとき、男と摺れ違うように路上に身体を転じた者の、鋭い気合いが甚五郎の胆を縮み上がらせた。甚五郎は叫んだ。

「弥生！」

一斉に甚五郎の姿を振り向くと、男たちは無言で逃げて行った。早い足で、姿はたちまち夜の色に紛れた。

「……」

弥生は、無言でしがみついてきた。その身体が顫えているのを、甚五郎はしばらく抱いていたが、やがて、

「いまごろ、なに用あってこのあたりをうろついているか」

と叱った。

「実家に呼ばれて、遅くなりました」

お許しなさいませ、と弥生は謝った。

「これは何だ？」

甚五郎は、弥生が握りしめている棒をみた。年寄りが用いる杖だった。それが弥生の災難を救ったらしい。

「父が用心のためにと持たせました」

弥生の指はこわばって、杖から離れなかった。一本一本の指を、力をこめて解き放してやりながら、甚五郎は呟いた。

「それにしても、奴らは何者だ？」

呟いたが、甚五郎には解っていた。男たちは、織部正の屋敷から出てきたに違いない。

——噂は本当だったようだな。

と思った。山崎の妻女は、いまの弥生のようにして、路上から拉致されたのだろう。

――犬畜生じゃな。

藤井の言葉が甦ってきた。それなら遠慮することはない、と思った。

四

茶室の外の柴折戸のそばで、甚五郎は跪いて一行を迎えた。雪冷えを含んだねずみ色の雲が、城の上にひろがっている。

甚五郎は枯草の上に膝をつき、頭を垂れていたが、左近将監が通り過ぎると、僅かに顔を挙げた。大柄な目鼻立ちの立派な顔の男が、甚五郎を見向きもせずに通りすぎた。立派な衣裳からみて、それが織部正に違いなかった。

――あれじゃ。

甚五郎は再び平伏した。その眼の前に、足が立ち止った。足は、真直甚五郎に向かったまま動かない。

ゆっくり挙げた眼が、上から見おろしている鋭い視線にぶつかった。甚五郎を見おろしているのは藤井源助だった。

甚五郎は立ち上がった。混乱が、甚五郎を襲っている。

「貴公も討手に選ばれたのか」

「違うな」

源助は冷ややかな口調で言った。

「俺は今日、織部正さまの附き人の資格できている。後で会おう」

源助は茶室の方に歩みかけた。

「待て、藤井」

甚五郎は鋭く囁いた。

「事情を話せ。どういうことじゃ」

「事情か。事情は、あたらひとりの名君を、藩を挙げて圧殺しようとし、今日がその仕上げの日だということじゃ」

源助は戻ってきた。

「知らんか、布施。織部正さまは、小形郡で善政を布かれた。年貢は本藩より二割減らした。この善政で、小形郡が永代本藩から離れることを恐れた重臣たちが讒を構えたのだ。夫役に反対する百姓を牢屋に入れたなどというのは、月岡但馬以下、本藩の重臣がひそかに流した噂じゃ。事実は隣国の黒川郡から逃散した百姓が、小形郡の善

政を慕って逃げ込んだのを捕えただけじゃ」

「しかし、織部さまは、ご城下に戻られると、酒色に溺れ、山崎の内儀を辱しめたと、鬼頭どのは言った」

「酒ぐらいは誰でも飲む。女も然りじゃ。織部正さまは重臣たちの奸計に薄々気づかれて、ふさいでおられた。だが山崎はただの狂死だ。それを織部正さまの所行というのは、重臣に抱き込まれた大目付小島どのの言い触らしに過ぎん」

「待て。貴公も俺にそう言ったぞ」

「あれか」

源助は苦笑した。

「貴公から今日の話を聞いたとき、俺は一たん織部正さまを逃がそうと考えた。いつかそういう日が来ると思って、俺は病気と偽って様子を探っていたからな。だが逃がすのは無理だと解った。小島の配下が昼夜御成町の屋敷を見張っているのでな」

「……」

「あとはここで、貴公とひと勝負して死のうと考えたわけだ。今日の討手は、俺のためにも、織部正さまのためにも、貴公でなければならん」

「しかし……」

弥生も襲われた、と言おうとして、甚五郎は口を噤んだ。山崎の噂があったがために、そう思い込んだが、何の証拠があった訳でもない。町の無頼漢の仕業かも知れなかった。

「織部さまはこのことをご存じか」

「いや、言っておらぬ。言わぬと貴公と約束した」

源助は背を向けた。その背に、甚五郎は声をかけた。

「解らぬことがある」

「……」

「貴公が、なぜ織部さまのために死ぬ？」

「織部正さまを生んだひとは、早く死んだが、俺の伯母だ」

あ、と甚五郎は口を開けた。

「しかし甚五郎、死ぬか死なぬかは、貴公との勝負次第だ。貴公が敗れて、こちらの命が二、三日のびることもあるぞ」

源助は冷ややかに笑うと、背を向けて茶室の中に隠れた。

一番先に左近将監が茶室を出てきた。その後に筆頭家老の月岡但馬が出てきて、跪いている甚五郎の前を通り過ぎた。さらに甚五郎が顔を知らない重臣が二人通りすぎ、

その後から、鬼頭弥太夫が出て来た。

鬼頭は甚五郎の前までくると、胸を傾けて囁いた。

「藤井が来ておる。織部どのの附き人だと申しておるが、どういう了見だ。阿呆めが」

「ご心配なく」

甚五郎は立ち上がると、口もとまでしか背丈のない、狸のような顔をした鬼頭を見おろして、冷ややかに言った。

「言いつけどおりに仕止め申す」

「頼むぞ」

鬼頭はちらと茶室の方を振り向くと、せわしなく足を動かして去った。

織部正と藤井が、ゆっくり茶室を出てきた。甚五郎は枯草を踏んで退くと、羽織を脱ぎ捨てた。下には白い襷をしている。そのまま、二人の往路を塞いだ。

織部正の顔色が少し動いた。驚きではなく、むしろ物悲しいような表情で、立ち止るとじっと甚五郎を見た。織部正を、甚五郎は小形郡の館主として行く前に、一度見ている。だが遠くから見ただけで、まともに顔を合わせるのは初めてだった。

二十七だと聞いている。彫りの深い立派な顔をした人物だった。

藤井が前に出てきた。

「ひと試合お目にかけ申す。ここを動かれませぬように」

藤井は言うと、手早く羽織を脱いだ。藤井も下に襷をしていた。

「鼻のぐあいはどうだ」

足の位置を決めると、藤井は言った。

「何ともないぞ、源助」

「それはよかった。では参る」

藤井は剣を抜いた。遅れずに甚五郎も抜いた。

三間の距離をおいて二人は睨み合ったが、やがて藤井が打ち込んできた。鳥が翔けるように、音もなく素早い打ち込みだったが、甚五郎はほとんど動かず、身体を回しながら、藤井の剣を弾ね上げた。

二人はまた睨み合った。藤井の額にしとどに汗が光っている。

――源助は本当に病気ではなかったか。と甚五郎はふと思った。

甚五郎の僅かな心の揺れを見破ったように、藤井が踏み込んできた。甚五郎は一歩退いて、受け流したが、左腕を浅く斬られていた。藤井の剣は鋭く、切先が生きもののように延びてくる。

三度目の対峙から、二人は何かに衝き動かされるように、同時に踏み込んでいた。藤井の剣はまた甚五郎の左腕を浅く斬ったが、甚五郎の重い一撃は、藤井の肩をざくりと斬り割っていた。

撃ち合った姿勢のまま、二人は暫く相手の眼を睨み合ったが、やがて藤井の顔が苦痛に歪むと、後によろめいて、身体は斜めに音たてて崩れ落ちた。

血刀を下げたまま、甚五郎はゆっくり織部正に歩み寄った。それを見て、織部正は差していた小刀を抜いた。

「上意でござる。お覚悟めされい」

言いながら甚五郎は、

——立派な人だ。

と改めて思った。自分がひどく理不尽なことをしようとしている、という気がした。そのとき、不意にあの感覚がやってきた。鼻腔の奥に、じわりと動いた掻痒感は、みるみる膨れ上がって、出口をもとめて狂奔し始めていた。

——斬られるかも知れぬ。

と甚五郎は、全身に噴き出す汗の中で思った。心はすでに上の空で、嚔をこらえることだけに必死に働いている。剣はただ構えているだけだった。

そのとき織部正の鋭い叱咤が響いた。

「上意だと？　何が上意、奸臣どもの陰謀であることを知らんのか」

すっと鼻を抜けた涼しい感じがあった。

斬り込んできた織部正の剣を、巧みにはずしながら、甚五郎の剣先は、反射的に織部正の胸を刺し貫いていた。

密告

一

「さてと」

定回り同心笠戸孫十郎は、茶碗を盆に戻すと腰を上げた。

「馳走になった」

「お構いもしませんで」

「またお寄り下さいまし」

伊勢蔵と、伊勢蔵の女房に見送られて戸口を出ると、外はもう薄い闇だった。軒行燈に灯を入れていた顔見知りの小女が、孫十郎に笑いかけながら頭を下げた。

――似合いの夫婦というやつだな。

のんびりと足を運びながら、孫十郎はまた思う。伊勢蔵夫婦のことである。

伊勢蔵は、いま出てきた小料理屋「卯の花」の主人だが、一方では十手捕縄を預かる岡っ引である。若いときに孫十郎の父笠戸倉右衛門から手札をもらい、倉右衛門が死没したとき、後を継いだ孫十郎から手札をもらい直した。

岡っ引が性に合っているようだった。顔も岡っ引面をしている。五十を過ぎたが、髪は黒々として精悍な顔をし、眼つきが鋭い。無口なたちで、何か事件が起きて調べがあるなどということでない限り、いつもむっつりしている。

険しい人相をし、むっつりと愛想のない人間が料理屋の親爺では、「卯の花」がはやるわけもないが、そこはよくしたもので、女房のお六が人一倍愛嬌のあるお喋りだった。痩せぎすな伊勢蔵の、これが女房かと怪しむほどでっぷりと肥り、顎は二重にくびれている。体に似合わない、細く可愛らしい声で店を切り回し、伊勢蔵が口を出すようなことは何もない。

孫十郎はせっせと受持ちの町筋と自身番を回るのが役目だが、仕事の終りを「卯の花」がある浅草三間町の近くに持って行き、そこでお茶を飲んで帰ることがある。

小料理屋の暖簾をくぐるからには、そこで一杯やって帰りたい気分がする時もあるが、それは我慢する。着流しに雪駄履き、銀杏髷と、ひと眼で八丁堀の人間と解る恰好で、酒の香をさせて町を帰るのは憚られる。

定回りは、一日中歩くのが仕事だから、日暮れにはぐったりする。それで伊勢蔵の店でひと休みしたりするわけだが、疲労困憊しているときなど、伊勢蔵が顔色を読んで酒をすすめることがある。だが孫十郎が断われば、強いてすすめない。

——親子二代のつき合いだから、心得たものだ。

と思ったとき、背後から伊勢蔵の声で名を呼ばれた。

「忘れておりましたが、言伝てがありました」

と伊勢蔵は言った。走ってきたらしく、息が弾んでいる。

「誰からだ」

「それが……」

薄闇のなかで、伊勢蔵はふと視線を逸らした。

「磯六が来ましてな」

「……」

孫十郎は眉をひそめた。

久しぶりに聞いた名前だったが、聞いて愉快な名前ではない。それは伊勢蔵にも解っている。

磯六は岡っ引でもなく、手先でもなかったが、父の倉右衛門が生きている間、笠戸の家に出入りした。深夜いつの間にか来ていて、倉右衛門と行燈の光の下で、額を突きあわせてひそひそ話している姿を、孫十郎は何度かみている。

磯六はいつも月代を伸ばし、その下の額が狭く、落ち窪んだ眼に蛇の眼の光を沈めている。この得体の知れない男が家に出入りするのを、孫十郎の母親は極端に嫌った。苦情を述べる妻に、倉右衛門は、あれは仕事に必要な男だとしか言わなかった。磯六は相変らず夜遅く来て、声をひそめて一とき倉右衛門と話し込むと帰って行った。帰るとき、倉右衛門が金を渡すようだった。

磯六の仕事がどういうものであるかを知ったとき、孫十郎は磯六とのつながりを切った。父が死に、二十三で定回り同心の職を継いだ直後である。

仕事の中味が解ったのは、倉右衛門の葬儀が終って間もないある日、磯六が訪ねてきて自分から打明けたからである。自分は密告者だと磯六は名乗った。

法に触れているが、ある事情から表沙汰にならなかった事件、法に触れる寸前で止んだ事件、やがて事件になりそうな犯罪の芽などを拾い集めてくるのが、磯六の仕事だった。磯六の話で、こういうきわどい事件を嗅ぎあてることに、この男が異常な能力を持っていることが解った。

犯罪の匂いを嗅いで回る岡っ引、手先を、堅気の人間は、ときにいぬと呼んで蔑むが、磯六こそ本当の意味のいぬだったのである。

磯六がそのことを打明けたのは、倉右衛門が死んだあと、自分と孫十郎との間を繋ぎ直そうとしたためだったが、孫十郎はきっぱり断わり、笠戸家への出入りを禁じた。

以来三年、孫十郎は磯六に会っていない。

「あれは、縁を切った男だ」

と孫十郎は、少し厳しい表情で言った。申し出を断わったときの、磯六の顔を思い浮かべていた。無気味な眼の光だけは、孫十郎が子供だった頃と変りなかったが、磯六は髪が真白になっていた。そういう事を続けて、その男は老いたのであった。

「存じております」

と伊勢蔵は言った。倉右衛門から手札をもらっていた伊勢蔵は、磯六のことをよく知っていた。

「ですが、何か旦那に内密の話があるということでした。明日の夜五ツ半（九時）に、八丁堀のお家にお邪魔したいからお伝えしてくれ、ということで、へい」

「五ツ半だと？」

「へい。その時刻に必らずお待ち下さるように、ぜひとも申し上げたいことがある、ということでした」

伊勢蔵と別れて、八丁堀へ帰ると、妻の保乃が迎えに出た。

「お疲れでございましょう」

「疲れた、疲れた」

「すぐご飯に致します」

保乃は足をひきずっている。三日前の夕方、保乃はこんにゃく島に買物に行った帰りに、災難に逢った。材木屋の前を通りかかったとき、店の脇に立てかけてあった柱材が倒れかかって、とっさに逃げたが左足を打たれて踵が腫れ上った。気がつくのが一瞬遅れたら大怪我をするところだったのである。材木屋の若い者に送られて帰って、次の日一日寝込んだ。材木屋では恐縮して、翌日番頭が菓子折を持って詫びにきたが、一日寝ただけでどうにか歩けるようになっている。

「具合はどうだ」

踵から足首まで、すっぽりと白い布を巻いた足をみて、孫十郎は言った。

「まだ痛みますが、昨日のようではありません。じきなおりますよ」

保乃は平気な顔で言った。保乃は案外神経の図太いところがある。くよくよと怪我を思い患っているというたちではない。

二

「まだですか、あなた」

老母と茶の間にいた保乃が、襖を開けて顔を出した。

「まだだ」

孫十郎は読みふけっていた好色本を閉じて、あわてて答えると欠伸をした。本は発禁になったものを奉行所で借りてきたのである。しかつめらしい漢文仕立てだが、中味はあられもないことが書いてある。

「遅いな」

「もう四ツ（十時）でございますよ。本当に来るのでございますか」

保乃は疑わしそうに言った。

「向うから言ってきたのだ。もう少し待ってみよう」

孫十郎は言って、また大欠伸をした。磯六の話というのは何だろう、という興味がある。昨日伊勢蔵の話を聞いたときは、何かタレ込むつもりだろうと簡単に考えた。だが考えてみるとそういう繋がりは、孫十郎の方から切ってある。そして磯六の方でも、そういうことで訪ねてきたことはない。三年余り、ふっつりと姿を見せなかったのである。

——何の話か。

と思う。

「それではお母さまを先に寝すませますから」

保乃が腰を浮かせたとき、玄関の戸がカタリと鳴った音がした。

「よし、わしが出る」

孫十郎は立って玄関に出た。だが開け放した部屋から洩れる光に、ぼんやり浮き上っている玄関に人影はなかった。孫十郎は三和土に降りて、下駄を突っかけると戸を開けた。外はおぼろな月夜で、柱だけの門までの間にぼんやりと植込みや地面が浮かんで見えたが、ものの気配はなかった。三月末の、肌に快い夜気が顔を撫でただけである。

——確かに音がしたが。

孫十郎は首をひねって戸を閉めた。そのとき、閾ぎわにまるめた紙のようなものが落ちているのが眼に入った。拾い上げると、それはひと眼で投げ文と解る紙切れだった。

異様なことに関わり合ったらしいと気づいたのは、部屋に戻って、紙切れをひろげたときだった。

——まっていても、いそ六はこねえ。うそだと思ったら一石ばしにいってみな——

字はいそいで書いたらしい殴り書きだったが、十分読める字だった。

孫十郎は立ち上って着換えた。磯六を心配したということではない。投げ文の主が、明らかに自分に対して物を言っている感じを、見過し出来ない気がしたのである。自分の知らないところで、自分に関わりのあることが進んでいる。そういう感じがした。

「どうなさいました？」

戻ってきた保乃が、身支度している孫十郎をみて、驚いた顔で言った。

「出かけてくる」

「これから？　どちらへ？」

「一石橋まで行ってくる」

「どうなさったんですか」

「待っていた男が、そこまで来てくれと言っているのだ」

保乃は怪訝な顔をしたが、それ以上は聞かなかった。行燈を手にさげて、玄関まで先に立った。

一石橋までは、いくらの道のりでもない。孫十郎は裏茅場町の通りに出ると、牧野河内守屋敷の前を通り、橋を渡って青物町、万町の間を通り抜けた。町はひっそりと寝静まって、人影は見えない。日本橋通りを横切るとき、自身番のそばでひとの話し声を聞いただけである。

一石橋は、左に呉服橋御門を見る場所にある。足早やに、孫十郎は橋に向かった。橋ぎわに近い欄干に、ひとがひとり倚りかかっている。ぼんやりした月明りの下で、白い髪が見えた。

「磯六か」

孫十郎は足をとめて声をかけた。男は答えないで、欄干から体をのり出して、下の濠を見おろしているように見えた。用心深く孫十郎は近寄った。男はまだ動かない。

「おい」

肩をゆさぶったとき、男の体が不意にずるずると欄干の下に崩れ落ちた。手足がばらばらな感じで橋板の上に転げ落ちた男の顔が、孫十郎の眼に突き刺さった。

男は磯六だった。開いた口からだらりと舌が垂れ、鼻の下から顎まで黒っぽいものが附着しているのは、乾いた鼻血だった。頸には無残な力で締めあげた縄が巻きついている。

とび出しそうに開いている眼球を、瞼を引きおろして隠してやりながら、孫十郎は注意深く死体とあたりの様子を眼で調べた。

磯六の着物は乱れ、埃がついている。月の光が、橋板の上に点々と黒い汚点を浮き立たせているのは、磯六がこの場所で襲われたことを示していた。磯六はここまで来

て、何者かに首を締められ、格闘した。だが、その間にも縄はぐいぐい首に喰い込み、磯六の力を奪った。橋板に飛び散っている血痕はそう語っているようだった。

孫十郎は立ち上って、欄干に寄った。上体を伸ばして濠をのぞいたとき、不意に口笛を吹いたような音がした。それが矢音だという判断と、のけぞるように欄干の陰に体を隠したのが同時だった。

唸りを立てて、矢が頭上を飛び去った。

——矢は下から来た。

と思った。孫十郎は蹲ったまま耳を澄ました。だが何の物音もしない。

月の光は一層ぼんやりしてきている。空に薄い雲がひろがりはじめていて、少しずつ光を奪って行くようだった。そのぼんやりした夜の先の中に敵がいて、こちらの様子を窺っている気配がした。

いつでも抜けるように、刀の鯉口を切り、橋の柱に沿ってそっと立上ったとき、濠の底で、櫓の音がきしんだ。欄干の上からのぞき込んだ孫十郎の眼に、一艘の小舟が、早い舟足で日本橋の方に遠ざかるのが見えた。櫓を漕いでいる人間は、黒い着物が見えただけで、遠い夜目では顔は解らなかった。孫十郎は橋の上を対岸の北鞘町の方角に走りかけたが、諦めて戻った。もとの場所に帰って濠をみると、もう舟の姿は夜に

紛れて見えなかった。

——どちらを狙ったのかな。

と思った。日本橋通りの自身番の者を起こして、磯六の死骸の後始末を頼んでから、孫十郎はゆっくりした足どりで家に戻った。途みちその疑惑が頭にこびりついて離れなかった。

磯六だけを狙ったのなら、敵はもう目的を達している。磯六は自分が狙われているのを知って、助けを求めに孫十郎の家に来ようとしたが、途中襲撃されて死んだ。

だがそれだけだったら、敵はさっさとその場を離れる筈だった。敵は待っていて、孫十郎に矢を射かけた。矢を射かけた者と、舟で逃げた人物が同じ人間であることは疑いない。すると敵は孫十郎を待って矢を射かけ、その成否を確かめようとまでしたようだった。

——狙われたのは俺の方だったかも知れないな。

とも思った。すると家に残してきた投げ文の、短かい文章が頭に浮かんだ。

——まっていても、いそ六はこねえ。うそだと思ったら一石ばしにいってみな——

短かいが、どこかに敵意を隠した文句だった。孫十郎を襲った敵は、恐らくその投げ文を磯六を殺した後で書き、八丁堀の家に投げ込んで孫十郎を誘い出したのである。

——しかし両方だったかも知れない。

とまた思った。

短かい投げ文の文句には、磯六に対する敵意もひそんでいる気がした。磯六と孫十郎、この二人を狙ったと考える方が辻つまが合うようだった。

磯六は、どういうわけか二人が狙われていることを嗅ぎつけた。そこで孫十郎にそのことを連絡するつもりで、今夜訪ねようとしたが、逆に敵に嗅ぎつけられて殺された。そう考えると、今夜の一連の出来事の説明がつく気がした。

だがどうにか推察できるのはそこまでで、その先は何も解らなかった。幾つか事件に関わり合い、何人かの悪党を縛った記憶はあるが、そのためにひとの怨みをかう憶えはなかった。いちいち怨まれていては、同心という仕事は勤まらない。

不意にある考えが孫十郎を襲ったのは、その夜遅く床についてからだった。

「おい」

孫十郎は手を伸ばして、保乃の肩をゆすった。

「はい」

闇の中で保乃がいそいで起き上る気配がした。

「お前が足をつぶされたときのことだが」

「は？」

「材木が倒れてきたというが、そのとき風でも吹いていたのか」

「いいえ」

保乃はまだ完全に眠りから覚めていない、ぼんやりした口調で言った。

「風なんかありませんでした。突然がらがらという音がして」

「誰か、人影をみなかったか、そのあたりに」

「ひと？　いいえ」

保乃は漸くしゃっきりした声になった。

「誰もおりませんでしたよ。私が倒れてから店からひとが出てきたぐらいですもの。でも、それがどうかしましたか」

「いや、それだけ解ればよい。寝ろ」

「ご用はそれだけですか」

快い眠りを途中で妨げられたのが業腹だったらしく、保乃は少し皮肉な口調で言った。

「では今度はゆっくり休ませて頂きます」

——調べてみる必要があるな。

と闇の中に眼を開きながら、孫十郎は思った。保乃もまた襲われたのではないかという気がしたのである。

——つまり、あれだ。

敵は磯六だけを狙ったのでもなく、磯六と孫十郎を狙ったわけでもない。磯六と死んだ倉右衛門に怨みがある者の仕業のようだ、と思ったのである。倉右衛門が死んだから、孫十郎と保乃が狙われている。老母も狙われる可能性があった。

だが、倉右衛門が死んで三年余りも経って、なぜそういうことが起きてくるのかが解らなかった。

——その訳を、磯六は知っていたらしい。

だが磯六が死んだいま、孫十郎は突然見えない敵と向き合ったまま、取り残されてしまったようだった。

三

「ふだんは、こういう具合になっていまして」

角田屋という、こんにゃく島の材木屋の番頭は、店の横に孫十郎を案内すると、立てかけてある材木を見せた。四寸角、六寸角、八寸角といった柱材、杉板などが店の側壁に立てかけてある。

材木は十分に勾配をもたせて、その上から船で使うような太い麻縄で、上下二カ所を押さえてある。相当の風が吹いても倒れるようなものじゃないな、と孫十郎は思った。

「縄が切れていた、と申したな」

と孫十郎は言った。

「へい。まことにお恥ずかしい話ですが、縄が古くなっておりまして、切れたようでございます。あのあと、このように早速新しいものと取替えましてございますが」

「その縄は、捨てちまったかい」

孫十郎は伝法な口調で言った。

「へ？」

痩せた六十ぐらいの番頭は、びっくりしたように口をあけて孫十郎の顔をみたが、

「お待ち下さいまし。始末した若い者に聞いてみましょう」

と言った。

番頭が戻ってくるまでの間、孫十郎は店の裏手に回ってみた。裏は材木置場になっ

ていて、丸太や、桝型に積み重ねた材木が、かなり広い空地を埋めている。古びた塀が空地を取り囲んでいて、戸の開いた煽り戸が見えた。材木の間を通って、煽り戸に近づくと、孫十郎は戸締りを調べた。

薄い戸は糸でくくった太い五寸釘で戸締りするようになっていたが、戸締りをしてから戸を引っ張ってみると、柱と戸の間に一寸ほどの隙間が出来た。

——不用心なものだ。

と孫十郎は思った。材木を道側に倒した者が、夕暮れの光の中を、材木置場に走り込み、こっそりと煽り戸の外に遁れ出る姿が眼に浮かんできた。

声に振向くと、番頭が若い者に持たせた麻縄を指さしながら、孫十郎を呼んでいた。

「いくら古くても、二本とも切れる筈がねえと思ったら、案の定だった」

と孫十郎は、戻ってきた「卯の花」で、伊勢蔵に言った。材木屋に行く前に、伊勢蔵と打合わせ、伊勢蔵は磯六の住居の方を調べに出かけ、やはりいま帰ってきたところである。

「切ったんですかい」

「刃物で切った痕が、はっきり残っていた。誰かが怪我させたのだ」

「妙な話ですな」

と伊勢蔵は腕を組んだ。

「ところで親分の方はどうだった？」

「へい。行って参りましたが」

伊勢蔵は腕組みを解いたが、困惑した表情になった。

「奴さんの家には、あっしもしばらくぶりで行ったんですが、元のまんまで、相変らず汚ねえ家で、へい」

磯六は本所長岡町に住んでいた。裏店でひとり住居だった。伊勢蔵は、裏店の者に磯六の様子を聞いたが、詳しい暮らしぶりを知っている者は誰もいなかった。表通りで米屋をしている斎助という大家にも会ったが、大家でさえ磯六が何で喰っているかを知らなかった。

「だが家賃はきちんと納めていたしねえ。それに、磯は長いんで親分。あそこの主みたいなもので、かれこれ二十年は住んでますからな」

と大家は言った。軒先が歪んでいるような裏店では、得体が知れない磯六のような男も、家賃が滞らない限り上等の店子で扱われていたようだった。

「そういうわけで、結局何も解らなかったんですが」

伊勢蔵は、孫十郎に色の薄くなった茶をすすめた。

「たったひとつ、磯の野郎が妙なことを口走ったのを聞いた男がおりました」
「口走ったというのは、どういうわけだ」
「へい。ある日の午過ぎ、それがどうもここへ旦那に言伝てを頼みにきた日のことじゃないかと思われるんですが、その日外から帰ってきた磯が、ひどくあわててまた家を飛び出して行ったんだそうで」
「ほう」
「そのとき磯が、じじいが帰って来やがったな、とひとり言を言ったのを聞いた者がいましたんで」
「じじいが帰って来た、か」
「へい。それを聞いたのは、磯の家の隣に住んでいる広太という日傭取りでして。こいつは怠け者でござんしてな。その日は仕事を休んで浅草観音裏の矢場にでも行こうつもりで、家を出たら、磯が大きなひとり言を言って眼の前を通り過ぎて行ったと言うんで」
「面白いな」
「いつもの磯六とは違う感じで、あの薄気味悪い男が、ひどくあわてていた様子だったんで、その時のひとり言も憶えていたというわけですよ」

「そしてその後此処に来たとしてみるか。その時の磯六の様子を話してみてくれ」
「やっこが此処に来たのは八ツ（午後二時）頃でした。こりゃ旦那、やっぱり磯が裏店でひとりであわてていたというのは、時刻からみてもその日の事ですぜ。とに角家へ来るとすぐ賄場の方に顔を出しましたんで」
「それはどういうわけだ？」
「あっしが賄にいましたんでね。十手を握らないときは、あっしも料理屋の親爺ですから、庖丁を握りますんで、若い者が仕入れてきた魚を吟味して、これは刺身、これは煮物といったぐあいに指図しておりました」
「なるほど」
「磯六とは、実は旦那がやっこと手を切ったあと、二、三度仕事のことで会っておりますが、ここ一年ほどは切れていまして、その日は突然のことでびっくりしました」
「……」
「で、顔を出すとすぐに、旦那にお会いしたいので誰かをやってくれろ、という話でした」
伊勢蔵は、自分で行ったらどうだ、と言った。十手の仕事と、商売の方は日頃厳しく分けている。下っ引の峯吉も万蔵もその日は来ていなかったし、板前の源助と見習

いの佐太郎、絲吉の二人がその場にいたが、連中を使う気はなかった。

ところが、磯六は、俺が行ったんじゃまずい、と言った。

「まずいと言ったのだな」

孫十郎は確かめた。

「へい、そう言いましたんで。あっしは何を気取ってやがる、ときめつけてやったんですが、そのうち磯の奴が額に汗かいているのに気づきましたんでさ」

「……」

「こりゃ、よっぽど大事な話だな、と思いましたから、旦那なら今日、明日こちらにお寄りになる。そのとき話してやろうと言ったわけです」

「……」

「そうしたら、それじゃ明日の夜五ツ半にお邪魔するから、と伝えてくれろ、というなり家を出て行きましたんで」

「大体のところは解った」

と、孫十郎は言った。

「それで、あっしは何をしたらよろしいんで」

「もう少し待ってくれ。少し調べることがある」

孫十郎が帰るのを、伊勢蔵は門まで見送った。伊勢蔵が心配そうに声をかけた。

「旦那、気をつけて下さいよ」

「ああ、気をつけることにしよう」

孫十郎は答えた。

日が落ちたあとの気だるいような光が町を包んでいる。その光の中に春の花の香が含まれている。その薄闇に沈みかけている町の中に、自分の命を狙うものがひそんでいるとは信じられない、穏やかな日暮れだった。

四

父親の手文庫を開いてみるのは初めてだった。

いつか整理しなければならんな、と思いながら、一日一日の忙しさに押し流されて、そのまま座敷の隅に押し込めて置いたのである。

手文庫の中味は、朱筆を入れた漢籍の類が多かったが、定回り同心の心得を、自戒風にまとめたものや、日誌風に巡回の覚えを書きつけた帳面が何年分か出て来たりした。

その中から、孫十郎は一冊の仮綴の帳面を見つけた。表に高柳様御内聞書とある。孫十郎は、二、三枚ぺらぺらとめくってみたが、眼はすぐに、そこに父親の筆蹟で記されている記事に吸いつけられた。

▽谷中天王寺門前、紙屋清右衛門四十二歳一件、五月二十日磯の字知らせの分

と言った記載が並び、その脇に朱筆でお調べの上入牢十日、お取調べの上敲、江戸お構いといった書き入れがある。朱筆の書き入れは、後でしたものと思われた。

記載は倉右衛門の死歿まで、前後十五年にわたっていた。その間三年間の記載がないのは、その間どういう事情か、磯の字知らせが倉右衛門に入って来なかったものと思われた。それが磯六の方の都合なのか、倉右衛門の方の事情によるのかは解らない。

そう思ったとき、孫十郎の脳裏に高柳という人物のことが、鮮明に浮かんできた。高柳惣兵衛は二年前に辞めた古株の吟味方与力で、酷吏と呼ばれた人物だった。惣兵衛の扱う公事が厳しかったためである。

磯六が倉右衛門のいぬであったように、父もまた高柳のいぬを勤めたのだろうかと孫十郎は思った。

昔、磯六は自分の仕事が隠れた犯罪を嗅ぎあてて倉右衛門に密告することだったと打明けた。その密告は倉右衛門の手を経て、高柳惣兵衛まで届き、仮借ない摘発を受けたのだということが、容易に想像できた。倉右衛門の朱筆の書き入れが、そのことを物語っている。

父はそのことで褒賞を受けていたのだろうか、と孫十郎は茫然と手を休めて思った。帰る磯六に、紙に包んだ金を渡していた倉右衛門の姿が眼の裏に甦える。あの金は、あるいは高柳から出ていたものかも知れなかった。しかし、倉右衛門が、高柳からひそかに受けていた褒賞の一部だったとも考えられるのだ。

奇妙な一連の事件が、漸くおぼろな世界となって姿を現わしてきたのを、孫十郎は感じた。磯六を殺し、自分を襲い、保乃を襲った、何者とも知れなかった闇に包まれた男が、この高柳様御内聞書の中にひそんでいることは確かだった。

この仮綴の帳面の中に、磯六を怨み、倉右衛門を怨んでいる者がいる。それが何故かは解らない。冤罪だったのかも知れないし、あるいは黙っていれば解らなかった事件を暴かれた怨みかも知れなかった。

そこまで考えてきて、孫十郎は磯六が口走ったという、じじいが帰って来やがったな、という言葉に、高柳様御内聞書を読みとる幾つかの糸口がひそんでいるのに気付いた。

帰ってきた、というからには、その男は追放されたか、あるいはもっと重く遠島の

処分を受けた者である可能性があった。それは朱書きを拾えば解る。

そして、その男は老人なのである。内聞書は前後十五年にわたっている。十五年前に処分を受けた者が、いま老人となって帰ってきたと考えることも出来たが、孫十郎はこの考えを捨てた。磯六は端的に、当時老人だった男を、そう呼んだのだ。

すると、内聞書の中に、老人でしかもお構い以上の処分を受けた者を探せばよい。その者が帰ってきて、磯六を殺したのである。

「まだ、お休みになりませんか」

保乃が襖際に膝をついて言った。孫十郎は充血した眼を挙げた。妻が襖を開けたのに気づかないほど、深い物思いに沈み込んでいたのだった。

「襖を締めて、ここへ来い」

と孫十郎は言った。

「でも、こんな様子をしておりますよ」

と保乃は後ずさるような恰好をした。保乃は寝巻姿である。孫十郎が、調べものをするから、先に寝てよいと言ったので、ひと寝みしたものの、気がかりになって様子を見に来たという恰好だった。

保乃は二十三である。一軒おいた隣の臨時回り同心井関家から嫁にきた。容貌は十

人並みそこそこだが、明るい気性で、貧乏同心の家から、同じ貧乏同心の家に住み変えただけのような世帯のやりくりを、屈託なく切り回している。孫十郎の母親の面倒をみ、家事のほかに縫物の内職までしていた。三十俵二人扶持の小禄では、孫十郎の収入だけで豊かに暮らすというわけにはいかないのである。

何も知らずに、日々の暮らしに追われている妻が哀れだった。こんにゃく島で怪我をしたときも、知り合いの商家に、頼まれた浴衣を縫い上げて届けた帰りだった。本人はひとに襲われたとは思っていない。

「いいから、ここへ来い」

と孫十郎は言った。

「そうですか」

保乃は顔を赤らめて言うと、襖際で髪を撫でつけてから入って来て襖を閉めた。

「ばあさんは寝たか」

と、孫十郎は自分の母親のことを言った。

「また、そんな」

保乃は軽く夫を睨む真似をした。

「お母さまはとっくにお寝すみですよ。何刻だと思っていらっしゃるんですか」

「足を見せろ」
と孫十郎は言った。
「いやですよ」
保乃は、また後ずさるような恰好をして、寝巻の襟をあわせた。
「いいから見せろ」
孫十郎は、手を伸ばして保乃の肩を摑むと体を引き寄せた。小柄な保乃の体は、抗うひまもなく、孫十郎の膝に引きつけられている。保乃は体をちぢめたが、孫十郎が裾をめくると、諦めたように、不意に孫十郎の膝に顔を埋めた。甘い体臭が孫十郎の鼻を衝いた。
桜いろの足首を、孫十郎はそっと摑んだ。
「痛むか」
「いいえ」
保乃は顔を挙げないで、くぐもった声で答えた。
「少し話して置くことがある」
孫十郎は保乃の背に、軽く手を回しながら言った。
「お前の怪我だが、あれは風や何かで柱が倒れて来たわけではない」

「……」
「誰かが、わざとやったのだ。足を挫いただけで済んだのは幸運だった」
保乃がぴくりと体を顫わせて、顔を挙げた。その顔が不審ないろから、次第に青白い緊張に変るのを見ながら、孫十郎は妻の手を握った。
「お前を殺すつもりだったかどうかは解らん。だが危ないところだった。俺も狙われている」
「まあ、誰に？」
「それをいま調べているところだ。とにかく日暮れからは外を出歩くな。夜は一歩も家を出てはいかん。ばあさんもだ」
「わかりました」
「お前は同心の娘で、いまは同心の女房だ。むやみに怖がってはいかん。そういうこともあると覚悟をきめておけ。あとは俺にまかせておけばよい」
「はい」
保乃は孫十郎に手を取られたままで、思案するように首を傾けたが、不意に孫十郎の懐に体を投げ入れた。保乃は囁いた。
「怖がってはおりません。あなたを信じていますもの」

明け方、孫十郎はついに内聞書の中に次の記載を見つけた。

▼駒込片町、太物商い和泉屋弥兵衛五十八歳一件、九月三日磯六知らせの分。

朱筆の書き入れは、お調べの上流罪となっていた。八年前の記載であった。

五

「そういう男が赦免されて戻ったという記録はないな」

と真木賛之助は言った。真木は内役の同心で、御赦し掛りに勤めている。孫十郎の古い友人だった。

「ないのか」

孫十郎は落胆して言った。

「見落しはあるまいな」

「見落してはおらん。貴公が三年といったのを、五年前まで調べたが、和泉屋弥兵衛という男が赦されて帰ったという事実はないぞ」

孫十郎は奉行所を出た。出れば町々を回り、自身番に顔を出す仕事が待っているが、仕事に気乗りする筈はなかった。

いまにも雨が落ちて来そうな、暗い雨雲が江戸の空を覆っていて、町を歩いて行くと、木の葉や花の匂いが鋭く鼻を刺してくる。

焦燥が胸の中に生まれているのを感じる。磯六が殺され、一石橋の上で矢が射かけられた夜から、半月以上経っていた。今朝、明け方の白い光の中で、和泉屋弥兵衛の記載を見たときは、闇の中を歩き回る男の姿を捕えたという気がしたのである。だがいま真木賛之助の言葉を聞いてみると、和泉屋弥兵衛という男の姿は、みるみる薄墨で描いた人物のように影が薄れてしまった気がした。

亡父が書き残している高柳様御内聞書にしても、どこか信じ難い虚構の文書のようにも思えてくる。昨夜は確かに眼でみた筈の、磯六、亡父倉右衛門、高柳惣兵衛という繋がりも、白昼の白い光の中では、幻のように手応えのない妄想に変って行く気もした。

――しかし、磯六は確かに殺されたし、矢は飛んできた。

寝ていない、ぼんやりした頭の中で、孫十郎は確かめるようにそう思った。

――家に戻ってひと眠りしないと、いかんな。

そう思ったとき、孫十郎は大事なことを見落していた気がした。

孫十郎はゆっくり歩いた。じじいが帰って来やがった、という磯六の言葉は、五十

八歳で遠島になった和泉屋弥兵衛を指すようである。内聞書の中に、その記載を見つけたとき、孫十郎は、磯六の言葉の裏付けを取った気がした。

しかし、遠島になったとき、弥兵衛は五十八だったのである。あれから八年経ったいま、弥兵衛は六十六である。六十六の老人が、仮りに島脱けして戻ったとしても、磯六の首を苦もなく締め、あの暗い夜孫十郎に矢を射かけ、舟で逃げ去ることが出来るか。六十六の老人には、島脱けよりも死の訪れの方がふさわしくはないか。

そこまで考えたとき、孫十郎は足を返していた。真木賛之助にもう一度会わなければならないと考えたのである。

その日の夕方、孫十郎は八丁堀の家に伊勢蔵を呼んでいた。

「和泉屋弥兵衛は、去年の春に死んでいた。その知らせは去年の秋に届いている。もっとはっきり言うと、秋に大島から来た交易船が、その知らせを持ってきている」

「へい」

「和泉屋の息子が、そのことをどこかで聞いたことが考えられる」

「息子ですって？」

「いたそうだ。家が潰れ、母親が死んだあと行方が知れていない。母親が生きているうちからすっかりぐれて、博奕に手を出したりしていたそうだから、そういう世界ではいい顔になっていたかも知れない」

「……」

「去年の秋、大島から来た船には、博奕打ちが五人乗っていた。御赦免で帰ってきた運のいい奴らだ。連中のつき合いというのは限られているから、和泉屋の息子が、名前は善太郎というそうだが、善太郎がまだどこかの賭場に首を突っ込んでいたら、自分から親爺の消息を訊ねたかも知れねえ」

「あるこってすな」

と伊勢蔵は言ったが、孫十郎を見た眼には不信がある。

「しかし、それは旦那の推量で」

「そうだ、伊勢蔵」

孫十郎はうなずいた。

「いままで言ったことは推量だ。だが俺の調べでは、磯六や、俺を殺したいほど憎んでいる人間がいるとすれば、それは和泉屋か、和泉屋の縁者しかおらんのだ」

「さようですか」

「磯六がやっていた仕事はお前も知っている通りだ。そして俺の親爺が、磯六の持ってくるネタを買っていた」

「へい」
「奉行所で調べたが、和泉屋は何とかいう大きな寺の坊主が、寺に女を引き入れて罪になったとき、女を周旋したというので遠島になった。だが、坊主と一緒ではない。坊主の事件があってから一年経ってからだ。それまで和泉屋のしたことは知れてなかったのを、磯六が嗅ぎつけて島に送ったのだ」
「なるほど。少々厳し過ぎますかな」
「俺が和泉屋の息子なら、何をおいても父親を密告した奴を、どこまでも尋ねて探し出すな」
「あっしだって、そうしますな」
「善太郎は、磯六を探し出し、磯六が誰に密告したかも摑んだのだ。これは推量じゃない。磯六が死に、俺や女房が襲われたことで明らかだ。恐らく父親が死んだことを知って、その気になったのだろう。善太郎かも知れないという俺の考えの中には、例の手紙のことも入っている。お前にも見せたが、あれだけの字は、ただの職人やごろつきには書けねえ」
「……」
「ところで話は変るが、磯六を殺した人間は、ごく近いところにいるぜ、伊勢蔵」

伊勢蔵は無言で眼を瞠った。
「驚くのは無理はないが、考えてみるとわけないことなのだ」
と孫十郎は言った。
磯六を殺した人間は、孫十郎と保乃のことも知っている。それが、ただ調べて知っているというだけでなく、身近かにいる人間だという証拠がある、と孫十郎は言った。
「磯六があの晩、俺の家に来ることを知っていた人間の中に、磯六を殺した者がいる」
「ご冗談でしょう、旦那」
伊勢蔵は顔色が変ったのを鎮めるように、茶碗をとりあげると冷えた茶を飲んだ。
「旦那のお言葉ですが、それを知っているのは、あっしと旦那と、それに磯の野郎の三人しかいませんぜ」
「そう思うか」
孫十郎は微笑した。
「お前の話だと、もう三人いる筈だがな」
「……」
あ、と伊勢蔵は口を開けた。

「源助、佐太郎、絲吉、『卯の花』の賄場の男たちだ。三人とも、磯六がお前を訪ねてきたとき、その場所で仕事をしていた」

「しかし……」

「三人とも身状はちゃんとしている、というのだろう。しかし伊勢蔵、誰か保証人でも取ったのだろうが、保証人なんていうのは、あまり当てにならんのだぜ」

「……」

「磯六は、自分で真直この家に来るのも用心していたのだ。恐らく投げ文か何かで脅かされたのだろうが、それほど用心していたのだから、次の日の夜、ここへ来ることは誰にも喋らなかった筈だ」

「さいで」

「だが、お前の家に行ったときは油断したようだ。無理もない。お前の家の賄場が危ないとはさすがの磯六も考えなかったのだ」

「しかし、あっしには信じられません」

「実を言うと、俺もここまで糸を手繰ったものの、まだ半信半疑というところだな。そこであとは試してみるしかない」

「試すとおっしゃると？」

「和泉屋の善太郎か、ひょっとしたら和泉屋の妾の子だか解らんが、あの三人の中に、そいつがいるかどうか試してみよう。相談に乗ってくれ」

溜息をついて伊勢蔵は言った。

「ようがす。旦那のおっしゃる通りに致しましょう」

六

次の日の夜、孫十郎は「卯の花」で飲んだ。

したたかに酔った恰好で「卯の花」を出たとき、時刻は五ツ（八時）を回っていた。浅草三間町から、八丁堀まではかなりの距離がある。伊勢蔵の女房のお六が持たせた提灯が、左右に揺れて、危なっかしい足どりだった。

月もない暗い夜で、提灯の光に、孫十郎の長身が黒く浮き上がって揺れて行く。まだ人通りがあった。

ひとつの黒い影が、五、六間の距離を置いて、孫十郎の後を跟けはじめたのは、孫十郎の足が千住街道に出て、諏訪町、黒船町を通り抜け、蔵前の手前、八幡宮門前にさしかかったあたりからだった。

孫十郎は酔った声で、「卯の花」で唱っていた小唄を口ずさみながら歩いて行く。

黒い影は、正確に五、六間の距離で跟いて行った。門前を過ぎたところで、一度するると二、三間の後まで近づいたが、元旅籠町の間から、提灯を提げた男の二人連れが出てきたのをみると、立止ってまた距離をあけた。

男の影が跳躍したのは、孫十郎が鳥越橋を渡り、左に御蔵役人屋敷、右が天王町と変った広い通りに出たときだった。

突き飛ばされたように、孫十郎の長身が路上に転び、その上にさらに躍りかかろうとした黒い影を、もうひとつの黒い影が背後から組みつき地上に押し伏せた。

「旦那、危いじゃありませんか」

背にねじ上げた男の腕を、素早く縛り上げながら、伊勢蔵がこわい顔で怒鳴った。

「まさか本当に飲んだんじゃないでしょうね」

「いや、それが……」

倒れたまま、提灯だけを器用に差しあげて、孫十郎が答えた。

「意地汚ない話だが、飲む真似ばかりではつまらない気がして、おしまい頃に少々頂いたのだ。いまごろ足に来たらしい」

「危ねえ、危ねえ」

「なに、俺は親分の腕を露疑いはしねえからな。何にも心配しなかったな」

よいしょ、と掛け声をかけて孫十郎は立上った。

「どれ、和泉屋の息子の顔を拝見しよう」

「絲吉ですぜ、旦那」

提灯に照らし出された顔を見て、伊勢蔵は沈痛な声で言った。

「善太郎か」

と孫十郎は言った。

「それがどうしたい？」

冷たい眼で見返して、善太郎が言った。

「卯の花」にはいい若い衆が揃っている、と言われた三人のうちの一人絲吉の姿だったが、表情は冷たくそそけ立って、明るく冗談好きの絲吉の面影はない。

「和泉屋はなるほど磯六に密告されて島送りになった。しかし、親爺さんはそれだけのことはやってしまったのだぜ」

「黙っていりゃ解らなかったんだ」

善太郎は喚いた。

「あの汚ねえいぬと、貴様の親爺があばき立てた。おかげで家は滅茶くちゃになっ

た」

「そういう見方もある」

孫十郎はあっさり言った。

「だが、それだからみな殺しということになると、こちらも困るのでな」

「説教は聞きたかねえ」

「磯を、どうして突きとめた？」

「訳はねえよ」

と善太郎は言った。

「あいつはいつも銭をたんまり持って、賭場へ来やがった。汚ねえ銭を握ってよ。そのうち奴の仕事が解ったんだ。あとは俺の家のことを吐かせるなんざ、わけなかった。酒が好きでな。酔っ払うと何でも喋ったぜ」

「旦那、これからどうします」

「そうさな」

孫十郎は、ふと傷ましそうに善太郎を眺めた。

「とりあえず大番屋に入れておいてもらおうか。善太郎をどうするかは少し考えてみよう」

孫十郎が八丁堀の家に帰ったのは、四ツ過ぎだった。

保乃は孫十郎が部屋に入ると、声をひそめて詰るように言った。

「こんなに遅く出歩いては、危のうございましょ」

「やあ奥方、遅くなって済まんな」

「どうしたんですか、いったい。あら、お酒くさい」

保乃は眉を寄せ、やはり詰るような口調で言った。

「お酒なんか召上って、よくご無事で戻られましたこと」

「なに、その心配はもう要らんのだ。今夜捕まえてきた」

「本当ですか」

保乃はじっと孫十郎を見たが、その眼が潤んだ。

「よかったこと」

「本当だ。俺はともかくだ。お前まで捲き込むことはない。善太郎もひどい奴だ」

「善太郎て、誰のことですか」

「今夜、俺に酒を飲ませた男だよ」

おとくの神

おとくの顔をみると、裏店のひとたちはおとくさんもたいへんだねえ、と言う。おとくが日雇い稼ぎに出て、しかも男なみの力仕事をこなしていることを知っているからである。

だが、たいへんだねえというなぐさめの言葉にはもうひとつ意味がある。連れ合いの仙吉が、はた目で見ていても、暮らしの頼りにならない男だった。裏店ではそのことを知らない者はいないので、働きづめに日雇い仕事に出ているおとくを気の毒に思うのである。

仙吉はとりとめのない男だった。もともとは桶屋職人だったという。だがいまの裏店に来てからも、仙吉は五年の間にざっと十何度か職を変えている。もとは桶屋職人だったといっても、裏店に来たときには、仙吉は経師屋で働いていた。だから裏店の者は、仙吉を経師職人とばかり思っていたのである。

だが半年も経つと、仙吉は経師屋をやめて歯磨売りになった。仙吉は赤い扱きで歯磨の箱を肩からつるし、頭には頭巾をかぶった姿に変って裏店の者をおどろかし、その売り子姿は、色白で細身の仙吉によく似合ってもいたのだが、朝の早い仕事がそんなに長つづきするわけはない。歯磨売りはものの三月ぐらいでやめて、仙吉は今度は鍛冶屋につとめた。

ざっとこういうぐあいで、仙吉はまことに仕事の腰が落ちつかない男だった。目まぐるしく仕事先を変える。そしてひとつの仕事に倦きて次の仕事にかかる間に、必ず十日前後は家の中でごろごろしているのである。

だが、根っからの怠け者というわけではないらしく、そのうちにまた何かの仕事を見つけ、その仕事というのが昔取った杵柄の桶職だったりして働くことは働くのだが、要するに長つづきしないのである。仕事に出るふりをして、浅草の奥山あたりで遊んで来たりするのは平気だった。

これでは亭主の稼ぎをあてにして、井戸端で仲間の女房などとオダをあげているわけにはいかない。おとくは日雇いに出る。そして仙吉は仙吉で、女房が日雇いに出るからいいやと遊んでいるわけでもなく、しばらく怠けると、また発心したように何かの仕事を見つけて働きに出るのである。

おかしな夫婦だった。そしておかしいといえばこの夫婦は蚤の夫婦でもあった。おとくの方が亭主よりも背丈があり、太ってもいる。おとくはありていに言って大女だった。胸も腰も厚く、腕などは骨細な亭主の腕の倍ほどはあるだろう。

日雇いで、真黒に日焼けしたおとくが、亭主と一緒のところをみると、おとくの方が亭主の仙吉よりはるかに強そうに見えるのだが、その点も逆だった。

おとくは二十五だというが、まるで娘のようなかわいらしい小声でしゃべる。顔も眉が垂れて眼が細く、口はおちょぼ口で柄の大きい人形のような顔をしている。時どき夫婦喧嘩の声が、外に洩れて来ることがあるが、聞こえるのは仙吉の怒声とおとくの泣き声である。背の小さい、怠け癖を持つ亭主の方がいばり返っていた。

この有様だから裏店の者は、おとくに同情せずにはいられない。そこでおとくの顔をみると、挨拶がわりにおとくさんもたいへんだねえ、と言うのである。

それに対して、おとくは消え入りそうな声で、ええと言い、はずかしそうな笑いを返して通りすぎて行く。

家の中に入ると、おとくは台所に行って小盥に水を汲み、顔を洗うと濡らした手拭いで肌の汗を拭いた。ほかには誰もいない家なので、片肌ずつ脱いで念入りに首から胸のあたりを拭くと、気分がさっぱりした。

それからしばらく、おとくは大きな身体をくるくる動かして、台所仕事に精出した。竈の火を焚きつけ、飯釜を火にかけると、途中で買って来た汁の実の青菜をきざみ、豆腐を水につけて冷やす。そうして身体を動かしている間に、また顔に汗が噴き出して来た。

あとで湯屋に行かなきゃ、だめだとおとくは思った。

——だけど、あのひとが帰って来るだろうか。

おとくは不意に洗っていた椀を下においた。日はほとんど落ちたらしく、竈の火明かりがとどかないところは、もう暗くなっている。

昨夜仙吉は、家にもどらなかった。めったにないことだった。仙吉はふわふわと落ちつかない男だが、家をあけることはあまりしない男だった。むしろ、日暮れにはいそいそと帰って来る。おとくのつくる喰い物に文句をつけることもない。うまそうに物を喰い、弁当までつくらせて持って行く。

夫婦喧嘩がはじまるのは、例の怠けぐせが出たときだけである。おとくが文句をつけるのではなく、仙吉が自分で荒れるのである。ささいなことに文句を言い、てめえのようなでかい女は、などと身体のことまで持ち出して毒づく。

そういうとき仙吉は、自分の怠け癖を自分で始末出来ずに苛立っているようにみえた。またそういう自分の弱味をかばって、女房に虚勢を張っているようでもあった。そのほかのときは、むしろ家につき過ぎるほどの男で、よそに泊って来るなどという

ことはめったにない。仙吉は、世のつねの男たちのようには遊びに興味を示さない男だった。

その仙吉が、昨夜は何のことわりもなしに、家をあけたのである。仙吉はいま、檜物師の店で働いている。そんなに取っかえひっかえ仕事を変えて、よく雇ってくれる家があるものだと、おとくは内心あきれる思いだが、仙吉は根が器用で、数日経てばまがりなりに新しい仕事をこなすらしかった。

働いていれば男のつき合いというものがある。岡場所をひやかしに行って、つい家を明けるということはないことではない。子供じゃないのだからと思ったが、昨夜おとくは胸さわぎがして眠れなかった。とろとろと眠りに落ちたのは、明け方近くなってからである。

暗い中で、竈の火を見つめていると、また胸さわぎがもどって来た。今夜もどってくれば、どうということはない。だが仙吉は今夜ももどらないような気がしたのである。

三年ほど前に、一度そういうことがあった。そのときは、女が出来たのである。それがたちのよくない女で、家まで乗りこんで来たりしてひと悶着あったのである。

おとくは台所から、暗い茶の間に入った。古びた茶箪笥のひきだしをあけると、奥から小さな人形を取り出した。素焼きの、長い間に手垢によごれて目鼻もはっきりしなくなった土器人形である。仙吉と喧嘩して泣いたあとなどに、おとくはその人形を取り出して手でなでる。大きな身体のおとくが、掌に入るような土器人形をいじっている様子は滑稽にみえるらしい。

「何だい、またその人形か。そいつはおめえの宝ものかい」

などと、仙吉は鼻先で笑う感じでそう言うのだが、本人はとっくに忘れているらしかったが、人形は二人が夫婦になる前に、仙吉がおとくに買ってやったものなのである。

――宝ものじゃないよ。神さまだよ。

とおとくは思う。その人形を掌でなでていると、不思議に気持が落ちついた。いまは少し悪いことが起きているが、大丈夫、そのうちきっとよくなるという気がして来るのである。

おとくは暗い茶の間にうずくまったまま、黙って人形をなでた。すると少しずつ胸さわぎがおさまって来るようだった。しかし、仙吉はその夜も家にもどらなかったのである。

仙吉は根津にいた。お七という女髪結いの家である。お七は齢はおとくより二つぐらい下だろう。仙吉が以前働いていた経師屋で女中をしていた女で、仙吉が仲間に誘われて来た根津の切見世の中で、ばったり顔をあわせたのである。

お七は家に寄ってくれと言った。言われるままにお七の家に来て、今日で五日目である。お七は経師屋にいるうちに男が出来て、根津で所帯を持った。だがその暮らしは二年しかつづかず、男は家を出て行った。お七はまた女中に出る気にはなれず、髪結いになった。場所柄で、女ひとり喰って行くには、それで苦労がなかった。そういう話を、仙吉は聞いている。

「どうするの？」

仙吉が寝そべっていると、外から帰って来たお七がそばにぺたりと坐って言った。

「ずるずるべったりというのは、あたしゃ好かないよ」

「何だい？」

仙吉は起き上がってあぐらをかいた。

「もう出てけって言うのかよ」

「そうは言ってないよ。ただ、ここで暮らすつもりなら、おかみさんとのことを片をつけて来てもらいたいし、それに……」

「それに、何だい？」

「所帯を持つなら持つで、仕事の方もちゃんとしてもらわないとね。どうするつもり？　檜物屋さんはやめるつもりなのかい？」

「何だ、いやにつめてえ言い方だな」

「べつに。あたしゃつめたい口なんぞきいてないつもりだけど、髪結いの亭主でいられるのは好かないって言ってるだけ」

「わかった、わかった。ちゃんとすればいいんだろ、つまり」

仙吉は襟をくつろげて、うちわで胸に風をいれた。

「わかったよ。一ぺん家にもどって話をつけてくりゃいいんだろ？　仕事にだって行くさ。檜物屋のおやじなんて、すいませんでしたって頭ひとつ下げればどうってことはない」

「……」

「ちっともうれしそうじゃねえな」

仙吉は女の顔をじろじろと見た。

「おめえ、ほかに男がいるんじゃねえのか？」

「バカ言っちゃいけないよ」

お七は顔をそむけた。
「そりゃ女の一人暮らしだから、ちょっとしたひっかかりのひとつや二つはあったさ。だけど、いまはひとりだよ」
「そうかい。それじゃ、何も言うことはねえや」
仙吉はうちわを捨てると、尻をすべらせて女のそばに寄った。お七は顔が細くなで肩でほっそりしてみえるのに、そばに寄ると胸と腰が厚い女だった。
仙吉はその胸と腰のあたりに、じろじろと眼をはわせながら言った。
「今夜にも一度もどって、とりあえず向うの片をつけてくるから安心しな」
「おかみさん、うんと言うかしら?」
「うんと言わせるさ」
仙吉は坐っているお七の膝をなでた。
「なに、どうってことはねえ女だ。子供もいねえし、面倒なことは何もねえ、ひとりでやっていける女だ」
「でも、長いんでしょ?」
「長えといえば長え」
仙吉はお七の膝をなでていた手をとめて、またごろりとひっくり返った。

「ざっと八年ぐらいかな。だが、べつに惚れて一緒になった女じゃねえや。おめえは見たことがねえだろうが、でけえ女だぜ。みっともなくて一緒になんぞ歩けたもんじゃねえ」
仙吉は勢いよくはね起きると、今度はお七の胸に手をさしこんだ。
「おめえの方がずっといい女さ。経師屋でおめえを見たときから、そう思ってたんだ」
「だめ」
お七はすげなく男の手をはらった。
「ほんとにその気があるんなら、ちゃんと決まりをつけておいでよ。それまではだめ」
おとくは、熊蔵に亭主のことを話したことを後悔していた。
おとくが働いているのは、上野山内の普請場である。去年の秋に、はげしい雨風が一昼夜も江戸の町を包んで荒れ狂ったとき、上野の山の崖が、石垣もろとも一町もの幅で崩れ落ち、その上にある御堂がかたむいてしまった。
場所が山のはずれだったせいか、寛永寺では崩れたところをそのままにしていたの

だが、四月の半ばになってから工事をはじめた。梅雨前に普請を終らせたいつもりだったようだが、工事はのびて梅雨にかかっている。まだ雨の日は少ないが、空に日があっても蒸し暑く、モッコをかついでいるとすぐに汗がにじみ出て来る。

おとくは熊蔵という四十前後の男と組んでモッコをかついでいる。熊蔵はひげもじゃの固太りの男で、背丈はおとくに釣合っている。日雇いの中には、おとくだけでなく女人足が十人もまじっているが、親方は女だからと気を配るようなことは一切しない男で、熊蔵と組ませたのも、背丈だけをみてそうしたようである。

仕事にはべつに不満がなかった。日雇い仕事も身体が馴れてしまえばどうということはない。モッコをかつぐのは辛いとは思わなかった。

だが相棒が熊蔵だというのは困りものだった。熊蔵は若いころは人なみに所帯を持っていたが、女房子供に逃げられていまはその齢で一人暮らしだという男である。酒好きで稼いだ手間はその日のうちに飲んでしまうという噂も聞いている。

困ったというのは、その熊蔵が相棒のおとくに変な眼をむけはじめたからである。ひとつ棒をになってモッコをかつぐからには、仕事の間、一服の間に世間話をしないわけにはいかない。もっともおとくは口数の少ない女なので、話しかけるのはもっぱら熊蔵の方である。熊蔵はがっしりした身体に似つかわしい大声を持っている。

男にしては案外なおしゃべりで、身の回りのこと、酒のこと、たまに行く切見世の安女郎のことなどを、あたりはばからず大声で話しかける。おとくは、時には顔を赤らめながら小声で相槌を打つ。

熊蔵はそういうおとくが気に入ったようだった。こことというところではうんと力を出して、おとくをかばったりする。

「どうしたい？　顔色が悪いじゃねえか、おとくさんよ」

と熊蔵が言ったのは三日前である。その日おとくは、前の晩に一睡も出来なかったせいで、身体の調子が悪かった。仕事を休んでは親方ににらまれると思って、普請場には出て来たものの、モッコをかついでも腰がふらつき、時どき立ちくらみがした。

おめえはほんとに男まさりってものだぜ、と日ごろおとくをほめている熊蔵には、その変調がぴんと来たらしい。おとくは理由を言わないわけにはいかなかった。亭主が家にもどって来ないのだと話した。

だが心のうちを全部打ち明けたわけではない。つとめて軽い口調で言った。

「今度がはじめてっていうわけじゃないから、そんなに心配はしてませんけどね。でも、ひょっとしてどこかに行き倒れているんじゃないかなんて思ったりして、ゆうべは眠れなかったんですよ」

「女がいるんだ」
熊蔵はうなるように言った。
「やっぱりそうかしら」
「そうにきまってる」
悪い野郎だ、と熊蔵はつぶやいた。そしてそれから急に口数が少なくなったのである。口数が少なくなったのはいいが、熊蔵はそのあと急にべたべたとおとくにひっつくようになった。
いまも熊蔵は、草の上に腰をおろしているおとくのそばに、くっつくようにして寝ころんでいる。八ツ半（午後三時）の一服で、日雇いの男女は、不忍ノ池のそばにある草むらに思い思いに散らばってひと休みしている。
女同士で、しきりに甲高い笑い声をひびかせているひと組もあれば、ちょっとのひまにさいころを持ち出して、わずかの金をかけて遊んでいる男たちもいる。
暑い日がその上に射しかけていた。弁天さまのあたりにひまそうに男女が群れているのが見える。
「ご亭主は帰って来ねえだろうぜ」
と熊蔵が言った。熊蔵はむしった草の葉を嚙み嚙みつづけた。

「齢はいくつだって？」
「三十」
「ちょうど、倦きが来るころだ。もったいねえ話だ」
熊蔵は、前に投げ出したおとくの足に、ちろちろと眼を走らせた。おとくの足は太くて、男物のパッチがはち切れそうにみえる。
「ご亭主は……」
と言った熊蔵は、起き上がるとおとくが身を寄せかけている松の幹に、自分も寄りかかって足だけのばした。
熊蔵は上半身はだかでいる。汗でしめった腕が、おとくの短か着の袖から出ている二の腕に触れたので、おとくはさりげなく身体をはなした。
「おめえのいいところがわからねえのだ。そうに違えねえさ」
熊蔵はそう言いながら、おとくの横顔をなめるような眼で見ているらしい。また汗でにちゃりとした熊蔵の腕が触れて来たので、おとくは今度は立ち上がった。熊蔵の思い入れが気味悪くなっていた。
家にもどると、おとくはまっさきに外の井戸から水を汲んで来た。そしてうす暗い

台所にうずくまったまま、もろ肌ぬぎになって身体の汗をぬぐった。ことに熊蔵の腕が触れた二の腕あたりは、皮膚が赤くなるほどごしごしと拭いた。

——困った。

と、おとくは思っていた。熊蔵が何を考えてすり寄って来ているかは、おとくにだってわかる。空き家なら入りこもうという魂胆なのだ。親切で力持ちのおじさんが、急に危険でいっぱいの男に変った驚きがある。そして、なによりも嫌悪感が先立った。

おとくは仙吉と所帯を持ってから、よその男に心を動かしたことはないが、また男に誘われたこともなかった。おとくの大きな身体をみれば、男は大概二の足を踏む。おとくは自分でもそう思っていた。裏店の女房連中がひそひそと噂をしている浮気沙汰などということとは、自分は無縁だと思っていた。だが熊蔵はそうではないらしい。おとくが気に入ったらしいのだ。

だがおとくは気味が悪いだけだった。底の方に思いつめたような熊蔵の顔を思い出すと、ぞっとする。

——明日から棒を変えてもらおうかしら。

おとくが、肌をしまうのも忘れて、ぼんやりと考えに沈んでいると、入口に物音がした。おとくはとび上がりそうになった。あわてて着物の袖を通した。熊蔵は、しつこくおとくの家の在り場所を聞いたが、おとくはそれだけは口を割らなかった。

だが、その熊蔵があとをつけでもして、家までやって来たのでないかと、一瞬胆もつぶれる思いをした。だがいそいで土間に出てみると、そこには仙吉が立っていた。

「何でえ、いたのか？」

仙吉は言うなり、履物をぬいで茶の間に入った。そしてせわしなく火打石を使うと、行燈に灯を入れた。だが坐る様子もなく、隣の寝部屋とも納戸ともつかない部屋に入ると、風呂敷をひろげて物を包みはじめた。みると、包んでいるのは着換えのようなものである。おとくは物も言えず、茫然とその様子をみていたが、やっと声を出した。

「お前さん、どうするつもりなの？」

「見りゃわかるだろ？」

仙吉は木で鼻をくくったような返事をした。その間にも手を休めずに風呂敷包みをつくると、茶の間に出て来た。そして横柄な口調で言った。

「ちょっと坐んな。話がある」

おとくはのろのろと坐った。

「女が出来た」と仙吉は言った。

「浮気じゃねえ。おめえのような相撲取りのような女じゃなくて、おれがこういう女

と所帯を持ちたかったと、ずっと思ってたような女に会っちまってね」

「……」

「こうなりゃしようがねえというもんだ。おれは家を出る」

「その女のひとの家に行くの？」

「そうだよ。そんなことは聞くまでもねえ」

「あたしはどうなるのさ」

「おめえ？　おめえはおめえで勝手にしな。どうせ家にいても、大した役には立たねえ亭主だったからな、おれは。うん、そういうことは自分でわかってるんだ」

「そんな、急に言われても……」

「急もへちまもありゃしねえよ。こういうことはくだくだ言っても何にもなりゃしねえのさ。話は早い方がいい」

「ああ、どうしよう」

おとくは立ち上がった。そして茶箪笥のひきだしをあけると、真黒になった人形を取り出して、掌の中に握りしめた。

すると、おとくの胸にいくらか勇気がわいて来た。おとくは小声で言った。

「そのひと、齢はいくつなの？」

「二十二、三だ。おめえより若えよ」

「ひとりなの？」

「あったりめえだ。おれは亭主持ちの女に手を出したりはしねえ」

「……」

「髪結いをしてんだ」

「じゃ、一緒になったらお前さんは働かなくともいいね」

「バカ言っちゃいけねえよ。ちゃんと働きに出るよ。怠け者はきらいだとさ」

「つづきゃしないよ、あんた」

とおとくは言った。仙吉の最後のひと言で、おとくには亭主の今度の浮気沙汰の先が見えたように思えた。相手はしっかりしている女らしい。もののひと月もすれば、仙吉の正体は先方に知れてしまうのだ。そういうことは、仙吉本人よりも、あたしの方がよくわかっている、とおとくは思った。一時のおどろきはさめて、おとくは少し安堵の気持が動くのを感じた。

「やめなさいよ。いまにいい恥をかくに決まってるんだから」

じっさい、おとくははずかしかった。だがおとくの言い方は、仙吉を怒らせたらしい。仙吉は思いがけないすばやさで腰をのばすと、いきなりおとくの頬を張った。

「生意気な口をきくんじゃねえや。それじゃはっきり言ってやろうじゃねえか。おれはな、おめえと暮らすのはもうあきあきしたんだ。そのでけえなりは見あきた。それだけのこった」

あばよ、とめるんじゃねえぜ、と言って仙吉は勢いよく立ち上がった。待って、と言っておとくも立ち上がって部屋の入口に回ったので、ちょっとした揉み合いになった。

「このあま、じゃまするとぶっ殺すぞ」

仙吉がすごい剣幕でおとくに殴りかかったので、おとくはひいっと叫んで、手で顔を覆った。その手から、仙吉は土器人形をむしり取ると、いきなり長火鉢に投げつけた。

「何でえ、後生大事にこんなものを持ちやがって。目ざわりだ」

仙吉はどなったが、ふと声をのんだ顔つきになった。顔から手を放したおとくが、無言のまま自分をにらんでいるのに気づいたのである。おとくはきっと口をむすび、刺すような眼で仙吉をにらんでいた。

「何でい」

と仙吉は言った。部屋の中で少し後じさりした。仙吉は夫婦喧嘩になるとことさら

居丈高に、おとくをぶったりこづいたりし、おとくはおとくで、ひいひいと泣き声を立てて逃げ回りながら暮らして来た。それで家の中の釣り合いがとれていた。

だが仙吉は、心の中のどこかでこの女は、おれよりずっと力持ちかも知れないぜと思っていたのである。夫婦仲がよいときは、ほかにひともいない家だから、二人ははばかりもなく抱き合ったりする。そういうとき、興奮したおとくは「おまえはほんとにかわいいひとだよ。あたしはしあわせ」などと口走って、ぎゅっと仙吉を抱きしめたりする。

すると仙吉は、いまにも肋の骨がばらばらになりそうな恐怖におそわれて「おい、よせよ。よしなって」と必死になっておとくの腕の中から逃げ出したりしたのだ。

そのおとくが、いまはもう他人というつめたい顔つきで、部屋の入口に立ちふさがっている光景は、仙吉をおびえさせるに十分だった。

「何でい、そのつらは」

虚勢を張ってそう言ったが、仙吉はまた後じさりした。だがおとくは、亭主に襲いかかったりはしなかった。畳に膝をついて、無残にとび散った土器人形の破片をひろいあつめた。

土器人形は、二人が知り合ったころ、仙吉が亀戸天神の夜店でおとくに買ってくれ

たものである。その齢ごろのおとくは、人なみはずれて大きい自分の身体を、どんなに恥じて暮らしていたことだろう。子供たちは指さして笑った。大人は、さすがにそこまではしないが、子供たちよりもっと露骨な、めずらしい物を眺めるような眼でおとくを見たのだ。おとくは肩身せまい思いで町を歩き、人なみに誰かの嫁になるなどということは、とっくにあきらめていたのである。

だが、おとくの前に大きな身体をちっとも苦にしない男が現われた。仙吉である。仙吉は、おれはおめえのようなでかい女が好きさ、と言った。

「待ちな。もう一年たつと年季があける。そしたら所帯を持とうぜ」

そう言って、夜店で土器人形を買ってくれた。その夜、夜店の灯のとどかない木陰で、小柄な仙吉を抱きかかえるようにして口を吸い合ったことが忘れられない。

粗末な土器人形は、そのときの思い出の守り神だった。手にとれば、いつでも仙吉のやさしさとその夜の喜びがもどって来た。暮らしの辛さも亭主の無法も、いっときの災いにすぎないとこらえることが出来た。

だがおとくはいま、土器人形が四散したと同時に、大事にしていた思い出も、仙吉に対する信頼も無残に砕け散ったのを感じている。もうだめなのだ、とおとくは思った。もっと前から、だめになっていたのだ、あたしたちは。

おとくは、ひろいあつめた人形のかけらを部屋の隅の塵かごに捨てると、仙吉にむき直った。

「あんたが出て行くことはないよ」

おとくは静かに言った。

「ここは、あんたの家なんだから、あたしが出て行くよ」

仙吉は気圧されたように黙っていた。おとくが手早く着換え、さっき仙吉がしたように風呂敷に物をまとめて出て行くのをぼんやり見送った。おとくが手にさげた包みは小さかった。未練などひとつもないように、おとくは振りむきもせずに出て行った。

仙吉はどかりと坐った。おとくにしてやられたような、いまいましい気分があった。だが首を垂れて考えこんでいるうちに、胸の中に不意にむっくりと不安が頭をもたげた。

——大丈夫かね、おい。

仙吉は顔をあげて部屋の中を見回した。誰もいない家が寒ざむとして見えた。仙吉は一人ぼっちになったのを感じた。

それじゃさっさと根津のお七の家に行けばいいようなものだが、おとくが出て行ったのはもっけの幸いと、腰軽く家を出て行く気になれなかった。第一後始末というも

のがある。

——いや、そうじゃねえ。

と仙吉は思った。仙吉の腰を重くしているのは、お七はおとくのようなぐあいにはいかないだろうということだった。お七はしっかりした女で、おれがいなければ困るというような女じゃない。つづきはしない、とおとくが言ったが、いままでのような変な怠け癖が出たら、あの女はものの半月でおれを叩き出すかも知れない。

——そのときは、もどって来ればいいのだ。

仙吉は無意識にそう思い、さすがにそこで顔色を変えた。おとくが出て行ったからには、もうもどる場所はないのだ。自分のことだけしか頭にない勝手な男も、やっとおとくの有難味に気づいたようだった。

——えれえことになった。

仙吉は立ち上がった。そしていきなり外に走り出た。勝手気ままに世を渡って来たが、それもおとくのような万事のみこんだ女房がついていたから出来たことだ。図に乗って、えれえことをやったらしいぜ。

仙吉は尻をからげて走った。おとくのうしろ姿を見つけたのは蔵前通りに出てからだった。おとくはすたすたと鳥越橋の方に歩いて行く。日が暮れたばかりで、表通りの店は、店頭に灯を出してまだ物を商っていた。人通りもあった。仙吉は、二、三度ひとにぶつかりながら走りつづけ、鳥越橋を越えたところで、やっとおとくの袖をつかんだ。

「おい、おめえどこへ行くつもりだよ」

だが、その手はすげなく払われた。おとくは仙吉を見向きもしないで、足をはやめた。

「待ちなって。少し話をしようじゃねえか」

仙吉は、今度はおとくの腕をつかんだが、おとくがじゃけんに腕をひと振りすると、勢いよく地面にころんだ。その様子を見ていた通行人が、立ちどまって笑った。だが仙吉は通行人なんかにかまってはいられなかった。ころんだ拍子に痛めたらしい足をひきずりながら、おとくのあとを追った。

「おい、待ってくれよ。悪かった。あやまる。とにかく気持を静めて話そうじゃないか」

「……」

「な、家にもどろう。おめえ、何もそんなに怒らなくたっていいじゃねえか」

大またに歩いて行くおとくのあとから、仙吉は呼びかけながら、よたよたと走ってついて行った。

虹の空

一

「いい家だったねえ」

おかよは、お茶を飲みながら、まださっき見て来た家のことを言っていた。

「あそこなら、あんたが一人立ちしたときに、店のところに手を入れて仕事場にしてさ。当分は住めるものね」

政吉もそう思ってみて来たのである。場所は深川北川町の河岸端。もとは駄菓子屋だったという小ぢんまりした家だったが、ともかく表店で、家の中は六畳に、四畳半二つ、それに台所といまおかよが言っている店先がついていた。

暑い時分は西日が入ると思うぐらいが難点で、あとは申し分ないような家だった。一応手金は払って来たが、二人がその家に住むのは三月あとになる。

「もったいないような家さ」

と政吉は言った。夕刻近い東両国の水茶屋は、人影もまばらで、二人の話に聞き耳をたてるような者もいなかった。釜のそばに、盆を抱えた茶汲み女が二人、所在なげに立っておしゃべりしている。

そう言ったが、政吉の胸には、かすかな不満がわだかまっていた。政吉はお礼奉公が済んで一年たった大工である。親方の鉄五郎の世話で、この秋には深川の東門前仲町に住む大工松蔵の店に移ることになっていた。

松蔵は鉄五郎と、むかし同じ親方について修業した兄弟弟子だが、老いていい跡つぎにもめぐまれず、政吉が行くのをあてにしていた。悪い待遇はしないと言っている。当分はそこで働くことになるだろう。

所帯を持つにしても、その間は裏店住まいで間に合うじゃないかと、政吉は言ったのである。だが、おかよはきかなかった。いずれは一人立ちするんだから、いっそ狭くとも表店を借りようと言い張って譲らなかった。

おかよは、いま政吉が住んでいる神田若松町の鉄五郎の店の前にある、一膳めし屋で働いている。十人並みの顔で、さっぱりと明るい気性が、めし屋でも近所でも好かれていたので、政吉がおかよと所帯を持ちたいと言い出したときも、鉄五郎は反対しなかった。

「おれが若えころにくらべると、いまの連中は手が早えや。な、ばあさん」

などと女房をかえりみて、ひとくさりむかし話をしただけだった。政吉はおかよと、

松蔵の店に移る前に祝言をすることになっている。

かすかな不満は、おかよがはじめから表店に住むと言い張ったことから来ている。店賃のことが頭にあった。おかよは所帯を持っても、当分は近くに仕事を見つけて働くから心配はいらないと言ったが、政吉はそんな無理をしてまで、表店に住まなくとも、と思うのだ。

だが政吉は、大工という仕事柄に似ない小心な人間だった。いますぐ表店に住まわなくとも、と思う気持もその小心さから来ていたが、そのことが種でおかよと仲違いをするようになるのをもっと恐れていた。

おかよを好いている人間はほかにもいて、中には金も身分もある男もいたのを、政吉はおかよと夫婦約束が出来たのは幸運だと、思わないわけにはいかなかったのである。

気持の底にあるそのわだかまりを隠して、しかしやはり手放しでは喜べなくて、政吉は言った。

「いい家だが、二人っきりで住むには広すぎるようなもんだぜ」

「なに、言ってんのさ」

おかよは膝頭で政吉の膝をこづいた。こりっとした膝頭の感触が伝わって来て、政吉はあわてて足を引くとあたりを見回した。

「すぐに子供が出来てさ。家の中なんか、じっきに狭くなりますよ」

「……」

政吉はちらとおかよを見た。するとうるんだような眼でこちらを見つめているおかよの顔にぶつかって、政吉はうつむいた。少し顔が赤くなった。

一度だけ平右衛門町にある待合茶屋に行って、おかよと抱き合ったことがある。そのときの、かがやくばかりに白かったおかよの肌が眼の奥を通り過ぎて行った。

「ねえ」

とおかよが言った。

「あんた、表店を借りるのが、やっぱり気がすすまないんじゃない？」

「……」

「わかってるの。あんたは気性が地味だから、当分は裏店住まいで、つましく暮らしたいと思っているのよね。その気持はあたしにもわかるの。だから、決してぜいたくなんかしない。少しはお金もためてるし、出来るだけ働いて、あんたにお金の迷惑なんかかけないようにする」

「……」

「ただ裏店住まいはいやなの。生まれ落ちてからずっと裏店で育って、おとっつぁんも、おっかさんも、最後までうだつが上がらずに、そこで死んで行ったのよ」

「……」

「せっかく好いたあんたと一緒になってもさ。また、裏店にもどるのはいやなの」

「声が高えぜ」

と政吉は言った。しかしおかよの本心を打ち開けた話しぶりに、さっきまでつづいていたわだかまりが、すっとほぐれるようなのを感じた。そうか、やっぱりおかよはおれが見込んだとおりの女だった。表店にこだわったのも、べつに高のぞみをしたわけじゃなかった。

――ま、何とかなろうさ。

新しく親方になる松蔵とは、まだ手間の高まで話し合ったわけじゃないが、奉公に行くわけではない。棟梁の見習いといった格で招かれているのだから、悪いようにはしないだろう。それに、いずれ棟梁として一人立ちするときは、やはり仕事場がある表店に住むことになるのだ。

「あんたと二人っきりで、あの家に住めたらしあわせ」

おかよは、また膝頭をくっつけて来たが、政吉は避けないでそのままにしていた。

「でも不思議ね。二人とも親も兄妹もいないひとりぼっちなんて。神さまが、そんな二人を引きあわせてくれたのよ」

「うむ」

政吉は生返事をした。甘ったるいおかよの思い入れにてれたのであるが、おかよとの話が本決まりになったころから、ずーっと気持にひっかかっていたことが、おかよのいまの言葉で、またふっとうかび上がって来たせいでもあった。

――これは話しておいた方がいいかも知れないな。

と政吉は思った。話したところで、どうということはないんだから。

「ひとりぼっちだと言ったけどな。おれ、母親がいるんだ」

「えッ？」

おかよは眼をまるくした。ほんとうにびっくりした様子だった。茫然とした顔で政吉を見ていたが、口をとがらせて言った。

「じゃ、あたしに嘘ついてたの？」

「いや、そういうわけじゃねえよ」

政吉はあわてて言った。嘘をついたと思われるのは心外だった。おかよとの話が決まるまで、そのひとのことなど考えたこともなかったのだ。

「いや、おふくろと言ってもよ。ほんとの親じゃねえんだ。まま母なんだ」
「変なひと」
おかよは政吉をじっと見た。思いなしか、その眼に不信のいろがあらわれているようだった。
「まま母だって、おっかさんには変りないじゃないか？」
「そうじゃねえよ。どう言ったらいいかな」
政吉は頭をかいた。
「子供のころ、ひどくおれをいじめたんだ。だけど親父も死んじゃってね。おれは仕方なくそのひとと一緒に暮らしてたんだ。だから、いまの親方のところに奉公に出されたときは、これでおさらばだと思ったね」
「……」
「二、三度おれに会いに親方のところに来たらしいけど、おれは会わなかった。やぶ入りのときも帰らなかったよ。それっきり十二年たったんだ。赤の他人だよ」
「他人かしら？」
「そうに決まってるじゃないか。同じ江戸に住んで十二年も行き来なしで来たんだぜ。生きてるか、死んでるかもわからないが、ま、そういうひとがいるってことだけは、

話しておく方がいいと思ってね」
「それだけ？」
「それだけさ。何を考えてんだい？」
「やっぱり気になるんじゃない？」
「気にするわけがねえよ。相手は赤の他人だ」
だがおかよはすっと立ち上がって出ましょうかと言った。気がつくと、店の中の行燈に灯が入っていた。
勘定を払って外に出ると、薄闇の中におかよが立って待っていた。梅雨はまだすっかり上がったとは言えず、時どきじめつくような雨が降るが、今日のように晴れると、まるで真夏のように夜まで暑さが残った。
橋のたもとに、涼みに出た男女が、三々五々という形で群れている。きゃっきゃっと派手な笑い声が上がるのは、近所の若い娘たちが集まっているらしかった。団扇を持った若い夫婦者らしい二人連れが、二人とすれ違って行った。
「ねえ？」
両国橋を半ば近くまで渡ったとき、それまで黙っていたおかよが声をかけて来た。
「そのおっかさん、いくつになってるの？」

「さあ」

政吉は胸の中で指を繰った。おれが十三で奉公に出るとき、四十二、三だと思ったから、かれこれ五十半ばにはなってるはずだ。

「五十四、五じゃねえかな」

「名前は？」

「おすがと言うんだ」

「いまも、あんたのむかしの家にいるかしら？」

「さあ、わからねえな」

なにしろあれから十二年も経っているのだ。その間に住居を移ったかも知れないし、どこかにまた後添えに行ったかも知れなかった。ひょっとして、病気で死んだということだって、ないことじゃない。

そう思ったとき、政吉の胸を、かすかにうしろめたい感じが通り抜けて行った。

――かりにも親なのだ。

政吉は、奉公に出たあと、二、三度若松町の親方の家をたずねて来たおすがのことを思い出していた。政吉は会わなかったが、おすがはそのつど縫いあげたばかりの浴衣とか肌着、それに新しい草履や手拭いなどを置いて帰った。しかし政吉に会う気がないことをさとったのか、そのあとはぷっつりとたずねて来なくなった。

そうして十二年が過ぎたのである。まま母にいじめられたという気持しか残っていないが、むこうは、やはりそれでも息子だと思っていたのだろうか。

「気になるなら、一度たしかめて来たらどうかしら？」

不意におかよが振りむいて言った。

「ただ、一緒に住むのはいやですよ。そんなひとがいるなんて、あたし知らなかったもの」

政吉は答えなかった。眼をあげて西空を見た。日はとっくに落ちて、かすかな赤味を残す雲が残っているだけだった。まだ夏とも言えないのに、どことなく秋を感じさせるようなはかなげにうすい雲だった。

二

案じるほどのこともなく、おすがの消息はすぐにわかった。本所の竪川べりにある、むかし住んでいた裏店がある町から、ひと町東に離れたところにある木綿問屋に、住みこみで奉公していた。

はじめ若い男が出て来たが、用件を言うと今度はおかみが出て来て、政吉に上がれと言った。

「いえ、ここにちょっと呼び出してもらえばいいのですが」

「何をおっしゃいますか、あなた」

と、太ったおかみは叱りつけるように言った。

「おすがさんに、こんな立派な息子さんがいるなんて、まあ、ちっとも知りませんでしたよ。あのひとは何も言わないひとだから」

「……」

「ひさしぶりにおっかさんをたずねて来たんでしょう?」

おかみは満面に笑いをうかべていた。

「さあさ、上がってゆっくり話して行きなさいよ」

おかみに案内されて、政吉は店から上に上がり、明るい茶の間の前を通りすぎて、台所に行った。

小さな懸け行燈の光の下で、髪の白い小柄な女が水仕事をしていた。夜食の後始末をしている様子だった。

「おすが、さん」

木綿問屋のおかみは、そのうしろ姿に、はずみをつけた笑い声で呼びかけた。

「あんたの、いいひとがたずねて来たよ」

女が振りむいた。そして持っていた皿を落としそうになり、あわてて流し台に置いた。

「おや、政吉」

と、おすがが言った。政吉は黙って母親を見つめた。髪が白くなって、顔に皺があらわれているのにも胸を衝かれたが、思っていたよりもずっと小柄なのにも驚いていた。眼の前にいるのは、かつて自分を打ち叩いた恐ろしい母親ではなく、ただの小柄な年よりだった。

「片づけは、明日おてるが来たらやらせたらいいよ。いい加減にして、息子さんとゆっくり話しなさいな」

「ありがとうございます、おかみさん」

おすがはそう言ったが、おかみが茶の間の方に去って行くと、ちょっと政吉に笑いかけて、すぐに済むから待ってなと言った。

おすがの部屋は、台所のすぐそばにあったが、四畳半の部屋でそんなに狭くなかった。裏店を引きあげるとき持って来たらしく、見馴れた箪笥と茶箪笥があった。

その茶箪笥から、お茶の道具を出して、お茶を入れながらおすがが言った。
「よく、ここがわかったね」
「うん、裏店に行ったら、すぐ教えてくれたよ」
「あそこにも、しばらく行ってないよ」
「そうだってな。引き払ってから七、八年になるんだってな」
はい、お茶と言っておすががお茶を出したので、二人はしばらく黙ってお茶をすすった。
「住みこみは一人だけかい」
部屋の中を見回してから政吉が言った。
「一人だよ。朝になると、通いのひとが二人来るけどね」
「それじゃ大変じゃないか」
と政吉は言った。暗い明かりの下で、水仕事をしていた母親のうしろ姿を思い出していた。
「気が休まるひまがないだろうに」
「なあに、一人でする仕事はそんなにあるものじゃないし。それに大事にしてもらってるから、お前が心配することはないよ」

おすがはうつむいて、小声で言った。ほんとの母親が、息子に何か言いわけをしている恰好に見えた。おすがは、十二年の疎遠を、まるで気にかけていないようでもある。
それに気づいて、政吉も少し突っぱなすような口調で言った。
「おれ、今度嫁をもらうことにしたんだ」
「おや、そうかい」
おすがは眼をあげ、確かめるような眼で、しげしげと政吉を見回した。
「ほんとに」
と、おすががつぶやいた。
「もう一人前だものね。そうかい。そりゃよかったじゃないか」
「よかったかどうかは、一緒になってみなきゃわからないさ」
「そんなこと言うもんじゃないよ。きっといい子だろう。名前は何て言うんだね？」
「おかよって言うんだ」
「祝言はいつになるんだい……」
「今年の秋だ。おれも、奉公がおわって、一人前の職人だからな」
「早いもんだよ」

とおすがは言った。

「自分が年取るのはあんまりよくわからないけど、子供が大人になるのは早いよ。所帯を持ったらどこに住むんだね？」

「深川だ。北川町だよ」

そう言ったが、政吉はいそいでつけ加えた。

「だけど、所帯を持ってもおっかさんを引き取るってわけにゃいかないよ。裏店の、狭いところに住むんだ」

「そんな、お前……」

おすがは当惑したようにつぶやいたが、すぐにむかしの気の強さを取りもどしたように、きっとした口調になって言った。

「そんな心配はいらないよ。あたしゃこうして、誰の世話にもならずに自分で喰べて行くのが性に合ってるのさ。お前の世話になろうなんてことは、考えたこともないよ」

「……」

「お店のひとたちも、いいひとばかりでね。おかみさんが、死んだらここの家からお葬式を出してやるから、自分の家だと思っていてくれなんて言ってくれるしね。お前に心配はかけないよ」

政吉はほっとした。これでおかよとも、よけいな口喧嘩をしたりせずに済む。

だがその安堵には、やはり少しうしろめたい気持がつきまとっていた。裏店に住むと、嘘を言ったことも気が咎めた。

「こんなことは聞いたこともなかったが……」

政吉はうしろめたい感じを埋めあわせるように聞いた。

「おっかさんには、ほかに身よりはいないのかい？」

「いるさ。木の股から生まれたわけじゃあるまいし」

とおすがは言った。おすがは、小石川の北、指ヶ谷で生まれた。一度神田の小柳町に住む経師屋に嫁いだが、そこの姑と合わず家をとび出した。そのあと同じ神田の瀬戸物町にある小間物問屋に女中奉公をしているうちに、出入りの小間物売りに見染められて所帯を持った。だが麻次という名のその小間物売りは、女癖が悪く、外見は女のような優男なのに、文句を言うと、おすがを半殺しの目に合わせるような男だった。

いたたまれずそこもとび出して、今度は東両国の小料理屋に住みこみ女中で働いた。

「そこでお前のおとっつぁんに会ったんだよ」

とおすがは言った。かすかに歯を見せて笑った。

「お前のおっかさんに死なれて、困ってる、と言ってね。骨と皮みたいに痩せてるのがあわれで、一緒に暮らす気になったのさ。ところが来てみると、指物師だというのに嘘はなかったけど、裏店住まいの通い職人でね。お前はまだ二つ。乳離れもしていなくて、行ったその日から近所にもらい乳をして、夜は抱いて寝てさ」

「……」

「そんなふうだったから、指ヶ谷の実家にも帰ったことなどないよ。経師屋を出たときに一度帰ったきり、それも兄と喧嘩してすぐにとび出したから、ちょいちょい帰れるような家じゃなかった」

「……」

「兄も死んでさ。小さな煮豆屋なんだよ、家は。いまは甥が跡をついでるって、ひとに聞いたけど、行ってみる気はしないね。でもそんなことは、お前が気にすることはないよ。こうして安気に暮らしてるんだから、かまわないでおくれ」

三

おすがは結局、ひさしぶりに会った息子によりかかって来るような気配はひとつも見せなかったのである。いまのままがしあわせだと、暗に政吉が気をつかうのを封じたようでもあった。

——これでいいのかも知れない。

政吉はほっとしていた。もともと所帯を持つから母親を引き取ろうか、などと殊勝な気持でたずねて行ったわけではなかったのだ。むしろ逆だった。

おかよと所帯を持ったあとで、母親でございなどと、どこからか老いさらばえた女がころがりこんで来たりしたら困る。その気持がどこかにあって、様子を見に行ったと言えなくもない。だが、おすがにはそういう気持はないらしかった。

——これで済んだ。

と政吉は思った。だがその安堵には、さっきおすがの部屋にいたときにも感じた、あるうしろめたい気持がからんで来るようだった。

おすがは真実、いまのひとり暮らしが気に入っているのだろうか。かりにそうだとしても、もっと年取って動けなくなったらどうする？

——それだって仕方ないさ。あのひとは他人なんだからな。

しかし、木綿問屋の主人夫婦は変に思うだろうな、と思った。息子だと名乗る、れ

っきとした一人前の男がいるのに、母親を引き取るふうもないのを、おかしいとは思わないだろうか。

思われたって構いやしないさ、と政吉は思った。そのうちおすがが自分で話すだろうよ。あの子は息子という形にはなっているが、こういう事情で、ほんとは赤の他人なんです。あの子を頼るわけにはいきません、と。

——他人？

暗い道で、政吉はふと立ちどまった。これまで思い出したこともなかった、ひとつの光景が頭の中を横切ったのである。

おすがにつながる思い出といえば、叱られ、殴られたことしか残っていなかった。飯をこぼしたといっては叱られ、土間を掃くのを忘れたといっては殴られた。夕方、友だちと遊ぶのに気をとられて、暗くなってから帰ったことがある。おすがは内から心張棒をかって、家に入れなかった。泣こうとわめこうと許してくれなかった。

そのときの外の闇のこわさを、政吉はいまも思い出すことが出来る。表通りに買い物にやられ、釣り銭をごまかして半死半生の目に合わされたこともある。

父親は、そういう政吉を、哀しそうな眼で黙ってみているだけで、助けてはくれなかった。そのころ父親は酒で身体をこわし、それでも酒を飲むのをやめなかった。働きにも出かけたり休んだりしていた。

政吉は母親をのろい、父親をのろった。もうそのころには、近所の者に耳打ちされて、おすがが本当の母親でないことを知っていたのである。あれは、あんたとは血がつながっていない他人さ、と近所の女はささやいたのだ。

——だが、あれは……。

政吉の眼に、いまうかんでいるのは、ある夕方の光景だった。政吉はおすがに手を曳かれて歩いていた。ふだん着とは違う、いい着物を着せられて、どこかの寺にお詣りに行ったようでもある。その帰り道だった。二人が歩いているのは、長い塀ばかりがつづく、人通りもない道だった。日が落ちて、白い靄のようなものが道に漂っていたのをおぼえている。

その黒く猛だけしい犬は、靄の中から現われたのである。政吉の眼には小牛のように見えた。軀も大きく、声も大きかった。すさまじい咆え声に、政吉は胸が苦しくなり、おすがの帯をつかんで泣き叫んだ。そのときおすがは政吉の手をふり払って、小さな身体を土塀に押えつけると、石を拾って犬に立ちむかって行ったのだ。

犬は小さな政吉を狙っているようだった。おすがの手の下をかいくぐって、政吉に喰いつこうと跳躍して来た。長い牙と、赤い眼と、すさまじい咆え声が、何度か政吉

の眼の前に迫ったが、そのたびに政吉の前におすがが立ちはだかった。犬と組み合って、おすがは何度も地面にころんだようでもある。

ついにおすがは、政吉を深く懐に抱きこむと、塀の下にうしろ向きにうずくまってしまった。母親の顔から血が滴っているのをみて、政吉はいっそうおびえ、声をかぎりに泣き叫んだ。そのとき、威嚇的な犬の咆え声にまじって、人の声が聞こえたようである。記憶はそこでとぎれている。

——他人じゃない。

おぼろに見える両国橋の方に歩きながら、政吉ははっきりとそう思った。赤の他人はあんなふうに必死に、おれをかばったりはしない。おれに辛くあたったのも、つまりは後妻に来た家に何の希望もないことに、気持が荒んでいたのではなかったか。

石を摑んで犬に立ちむかって行ったおすがの姿に、暗い台所で水仕事をしていた年よりの姿が重なった。

四

「そんなふうになるんじゃないかと思ってたのよ」

おかよは苦笑するような声でそう言ったが、顔は笑っていなかった。つめたい眼で、政吉を見据えた。

「あんたには、そういう弱いところがあるんだから。きっとそう言い出すと思った」

「……」

「でも、あたしはごめんだよ。どうしてもそのおっかさんを引き取るというなら、あんたとの話、少し考えさせてよ」

「部屋数はあるんだぜ。年よりひとり置いたって、どうてことはないじゃないか。昼はお前もいないんだし」

「いやよ」

「そうかい」

ぐいとむかっ腹が立って、政吉も言った。

「そういうことなら、おれの方でも考えさせてもらおうか」

二人は無言で、両国橋の西河岸の水茶屋を出た。ひとのいないところに来たが、おかよはいつものように寄りそっては来なかった。政吉を振り切るように先に立って歩いて行く。政吉はまた腹立ちがこみ上げて来た。

「ここで別れよう」

橋のたもとに来たとき、政吉はぶっちょうづらで言った。
「お前は先に帰んな」
「どこへ行くの？」
おかよが鋭く言った。
「どこへ行こうと、よけいなお世話だ」
「おっかさんのところへ行くんでしょう？」
暗くて表情は見えないのに、政吉はおかよが口をひんまげてそう言ったように感じた。
「行ってらっしゃいよ。行って、たんとお乳を飲んで来なさいな」
そう言うと、おかよはくるりと背をむけて広小路の方に歩いて行った。広小路には、まだ人通りがあって、暗い中を、いそぐでもない提灯の明かりが行き交っている。浴衣の裾からこぼれる白い踵が、しばらくちらちらと闇に動いたが、やがておかよの姿は見えなくなった。政吉は背をむけて橋を渡った。
――ヘッ、あきれた女だぜ。正体見たぞ。
何が考えさせてもらうだ。むかっ腹を立てながらずんずん歩いたので、政吉は橋の上で、やはり提灯無しでむこうから来た男と、あぶなくぶつかりそうになった。

――事をわけて話したのに、あんなにべもねえ返事をするとは思わなかった。いい玉だよ。
はじめは腹立ちまぎれに、そのへんで一杯やってもどろうかと思っただけなのに、政吉はおかよの悪態に煽られたように、いっそおふくろのところまで足をのばしてみようか、と思いはじめていた。
政吉が行くと、おすがは驚いた顔をした。
「おや、また来たのかい？」
「うむ。ちょっとこの先まで来た帰りなんだ」
ばつが悪くて、政吉はそう言った。この前はじめて来たときから、十日も経っていない。
「じゃ、上がってお茶でも飲んで行くかい？」
「ああ」
おすがは政吉を上にあげると、茶の間にいる主人夫婦にことわりを言って、自分の部屋に連れて行った。
「少し、肩もんでやろうか」
お茶を飲みながら、いまかかっている仕事の話などをしたあとで、政吉はふと思い

ついてそう言った。
おすがはびっくりしたように政吉を見、ついできまり悪そうな笑顔になった。
「いいよ。疲れてるだろうに」
「疲れてなんぞいねえよ」
うしろに回って、政吉はおすがの肩につかまった。薄い肩だった。
「変な子だよ、お前も」
おすがは肩をもまれながら、くすくす笑った。
「十年も音沙汰なしでいて、急にたずねて来たと思ったら、今度は肩もんでやろうなんてさ」
政吉も笑ったが、ふと声をのんだ。笑っていたと思ったおすがが、いつの間にかすすり泣いているのに気づいたのである。肩の顫えが、政吉の手に伝わって来た。政吉は無言でゆっくり肩をもんでやった。母親の長い孤独が、静かに胸に伝わって来るのを感じていた。
しばらく泣いてから、おすがは袖をたぐって涙をふくと、きっぱりした声で言った。
「もういいよ。ああ、さっぱりした。ひとに肩もんでもらったのは何年ぶりだろう」
「……」

「お前がまだ小さいころにもんでくれたことがあったけど」
「そうかね」
母親から離れて、さっきの場所にもどりながら政吉は笑った。おぼえていなかった。
「おっかさん」
と政吉は言った。
「おれが所帯を持ったら、一緒に暮らさないか」
「……」
おすがはじっと政吉の顔を見つめたが、静かに首を振った。うつむいて茶を入れかえながら言った。
「気持はありがたいけど遠慮するよ」
「どうしてだい」
「せっかく新所帯を張ろうてのに、急にこんな年よりが割りこんだら、嫁だっていい気はしないよ。おかよさんだっけ？　そのひとがどう言ったかは知らないけどね」
「四の五の言ったら、あいつとは別れたっていいんだ」
おすがは手をとめて、また政吉の顔をじっと見た。
「何かあったのかい、そのひとと」

「……」

「あたしのことで、そのひとと喧嘩でもしたんなら、よしとくれ。そりゃ、これまでお前と一緒に暮らしてたんなら、話はべつだよ。そうじゃないんだから」

「……」

「赤の他人と同じだったんだから。お前が若松町に奉公に行ったとき、お前はあたしがたずねて行っても会わなかったね。あのとき、ああ、お前に捨てられたんだと思ったもの」

「……」

「こうして、またたずねて来てくれただけで十分さ」

おすがは深い溜息をついた。

「ああ、まだ少しは親だと思っててくれたのかと思ってね。あたしゃ、この前お前が来てくれた晩は、うれしくて眠れなかった」

おすがは笑った。政吉がこれまで見たこともない、やさしい笑顔になった。

「それだけでいいんだよ。だから、あたしのことで、そのひとに無理を言ったりするのは、やめておくれ。こうして不足なく一人で暮らしてるんだから、何も心配いらないよ」

五

南品川にある海苔問屋が建て替えをするので、政吉は鉄五郎に言われて見積りに行った。使える古材は生かして使ってくれという注文が先方から出ていた。それでかなり大きい店構えのその家を丹念に見て回り、そのあとざっと見積った掛り費用のことで、店の主人と話し合い、軽く酒を馳走になって海苔屋を出たときは、八ツ（午後二時）を過ぎていた。

海沿いの町を吹き抜けて行くのは、初秋の風だった。風は濃い汐の香を含んでいる。政吉は酒が入って、いくぶん火照る頬を風にさらしながら、いそぎ足に町を歩いた。すれ違うひとの中に、宿駅の町らしく旅姿の者がまじっている。

親方の鉄五郎は、去年あたりから、時どき政吉に仕事をまかせるようになっていたが、今度の海苔屋の建て替えも、政吉にやらせるつもりらしかった。古材を使うので、仕事はむつかしい。しかしそうやって少しずつむつかしい仕事をこなさなければ、一人前の棟梁にはなれないのだ。

まかせられれば、今度の仕事を終ってから、深川の松蔵の店に移ることになるだろ

う。親方の行きとどいた心配りが感じられた。

歩きながら、政吉はさっき見て来た海苔屋を頭の中に思い描き、はじき出した見積りに間違いはないかと確かめた。間違いはなかった。政吉は足どりがはずむのを感じた。

その浮き立った気分に、うすい影がさし込んで来るのを感じたのは、大木戸を出たころだった。

今度の仕事をまかせられることになったら、おかよとの祝言の日取りを、いつにしようかと思ったのである。仕事にかかる前にやってもよかった。祝言といっても、そう大げさなことをするわけではない。いまいる親方の家にごく親しいひとを集め、職人に祝ってもらうだけである。深川の松蔵親方も来るはずだった。そういう段取りは、親方のかみさんが考えていた。

——おっかさんを呼ばなきゃな。

そう思ったとき、政吉の胸にわずかに重苦しいものがすべりこんで来たのである。おすがにああ言われたので、政吉はおかよに強いておすがを引き取るとは言わなかった。だがおかよの言い分を承服したわけではなかった。心の中に不満が残った。それでいながら、政吉はそのあと、待合茶屋で二度もおかよと寝たのである。

そういう自分に、むくりと腹が立つようだった。

——いっそ、海苔屋の仕事が終ってからにするか。

腹立ちにそそのかされたように、政吉はおかよとの祝言を先にのばすことを考えたりした。南品川の海苔屋を出たときの、はずむような気分は失われていた。酒の気もさめた。

若松町に帰りつくと、政吉がまだ草鞋も解かないうちに、奥から親方のかみさんが走り出て来た。

「政ちゃん」

おかみはあわただしい顔色で、むかしからそう呼んで来た言い方で、政吉に呼びかけて来た。

「今日、徳右衛門町で昼火事があってね。喜多屋という木綿問屋が焼けたよ」

政吉は、解きかけていた草鞋のひもをしめ直すと、無言で立ち上がった。

「あんたのおっかさんがいる家だというじゃないか。おかよさんが血相変えてとび込んで来てそう言うから、あたしゃはじめて知ったけど、あいにく親方も職人も、ほら、鳥越の仕事場に行ってるし。あんたの帰りを待ってたんだよ」

政吉は親方の家をとび出すと、懸命に町を走った。広小路に出て、両国橋をわたる。

そのあたりでは、遠い町の昼火事など知らないのか、人びとはのんびりとした顔で歩いていて、走り過ぎる政吉を怪訝そうに見送った。

息が切れて、竪川のそばに出たところで政吉は足をゆるめた。川べりの道に、やがて人が多くなった。火事見物からもどるひとらしかった。政吉は気をせかれて、また走り出した。二ツ目橋を、橋板を踏み鳴らして渡った。遠く町の上を這う煙が見えて来たのは、林町側の河岸地に走りこんでしばらく行ったころである。

近づくにつれて、煙はまがまがしく黒く眼に入って来た。町の屋並みを覆って、煙はまだ動きつづけ、その先は竪川の水面にまで垂れている。しかし火事は終ったらしく、火は見えなかった。

まもなく、ごった返す人波にぶつかった。多くは弥次馬のようだったが、中には焼け出された人間もまじっていて、うつろな眼つきで、行李を肩に子供の手を引いた男とすれ違ったりした。親子は二人ともはだしだった。

走って来たせいばかりでなく、政吉は高い動悸に胸を喘がせながら、ひとの群れをかきわけて前に進んだ。物の焼ける匂いが鼻をつき、やがて焼けあとが見えて来た。十軒前後は焼けたようで、喜多屋は影も形もなくなっていた。

「ちょっと、通してくんな」

政吉は前に立ちふさがっている男を押しのけて、強引に前に出たが、そこで立ちどまった。

おすがと、まだ煙に包まれている焼けあとの道をおかよが歩いて来るところだった。政吉が見ていると、やがておかよが地面に跪いて、おすがを背負った。おかよは小太りだが、背はあまり高くない。小さく小太りの女が、小さくて痩せている女を背負って、よたよたと歩いて来る。

政吉が走り寄ると、おかよは政吉の顔を見上げ、ほっとしたように額の汗を拭いた。

「大丈夫か」

おかよの背から母親を抱きおろし、自分の背に背負い直しながら、政吉は背中の母親に声をかけた。

「大丈夫だよ。びっくりしただけだよ」

しっかりと政吉の肩につかまりながら、おすががそう言った。

「焼けちまってね。お店のひとたちは親戚のところに行くって言うんだけど、あたしもついて行っていいもんかどうかってね。心細くていたら、おかよさんが来てくれたんで助かったよ」

「足をくじいたらしいの。大したことじゃないといいけど」

とおかよが言った。喜多屋は火元でなく、隣の家からのもらい火だったが、あっという間に火が回って、逃げ出すのに精一杯だったと、おすがは言った。

「箪笥の物も、みんな焼けちまってさ」

「いいさ。着物なんざ、すぐ買ってやるよ」

と政吉は言った。そして寄りそって歩いているおかよの手を、おすがに知れないように軽く握った。

「済まなかったな」

「何言ってんのさ」

おかよは、政吉がうろたえたほど、強く手を握り返して来た。

「あんたのおっかさんは、あたしにもおっかさんじゃないか」

こういうことになると、と政吉は思った。やっぱり祝言をはやめて、北川町の家に越すしかねえな。

振りむくと、黒煙に包まれた町がいつの間にか遠くなって、その上に大きな虹がかかっているのが見えた。東の空に真黒な雲が湧いて、いまにも雨が降って来そうだったが、その空を背に、虹はあざやかに色を濃くして行くようだった。

「ひと雨来そうだぜ」

政吉は大きな声で言った。そして背中の母親を、なんて軽いんだ、まるで子供じゃないかと思っていた。

禍

福

四月の七ツ（午後四時）下がりにしては、暑すぎる日射しだった。幸七は歩きながら腰の手拭いを取って、顔の汗を拭いた。汗は顔だけでなく、膚にもにじんでいた。

幸七は小間物売りである。背に小間物の荷を背負って、小旗本や御家人の組屋敷がならぶ、南本所の武家町を歩いていた。両側に板塀がつづく武家町の路地は、歩いているひとの姿もなく静まりかえって、時おり風が吹き過ぎると、塀の内の木々の若葉がひとしきり日をはじいてざわめくだけだったが、その風も生あたたかかった。

——まるで、真夏じゃねえか。

背中の荷をゆすり上げながら、幸七はそう思った。不機嫌になっていた。

夏というにはまだ早いだろうに、ぱんと張りつめたような暑い空気も不快だったし、今日の商いの不首尾も気持を苛立たせていた。

朝から歩き回って、売れたのは貝につめた鬢つけ油ひとつ、房楊子二本、男物の煙管一本、それに張形一本である。売れなかった荷が肩に重い。幸七は、女が使う秘具をしのばせた荷を背負って、町を歩いている自分にも腹を立てていた。

武家町を抜けて、竪川に沿う林町の通りに出ると、暑い日は正面から幸七に射しかけて来た。通りには、まだ溢れるほどひとが動いていたが、幸七はもうほかに回る気をなくしていた。早じまいにして、湯屋にでも行こうと思った。

人ごみを掻きわけるようにして歩きながら幸七は少し気持がうつろになっていたらしい。そのため、前から来る白髪の男を、見たことがある男が来る、とぼんやり眺めたようである。だがすぐに、その男が顔見知りの佐倉屋の主人だとわかって、わかったときには、佐倉屋はもう幸七が横町に逃げこむことも、知らぬふりで眼を伏せてすれ違うことも間に合わない距離に来ていた。

幸七は足をとめ、そのため前後に動いている通行人に、肩や腕をこづかれながら、あいまいな笑いをうかべて佐倉屋を待った。

佐倉屋の主人は、眼の前まで来た。そしてちらと幸七を見たようだったのに、そのまま通りすぎて行った。相手を失って、幸七の愛想笑いは不様に取りのこされた。佐倉屋は、幸七に気づかなかったのである。

——なんだい。

幸七は、大いそぎで愛想笑いを顔の内側に引っこめた。それでもひとがじろじろと幸七を見る。バツが悪く腹が立った。

佐倉屋は糸問屋の主人で、幸七が日本橋平松町の糸屋で手代をしていたときに、懇

意にしてもらったひとである。だがそれは五年も前のことである。様子が変っていたのでわからなかったのかも知れない。

それならそれでよかった。しがない小間物売り姿など、見られたくはなかったのだ。借りたままになっている一分の金のこともある。幸七は、逃げる足どりになって歩き出した。

だが、首筋をつかまれるような気分で、数歩行ったところで、ひょいとうしろを振りむいたのは、何となくうしろから見送られている気がしたせいである。

はたして、佐倉屋は四、五間先に立ちどまってこちらを見ていた。今度はかわしようもなく眼が合ってしまった。佐倉屋は笑顔になって道をもどって来る。仕方なく幸七も足を返した。

「しばらくじゃないか、手代さん」

と佐倉屋は言った。二人は人ごみを避けて、道ばたの印形屋の軒先に身を寄せた。

「どうも見たようなひとだと思ったら、やっぱりあんただった」

「あの節はどうも、いろいろと……」

幸七は、むかし世話になった挨拶とも、返していない金の詫び言とも、どちらにもとれるようなあいまいな言葉を口にした。あの借金のことを、佐倉屋はおぼえているだろうかと、ちらと思った。

遊ぶ金が足りなくて、心安だてに借りた小金だが、そのあと暮らしが一変して、返すゆとりもなく、半ばは忘れていた借金だった。一分の金は、佐倉屋にとってははした金だろう。まさか催促もすまいと思ったが、幸七は不安だった。一分の金は、いまの幸七にとっては小金とはいえない。

幸七のそんな思惑には気づくわけもなく、佐倉屋は大きな声でしゃべっていた。髪は真白に変っていたが、声はむかしと変りなく力強かった。

「あんたが井筒屋さんをやめたと聞いたときは、あたしゃびっくりした」

と佐倉屋は言った。

「いまごろこんなことを言っちゃ何だが、あたしゃいずれ、井筒屋さんはあんたがつぐことになるのかなとみていたのだ。何かそんな話もあったそうじゃないか」

「はい」

「ところが、そうはならずに朋輩の長次郎さんというひとが婿になった。これはまずいなと思っていたら、案の定だった。あんたは井筒屋さんを出て、辰巳屋さんに行ってしまった」

「……」

「辰巳屋さんはね。あたしんとことは取り引きがなかったが、あたしゃ事情は知ってった。あのころはもうだいぶ傾いていた店ですよ。商い上手のあんたが、どうしてそんな店に鞍がえしたかと、あたしゃ首をかしげたもんだ。知らなかったかね」

「いえ、知ってました。でも、うちに来て店を立て直してくれないかと言われましてね」

「無理、無理。辰巳屋さんはね、ずっと潰れるように潰れるように商いをして来た店です。商売人としては、でたらめなひとだった」

佐倉屋は首を振った。そうしてから不意に声を落とした。

「で、いまは？　何をしていなさる？　背中の荷は何ですか？」

「小間物です」

「ははあ、小間物売り……」

佐倉屋は、幸七の姿を上から下までじろじろと眺めおろした。そして裁きをくだすように言った。

「あんたも運の悪いひとだな。あのまま井筒屋さんにいたら、婿さんにならなくともいまごろは番頭をしていたろうに」

幸七は、全身に新しい汗がどっと噴き出すのを感じた。佐倉屋の主人の、無遠慮な口ぶりには慣れていたはずだが、はっきりそう言われるとやはり胸の中に屈辱感が煮えたぎった。

「ま、がんばりなさいよ。人間どこで芽が吹くか、こりゃ誰にもわかりはしない」

「ええ、落ちるところまで落ちましたからね。これ以上悪くなることもないでしょう」

辛うじて幸七は切り返したが、佐倉屋はそれには答えなかった。あわれむような微笑をうかべて、ではまたなと言った。

そのまま行くかと思ったら、佐倉屋はくるりと振りむいた。

「そうそ。あんたに金を貸してあったな、一分」

「はい、一分お借りしてます」

「あたしも商人でね。こまかいことを言うと思うか知らんが、呉れた金じゃないから、気になる」

「ごもっともです。近いうちに持って参じます」

「いや、忘れてなきゃいいのだ。べつにいそいで返してもらうにはおよばない」

佐倉屋はそう言うと、今度こそすたすたと遠ざかって行った。

――ちきしょう。

幸七は胸の中で呪詛の言葉を吐き散らした。呪詛は、五年前の借金を忘れていなかった佐倉屋にも向けられていたが、佐倉屋に、面とむかってあわれまれた自分自身にも向けられていた。

荷をゆすり上げると、背中の汗が気味わるく粘りつくのが感じられた。みじめな気分で、幸七は歩き出した。あんたも運の悪いひとだと言った佐倉屋のひと言が、まだ槍のようにぐさりと胸に突きささっていた。重い槍を、胸にぶらさげたままで、幸七は力なく足を運んでいる。

——あれが、はじまりだったのだ。

不運のはじまりは、いつだって明瞭に見えていた。いそえという女と一緒になったからだ。だが、「いそえというと、あんたは浜のうまれかね」などと言ったのは幸七なのだ。そもそもの不運は、胸をときめかしていそえにそう話しかけたときからはじまったのである。

そのことを考えると、幸七の頭は怒りで暗くなる。だが、男として言ってはならないことだと思うから、いそえには言ったことがなかった。だからいそえは、幸七の頭の中にあるその暗い怒りを知らない。

日本橋平松町の井筒屋は、老舗の糸屋である。五年前に、幸七は井筒屋で手代をしていた。

幸七は、井筒屋の子飼いの奉公人で、その三年前に奉公の年季が明けると、いきなり手代に引き揚げられた。むろん商いの才幹を認められたのである。幸七は二十五だった。

番頭の惣六がいて、二つ年上の手代長次郎がいたが、幸七の商いの才覚は二人を上回っていた。と、それはあとで主人の佐次右衛門が言ったことである。幸七は店の中でもきりきりと働いたが、やがて糸の仕入れを一手にまかせられるようになった。

糸の目利きでは、佐次右衛門をのぞけば、井筒屋では幸七にかなう者はいなかった。仕入れをまかせられると、幸七は糸の質のことでは古いつき合いの問屋にも注文をつけ、また客の好みをこまかに聞きただして、これまでの問屋にその種の品がないとわかると、新しい問屋をさがし回って、そこから新規の糸を入れたりした。

仕入れといえば、毎月決まった種類の糸を、ほぼ決まった数量だけ確保すればよかったやり方は一変して、井筒屋は客が欲しがる糸をそろえていると言われ、同じ値段でも井筒屋の糸は質がよいと言われるようになった。

そのころ、古いつき合いの佐倉屋が、幸七に「注文の品は何としてでもうちでそろ

えるから、新規の取り引き先をふやしてこっちを袖にするようなことはやめておくれ」と、苦情を言ったことがある。幸七はいきいきと働いていた。働くのが面白くてたまらなかったのだ。

そして、五年前のある日、主人夫婦に奥の部屋に呼ばれた。話は縁談だった。井筒屋にはおるいという娘がいた。一人娘で十七だった。いずれは同業の店あたりから、しかるべき婿養子をむかえるひとだろうと、幸七は主家の一人娘を遠くから眺めていたのである。自分とおるいを結びつけて考えたことなど、一度もなかったと言ってよい。

だが、佐次右衛門が切り出した話は、おるいとの縁談だったのである。聞いているうちに、幸七は顔色が変った。そのころ幸七は、水茶屋勤めの娘いそえと夫婦約束をかわしていたのだ。

「外から婿を入れることも考えたが、やはりこの店の商いを一番よくわかっている者に跡を譲るのが一番いいと思ってな」

そう言っている佐次右衛門の声を聞きながら、幸七は自分が断崖の淵に立っているのを感じた。だがまだ落ちたわけではなかった。引き返して井筒屋の婿におさまる道もないわけではないと思った。二、三日考えさせてくれと、幸七は言った。

だがいそえに会ってみて、幸七は引き返す道などとっくに絶たれていることを知った。いそえはきめのこまかい肌を持つ、男好きのする顔立ちの娘だったが、頭はよくなかった。幸七が、それとなく手切れをほのめかしたのにも訝しそうな顔をしただけである。のみこみが悪かった。それだけではなかった。いそえは幸七の子供を身籠ったらしいと打ち明けた。

姿も、たまに聞く声も老舗の娘らしく品のいいおるいの姿が、みるみる遠ざかるのを感じながら、幸七はそのときいそえと腹の中にいるかも知れない子供に対して、突然殺意が湧き上がるのを感じたのだが、まさか殺したりはしなかった。

そのかわり、主人夫婦には親が決めてくれた娘がいると嘘をついてことわり、おるいの婿に朋輩の長次郎が決まると、井筒屋からひまをもらって同業の辰巳屋に移った。そしていそえと所帯を持った。一直線に断崖を落ちたのである。

少なくとも幸七はそう思ったのだが、間もなく、それでもまだ底まで落ち切ったわけでないことをさとることになった。辰巳屋がつぶれて、幸七は暮らしの道を失った。辰巳屋は、はじめの間法外と思われるほどのいい給金をくれたので、幸七は店の近くにしもた屋を一軒借りて、腹の膨らんだいそえと暮らしはじめたのだが、その暮らしは一年ちょっとしかつづかなかったのである。店がつぶれると、たちまち家賃も払え

なくなった。

幸七は生まれた子供と三人で、本所横網町の裏店に住む家を見つけて引越した。そしてつてをもとめて小間物の行商をはじめたとき、やっとひとつづきの滑落がとまったようだった。どん底に落ちたのである。小間物の荷の底に、女が使う秘具をしのばせて町を歩いているときに、そのことがよくわかった。

――ちょっと、一杯ひっかけて帰ろう。

幸七は二ツ目橋を北に渡ったところで、そう思った。自分が荒んだ顔になっているのがわかった。

日はいつの間にか西空に落ちかかっていて、風はおさまり、日射しも弱まっていたが、むっとする暑さは残っていた。そして河岸の道には、まだ溢れるほど人が動いていた。幸七は険しい目つきで、通行人の肩越しに、開いている飲み屋はないかと物色した。

家の前にいそえが出ていて、誰かと話している。その話し相手が、同じ裏店の市蔵という男だと気づくと、幸七はみちみち押さえて来た酔いが、かっと顔にのぼるのを感じた。

市蔵は桶職人だと言っている。だが、裏店の者は誰もそのことを信用していなかった。市蔵の指は細くて白く、女のようだった。桶職人だと言いながら、昼は家で寝ていて、日暮れから町に出て行くことがあった。

「おいら、怠けもんでね」

裏店の中にも気の強い女がいる。つけつけとその不審をただしたのに、市蔵はそう答えてへらへらと笑った。正体のつかめない男だった。

そういう男なのに、市蔵はさほど女たちに嫌われていなかった。よく女たちの中に割り込んで、話に加わっている市蔵を見ることがある。女たちが、やけに笑いさざめいていると思うと、大概そのなかに市蔵がいた。弁口に長け、女たちを笑わせることがうまい男のようだった。

そのうちに悪いうわさが立った。市蔵が日雇いの助作の女房を盗んだというわさである。助作の女房は、小柄で色が白く、ちょっと目立つ顔を持つ女だった。うわさは、助作夫婦が急に引越して行ったあとで、ひそひそとささやかれた。

「あの男には気をつけた方がいいよ」

「あたしゃ、ひと眼で女たらしとわかったね」

女たちはひそひそとささやきあった。市蔵は細身で背が高く、女のようにととのっ

た顔をしている。警戒すべき男だった。女たちは口に出してそう言い合った。

それで、女たちが市蔵を敬遠し、そばに寄せつけないようにしたかといえば逆である。その悪いうわさが立ってから、市蔵は前にも増して、女たちの人気を集めてしまったようだった。話しこんでいるそばを市蔵が通りかかると、女たちの方から話に誘いこんだりした。

考えてみれば無理もない。女たちは決まり切った日常の繰り返しに退屈していた。裏店の男たちは、自分の亭主もふくめてビードロの玉をのぞくように透けて見えた。朝早く腰弁当で出かけ、日暮れにはくたびれはてて帰ってくる。裏も表もなく、興味の持ちようもないのだ。

市蔵は違っている。女のようにやさしい顔をし、何で喰っているかわからないのに、金に不自由しているようでもない男。しかも少なからず危険な匂いを身にまとっている男だった。女たちは警戒しながら、一方ではその得体の知れない男に興味をかき立てられているのである。

むろん裏店の男たちは、その様子をにがにがしい気持で横目に眺めていた。男たちの眼から見れば、市蔵という男などめずらしくも何ともなかった。正体も大概は見当がつく。博奕か何かで喰っている男だろうと思っている。

みてくれがよくて、内実は世間にはばかられている穀つぶし。そんな男は、裏店の路地を一歩出ればごろごろしているのだ。そしてそういう男が、その日の力を出し切って、這うようにして家にもどって来る自分たちより上等なわけでもない。

男たちは市蔵を黙殺していた。そういう男とかかわり合いを持つことを、気持のどこかで恐れていたし、一方あれはただのろくでなしと、口に出して言うのも大人気ない気持もするからである。幸七もそうして来た。市蔵とは話したこともなかった。

だが、今日は虫のいどころが悪かった。むかむかした。市蔵の気取った声音も気にいらなかったし、親しげに相槌を打っているいそえにも腹が立った。

うす暗い路地に立っている二人に近づくと、幸七はいきなりどなった。

「いつまでぺちゃくちゃやってんだ。飯の仕度は出来たのか」

「ごめんなさい」

といそえは言った。あわてて家の中へ入って行った。つづいて入ろうとした幸七は、市蔵が動かずにじっと見送っている気配に振りむいた。

市蔵は、蛇のようなうす気味悪い眼で、幸七を見ていた。幸七はぞっとしたが、同時に無謀なほどの怒りが衝き上げて来るのも感じた。この男を、のさばらしておくことはないのだ、と思った。いっそ殴りあったら、今日一日のむしゃくしゃがすっきり

と晴れそうな気もした。

幸七は、一歩市蔵の方に引き返して向き合うと、市蔵の眼を見返しながら、胸もとの風呂敷包みの結び目をほどきにかかった。すると市蔵が手を振った。

「おお、こわ」

市蔵は後じさりしながら、おどけた声を出した。白い歯が見えた。

「ご亭主が嫉くほど、別嬪のかみさんとも思わねえけどな」

市蔵はくるりと背を向けた。そのまますたすたと自分の家に帰って行った。

家の中に入ると、幸七はいきなり台所にいるいそえを殴りつけた。いそえは泣き出した。

「どうしたのよ」

幸七が茶の間にひっくり返って寝ていると、いそえは台所と茶の間の仕切りに膝をついて、泣き声で言った。

「あたしが何をしたというのよ。なにそんなに、荒れてんのさ」

「どうしたの？」

外から帰って来たらしい子供の声がした。子供は親たちがそれには答えず、異様な空気なのにおびえたらしく、しくしく泣き出した。

「うるせい。ガキを黙らせろ」

幸七は口汚く罵った。しかしひっくり返ってうす暗い天井を眺めている間に、身体の中を荒れ狂っていた怒りは少しずつさめて、かわりにもの悲しい気分がやって来た。

井筒屋の婿にも納まれた男が、こうして裏店の畳にひっくり返っている、と思ったが、そのあとからいつものあきらめがやって来た。こうなるしかなかったのだ、と思った。

女は紅も白粉も買おうとはしなかった。

「もう、そんな齢じゃないからね」

と言った。女は四十である。二年前に夫に死に別れたあと、健気に小さな店を守っている。夫婦の間に子供はなく、いずれ養子をもらうしかないだろう。

そういうことを近所で聞きこんでいたが、幸七は知らないふりで言った。

「そんな齢って、おいくつですか？」

「四十ですよ、四十。もうおばあさん」

「四十だなんて……」

幸七はおどろいた顔をつくった。

「とてもそんなには見えない。あたしは、まだ三十四、五かと思いましたよ」
「お上手言っても、だめ」
女は突きはなすように言ったが、声はさっきよりはやわらかくなっていた。
「ほんとに物売りのひとは口がうまいんだから。でも、その手にはのらないよ。ばあさんが紅白粉をつけたら、気が狂ったかと思われちゃう」
「じゃ、これなどはどうですか」
幸七は荷の底から秘具を取り出した。五、六本も出して前にならべた。
「ひとり暮らしの女のひとに、大層喜んでもらっていますが……」
「あらあら……」
と女は言った。うろたえたように眼をそむけたが、身持ちの堅い女だと聞いたとおりで、少し固い声を出した。
「そんなものはしまってくださいよ、小間物屋さん。一人暮らしの女だと思って、ばかにしないでもらいたいね」
「とんでもございません。おかみさん。あたしはただ、おさびしい暮らしの中にも、このぐらいのおたのしみはあってもよろしいんじゃないかと、つまり、お客さんの身になっておすすめしていますので、はい。こちらはです……」

幸七は女に口をはさませずに、大小さまざまの秘具の能書きをのべたてた。はじめのうち、女は首を振ったり、幸七を制して立ち上がる気配をみせたりしたが、やがて静かになった。ちらちらと秘具を見た。
「いかがですか？　ひとつお手にとってごらんになっては」
「いやらしいね」
女はそう言って顔をそむけたが、その首筋が不意に真赤になった。女は幸七に向き直ると、いたずらっぽい眼になってささやいた。
「で、いくらだって？」
結局幸七は、秘具だけでなく、紅白粉から髪油まで、化粧道具一式を売りつけて、小さな履物屋を出た。
商売はうまくいったが、気持はさほどはずまなかった。女のご機嫌とりばかりうまくなって、と思った。外は曇りで、いまにも降って来そうな、厚い雨雲が空を覆いつくしている。季節はそろそろ梅雨に入っていた。外歩きの物売りには辛い季節がやって来たのだ。
「ちょっと、幸七さんじゃないか」
突然にうしろから声をかけられた。振りむくと、竹蔵という男が立っていた。竹蔵

は井筒屋の朋輩だが、幸七より五つ、六つも年上なのに、手代という声もかからず、店の隅にくすぶっていた男である。

「やあ、竹蔵さん」

と幸七は言ったが、急に強い羞恥心に襲われた。店にいたころは、愚図な男だとばかにしていた竹蔵が、小ざっぱりとお店者らしい身なりをしているのにひきくらべ、こちらが日や風にさらされてうす汚れた、小間物売り姿でいるのがはずかしかったのである。

だが、竹蔵はそんなことには気づいた様子もなかった。風呂敷包みを小脇にかかえたまま、にこにこ笑いながら近寄って来た。

「あそこから出て来るのを見かけてね」

竹蔵は、幸七が出て来た履物屋を指さした。

「ひょっとしたら人違いかな、と思ったが、やっぱりあんただった」

「竹蔵さんは、変りないようだね」

と幸七は言った。

「お店はどうですか。皆さん変りなく、商いはうまくいってますか？」

「あんたが出たあと、房吉が手代になった。あたしゃ、またかすりもしなかったよ」

竹蔵はにこにこしながらそう言ったが、急に顔を寄せてくると、声をひそめた。

「幸七さん、あんたはほんとに運がよかった」

「何ですって？」

「ま、聞きなさいよ」

竹蔵は先輩顔になった。

「商いの方はいままで通りで、どうということもないのだが、お店の中がごたごたしてね。それというのも、お嬢さんと長次郎の仲がうまく行ってないわけ」

竹蔵は、いまは井筒屋の若主人になっている昔の朋輩を呼び捨てにした。幸七は息をのんだ。意外なことを聞くものである。

「そりゃまた、どうして？」

「お嬢さんの役者狂いだよ、もとは。なに、そうなることはわかってたんだ。あのひとは小娘の時分から悪い友だちがいてね。遊びははげしかったのさ」

竹蔵は、幸七の知らない事情に通じているようだった。茫然としている幸七に、竹蔵は深刻な顔つきでうなずいてみせた。

「長次郎が婿になって、当座一年ばかりはおとなしくしてたがね。だが、すぐに役者狂いをはじめてね。いまじゃ、ご亭主のいる身で平気で外に泊って来るからね」

「……」

「これじゃ、いくら長次郎がおとなしいたって、たまったもんじゃない。で、旦那ごと夫婦に言うわけ。近ごろは、店から出してくれとまで言ってるらしいよ。だが、旦那もおかみさんも首をタテに振るわけがない。世間さまにどう言いわけする、井筒屋の評判にかかわるというわけだが、内実はそうじゃない。旦那もおかみさんも、お嬢さんには手を焼いておいでだったのさ。やっとくっつけた長次郎に逃げられちゃ、あとが困るのだ」

「……」

「幸七さん、あんたは難をのがれたんだ。長次郎はかわいそうに、げっそりと痩せちまったよ。眼なんか血走っちゃってね。そりゃそうだろうよ、店の者にも変な眼で見られるし、お客さんにうかない顔も見せられないしさ」

「そりゃ、かわいそうだ」

「あんたの荷は何ですか？　小間物売りか。気楽でいいねえ」

竹蔵と別れたあと、幸七はその背を見送って、しばらく町角にたたずんだ。茫然としていた。

だが、歩き出したときには、腹の底から笑いがこみ上げて来た。無性におかしかった。自分ほど不運な男もあるまい、とずっと思いつづけて来たが、ひと皮むけばその正体はこんなものだったのだ。

むろん運がよくて笑いっぱなしなどという男がいるわけもなく、ただ運の悪いだけという男もいるはずがない。ひとは少しずつ幸運に恵まれたり、不運に見舞われたりすることを繰り返しているにすぎないのだろう。長い間、そのことが見えなかっただけだと思った。

雨雲に覆われた町が、なぜか明るく見えた。行きかうひとの顔までいきいきとしてみえる。物ごとにくよくよしない女房がいて、子供がいた。喰うにこまるわけではなく、わずかながら小金もためている。小間物売りだって、まんざら捨てたものじゃない。

家にもどったら、いそえにそう言ってやろうと思った。幸七はこみ上げて来る笑いを押さえ切れずに、しのび笑いの声を洩らした。すれ違った男が、怪訝な顔で幸七を見たが、幸七はその顔にも機嫌のいい笑顔をむけてうなずいた。

家にもどったときは、裏店の路地は暗くなっていた。家の中も真暗だった。声をかけたが、誰もいなかった。

——どこへ行ったんだ。

幸七は手さぐりで家に入ると、行燈に灯をいれた。誰もいない家の中が、ひどく殺風景にみえた。

幸七は荷をおろしたまま、しばらく部屋の中に突っ立っていたが、不意に思いついて台所に行った。晩飯の支度らしいものはなかった。釜の中も空っぽだった。いそえにしては、めずらしいことである。幸七は少しずつ不安な気分が強まるのを感じた。台所で水を飲み、部屋にもどって坐ったが、所在なく落ちつかなかった。他人の家に坐っているような気がした。

また立って、今度は寝部屋に行った。長持をあけてみた。いそえの着物といってもたかが知れている。調べてみたが、着換えて行ったようでもなかった。ふだん着で出かけたのである。

——どこへ？

幸七は不意に胸が高鳴るのを感じた。市蔵の顔が胸にうかんで来たのである。茶の間にもどって腰をおろすと膝を抱いた。うす暗い路地で話していたいそえと市蔵の姿を思いうかべたのだが、考えてみれば、市蔵はどこかに引越して行って、もうこの裏店にはいないのだ。そう聞いたのは十日ほど前である。幸七はほっと吐息をついた。

——今朝あたり、何か言ったかな？

とも思ってみた。思いあたることはないが、幸七はこのところずっと不機嫌だったはずである。自分では気づかずに、いそえをひどく傷つけるようなことを言い、そのことを気にしたいそえが、子供の手をひいて出て行ったことも考えられた。

——どこへ？

いそえには帰る家などないはずである。幸七はくよくよと考えつづけた。また市蔵と向き合って話しこんでいるいそえの姿がうかんで来て、いても立ってもいられない気持になった。

幸七は立ち上がった。ともかく外に出てみよう、と思った。がらんとした家の中に一人でいるのが耐えられなかった。

土間におりると、外に足音がして、いそえと子供が帰って来た。

「ごめんなさい、お前さん。つい、引きとめられて遅くなっちゃって」

といそえは言った。

「どこへ行ってたんだ」

ほっとして幸七は言った。子供が部屋の中に駆けこみ、いそえはそのまま台所に行って、家の中がみるみる日常のいろを取りもどすのを眺めていた。

「前に働いてたお店よ」
「水茶屋か。なんでそんなところに行ったんだ？」
「だって……」
いそえは勢いよく米をとぐ音を立てた。
「お前さん、このごろ機嫌が悪いでしょ？　外歩きは疲れるのよね。だから、あたしも少しは働いて、お前さんを休ませてあげないとかわいそうだと思ってさ」
「べつに疲れやしないさ」
幸七は台所に入って行った。茶の間の明かりが洩れるだけの、うす暗い中で、いそえはてきぱきと動いていた。
そうだったのだ。いそえは疑うことを知らない、やさしい女だったのだ。この女のために、井筒屋の婿の口を棒に振ったと思って来たが、やはり違うのかも知れないと幸七は思った。おれには井筒屋のお嬢さんよりも、この女の方が性に合っていたのだ。
「外で働くなんかはやめな。お前がいない家の中はさびしくっていけないよ」
幸七は言って、いそえの身体に手を触れた。
「どうしたの？」
腰をのばしてこちらをむいたいそえを引きよせると、軽く口を吸った。いそえは息をはずませた。茶の間にひき返す幸七のうしろから、機嫌のいい声を浴びせた。
「へんなひとね」

追われる男

足音をしのばせて台所に行くと、喜助は水を飲んだ。家の中にひとがいる気配をさとられてはならないし、水を飲んだために小用が近くなっても困るのだが、喉がかわいて我慢が出来なかった。

渇きはうだるような暑さのせいでもあるが、半ばは恐怖からも来ている。この町に走りこむところを喜助は手先の一人にみられている。名前は知らないが岡っ引与之助に使われている男だ。いまごろ与之助の手先たちは、虱つぶしにこの町を捜しまわっているに違いなかった。

水はなまぬるいし、埃っぽい匂いがした。この家の主の音吉は、生まれ在所の相模に帰っている。音吉は大山の麓にある比々田村の生まれで、嫁を世話するというひとがいるからもどって来い、と親元から手紙で呼び返されて行ったのだ。

音吉は下駄職人で、喜助が手代をしている履物商筑波屋に品物をおさめている。そういうわけで明日から十日ばかり仕事を休ませてもらいますと、音吉は番頭の佐兵衛と喜助にことわりを言い、聞きもしないのに、帰りは嫁と二人連れですと言った。六日前のことである。音吉はうれしそうだった。嫁を世話するひともなく、自分で女房

を見つける才覚もないままに、音吉は江戸で三十を越したのである。

そのうれしさが顔にも声にも出て、音吉の声は高かった。それで店にいた奉公人たちは、音吉の姿が見えなくなると早速笑いものにしたのだが、そのとき店に居合わせたのは幸運だったと喜助は思った。そうでなかったら、いまごろは隠れる場所もなく与之助につかまっていたかも知れない。

台所から三畳の寝部屋にもどると、喜助は出窓の下の壁によりかかって深いため息をついた。思いがけないことが起こるものだという、何度思い返してもさめない驚きが、また胸にこみ上げて来たのである。だが、その思いもよらない出来事が、突然にわが身にふりかかって来たときの恐怖はややうすらいで、喜助の心はいま、どうしたら追手からのがれることが出来るかという心配でいっぱいになっている。

事が起きたときは眼がくらんだ。身体がふるえ、逃げ出したときは、膝ががくがくして何度か前にのめったほどだ。だが動転していたわりには、そのあとの手くばりはうまく行ったかも知れないという気がした。夢中で逃げながら、よくぞとっさに気が回ったものだと、われながら感心するほどだった。

ともかく手配はした。三木蔵がうまく連絡し、夜になっておしんがここをたずねて来さえすれば、閉じこめられているこの町から逃げ出せないものでもない。むろんそ

の前に、与之助がこの家に踏みこんで来たりしなければの話だ。

町を抜け出しさえすれば、その先のあてはないわけではない。巣鴨の在に伯母がいる。一たんそこにもぐり込んで、往来手形をつくってもらえば江戸を脱け出すことが出来る。それにしても、あの男はやはり死んだのだろうかと喜助は思った。血が吹き出した頭を、石置場の囲いの隙間に突っこむようにして倒れこんだまま、四肢をふるわせていた男の姿を思いうかべながら、喜助はしたたる顔の汗を拭いた。

一ツ目橋南の弁天社門前町に、筑波屋に麻裏草履をおさめている家がある。市次郎はそこの職人で、筑波屋に品物をおさめに来るのは大ていこの男だった。筑波屋では、手代の喜助が、おさめの品物を改めて、受け取る。次の注文を出すのも喜助である。

市次郎は、品物が無事おさまるのを見とどけると、そのあとでちょっと人眼をはばかるという様子をつくり、今夜あたりごつごうはいかがですかとささやく。筑波屋に麻裏をおさめる職人は、市次郎が働く家だけに限らないので、時どきそうして小体な茶屋とか小料理屋に誘うのである。

市次郎だけでなく、裏店住まいの音吉のような端下職人でさえ、番頭に菓子折りを持って来たり、不器用な笑顔で、手代さんちょっとそこまでつき合ってもらえませんかと言ったりして気をつかう。もっとも音吉が連れて行くのは、筑波屋からほど遠からぬ村松町の角にあるおでん屋台で、喜助はあまり気がすすまないのだがそれでも三度に一度は屋台の酒にもつき合う。

筑波屋は、馬喰町界隈で一番といわれる履物屋だった。足に履く物なら草鞋のはてまでそろえているが、まわりに旅籠屋が多いので、その草鞋まで飛ぶように売れる。筑波屋に品物をおさめていれば、まず喰いはぐれはない。飲みに誘う男たちの頭には、その腹勘定が働いている。

だから男たちは、喜助が誘いを承知すると、露骨にうれしそうな顔をした。さし出した饗応が受け入れられたということが、次の注文を保証される意味を持つからである。それで喜助は男たちの誘いを受けるときに、いつもいくらか恩着せがましい気持になる。

男たちは声をひそめ、承知する喜助も小声で返事をするが、それは形だけのことで、店の者はそのやりとりの中味を知っていた。知っているが何も言わなかった。番頭の佐兵衛は、手代だったころに十分にもてなしを受けていたし、喜助より齢下の手代松蔵や、もっと齢下の小僧たちは、いずれ自分たちにもその順番がまわって来ると思っている。

いまでも喜助は、ほかにはずせない用があったり、誘いがつづいたりしたときは、松蔵にかわりに行ってくれと頼んだりしている。知らないのは主人の富右衛門ぐらいのものだった。万事うまく行っていたのである。喜助がおせんという女に出会うまでは。

いや、有体に言えばそうではなかったと喜助は思う。喜助は今朝、市次郎に匕首をつきつけられるまでは、女のこともうまく行っていると思っていたのである。

おせんは市次郎に誘われて行った小料理屋の酌婦だった。ひと眼みて気に入った。おせんは浅黒い肌をして、大きな口をあけて笑う女だった。客を客とも思わない勝気な口をきいたが、細い眼にぞくりとするような色気があった。

おせんは三味線を持って来て端唄をうたった。声もよかったが、細身の身体に三味線をかまえる身ごなしのひとつひとつに、男をひきこむ妖しい色気がこぼれて、喜助は口が渇いた。

その気配をさとったらしく、それまで黙っていた市次郎が、筑波屋さん、じつはこの女はあっしの女房なので、と言った。するとおせんが三味線を置いて、お客さんの前でつや消しなことをぶちまけるんじゃないよ、と怒った。喜助は事の意外さにびっくりしたが、口が渇くような気持はおさまらなかった。喜助は次の夜、自前の金で小

料理屋に行き、二階の部屋に上がって酒を飲み、おせんと寝た。そういう店だということは、はじめから見抜いていたのだ。

すると、翌朝早く市次郎がたずねて来て、喜助を外に誘い出すと、お願いですから女房にちょっかいを出すのはやめてくれませんかと言った。市次郎は暗い顔をしていた。寝不足なのか、眼が血走っていた。

あいつは淫乱な女で、誘われれば誰とでも寝るんだ。酌婦なんかやめろと言うのに、その楽しみがあるからやめられない。そういう女ですよ。手代さんをあの店にお連れしたのは間違いでした、と市次郎は言った。

市次郎は、職人に似あわないほどのやさ男で、いい男ぶりをしている。だがその市次郎に、淫乱な女房と別れる気持がこれっぽちもないことは、喜助にもよくわかった。おせんの身体には蜜の甘さが隠されていたのである。市次郎の暗い顔に、男の地獄が出ていた。

喜助はあやまった。店に出ているかぎりは商売女じゃないかと思う気持もあったが、面とむかって咎められてはあやまらないわけにいかない。喜助は足を遠ざけた。市次郎も二度とおせんのいる小料理屋に連れて行くことはしなかった。

だが、そうしてふた月ほど経ったころ、ある夜喜助は、金を握っておせんがいる小

料理屋に走った。走りながら、全体の肌は浅黒いのに、乳房と下腹だけは不思議に真白だったおせんの身体が眼にちらついて、喉も干上がる思いだったのである。市次郎のことは頭になかった。

二度、三度と会った。会うたびに離れがたい思いにさせる女だった。むろん喜助は口どめした。ご亭主に知れちゃぐあい悪い、内緒にしろと言うと、おせんは濃い紅を塗った大きな口をあけて笑い、そんなことを自分の口から言うわけ、ないじゃないかと言った。

だが今朝、急な注文があって弁天社門前の草履職人をたずねた喜助は、用が終ると待っていたように市次郎に外に連れ出された。市次郎ははじめから眼をつり上げて、話があると言い、その顔つきは、大事なおさめ先の手代に対する気遣いを捨てていた。仲間の職人が家の中から見ているのもかまわずに、市次郎は喜助の身体を石置場の矢来の方に押して行った。

何が起きたのかはすぐにわかった。あの女がしゃべったのだ。喜助はふるえ上がった。しかしまさか市次郎が刃物を出すとまでは思わなかったのである。

だが市次郎はやはり職人だった。お店者の喜助にはわからない荒い気性を隠していた。匕首をつきつけて何か叫んだ。喜助が足もとの石を拾い上げて投げたのは、多分

に恐怖からだった。石を投げるとき、眼の隅に駆け寄って来る数人の黒い人影を見たようである。

だが次の瞬間、駆け寄って来た男たちは足をとめ、喜助は茫然と立ちすくんで倒れた市次郎を見つめた。市次郎は額から血を流し、矢来の隙間に頭を突っこむようにして倒れていた。はたき落とされた虫のように、ちぢめた手足を顫わせている市次郎の身体の下から、おどろくほど沢山の血が地面に流れ出ていた。

そのあとのことを、喜助ははっきりとはおぼえていない。後から誰かに追っかけられたようでもある。誰かにしきりに名前を呼ばれたようでもあった。気がついたときには両国橋を渡って、山伏井戸あたりの屋敷町を歩いていたのである。

路上に人影もない屋敷町を、喜助は長いことといそぎ足に歩き回った。暑い日が真向から照りつけて喜助は汗みずくになったが、足をとめる気にはならなかった。足をとめたら、すぐにも誰かにつかまりそうな気がしていた。

やっぱり店に帰ろうかと思ったのは、そうして歩き回って、少し気持が落ちついて来たころだった。店にもどって、ことの次第を正直に主人の富右衛門に打ち明ければ、ひょっとしたら助けてもらえるかも知れないという考えがうかんで来た。

手を出したのはこちらではない。匕首を出したのがむこうだということは、市次郎

の仲間の職人も通行人も見ているのだ。無罪放免とはいかなくとも、思ったより軽い罪で済むかも知れない。

——それに、注文のことだって佐兵衛さんに話さなければならない。

そう思ったのは、この場合少し異常だったが、喜助はその異常さに気づかなかった。やっと自分の道を見つけた気になって、馬喰町の方面に足を向けた。どっちみち、そういつまで屋敷町をうろついているわけにはいかなかった。

だが、筑波屋の店先が見えるところまでもどって来た喜助は、そこで棒立ちになった。次の瞬間には背を向け、歩いているひとを突きとばして走り出していた。筑波屋の店の前には番頭の佐兵衛がいた。佐兵衛は一人ではなかった。取りかこむように数人の男たちがいて、その中の一人が、ひょいと顔をあげてこちらを見た。岡っ引の与之助だった。

身をひるがえしたとき、与之助が指をあげ、まわりの男たちがこちらにむかってどっと走り出す姿を見たようである。喜助は身の毛がよだつ思いをした。市次郎が倒れるのを見たときとは、また別の強い恐怖に身体をつかまれていた。

時刻は八ツ半（午後三時）を回ったかと思われたが、家の中の暑さは衰えるどころ

かますますひどくなった。喜助は胸まで流れ落ちる汗を拭きながら、のぼせ上がったような眼で部屋の中を見回した。

部屋には小窓がある。開ければ少しは風が入るかも知れなかったが、外の者に気づかれたりすればおしまいだった。我慢するしかなかった。喜助はまた足音をしのばせて台所に行き、埃くさい水で手拭いをしめらせた。部屋にもどると、手拭で丹念に顔と胸をぬぐった。手拭はすぐ熱くなったが、拭いた場所はいくらかさっぱりした気がした。

喜助は部屋の隅に重ねてある夜具の上から、枕を取ると、畳の上に横になった。音吉の枕は汚れていて饐えたような匂いがし、背中にはべったりと汗が貼りついて気持悪かったが、起きているよりは楽だった。喜助は長々と手足をのばした。

すると、しばらくして睡気が兆して来た。朝から歩いたり走り回ったりした疲れが出て来たようだった。思いがけない運命に落ちこんだ気持の疲れがそれに加わっている。眠ったりする場合じゃなかろう、と思いながら、喜助はついうとうとした。起き上がって睡気を払うのも億劫だった。汗に包まれたまま、時どき眠りにひきこまれた。

睡気が一瞬にしてさめたのは、表にひとの話し声を聞いたからである。喜助は釣り上げられた魚のように畳の上ではねると、破れた襖の陰まで這い寄って、聞き耳を立

てた。

「この家は留守なのかい？」

「ええ、田舎に帰ってんですよ。三日前だったかしら、もうちょっと前かしら？　でも、もうじきにもどって来ますよ」

「……」

「田舎にさ、嫁をもらいに行ったんですよ。そう言うと近所の者がちっともかまってやらないみたいだけど、音さんてひとがちゃんと喰えるようになったのはここ一、二年のことじゃないかしら。何しろ喰ったり喰わなかったりの暮しだったですからね。下駄職人で、腕はいいんだけど商売人じゃないからね」

よけいなことを言う、と喜助はひやりとした。はたして相手が聞きとがめた。

「下駄職人だって？」

「そうですよ。手に職があるんだから、もう少し楽に暮せるかと思ったら案外なもんだね。水飲んで腹をごまかしたなんて言ってることもあったんだから。それにさ、言っちゃなんだけど音さん男ぶりが一段下がるのよ。いくら男は顔じゃないと言ってもさ、嫁を世話しようということになると、あれじゃちょっと考えるわ。うちのひとなんかもひどい顔をしてるけどさ、は、は」

「作った下駄を、どこにおさめているか知らねえかい」

と男の声が言った。喜助は一語も聞き洩らすまいと耳を澄ませた。男は与之助に使われている手先に間違いなかった。とうとうここまで入りこんで来たのだ。

噴き出す汗が顔を伝いおりたが、喜助は身じろぎもせず外の声を聞いた。

「さあ、そこまでは聞いてないねえ。音さんというひとは、近所とあまり話さないからねえ」

「ちょっと、中をのぞいてみるか」

男がひとりごとを言った。ちょいと、音さん何か悪いことでもしたのかね、という女の声には答えず、男はがたがたと入口の戸を開けた。そのまま声がやんで、しんとした。

土間をのぞきこんでいる、と思ったとき喜助はふと血が凍るような恐怖に襲われた。はいて来た草履をどうしたろうかと思ったのである。あわててはき捨て、そのまま上にあがったような気がする。土間をのぞいている男は、不揃いに脱ぎ散らしてある草履を不審に思わないだろうか。

——うかつだった。隠せばよかった。

喜助は血が出るほどにぎりしめた拳を口にあてて、息をつめた。胸が早鐘を打って

いる。じっと草履を見つめている男の姿が思いうかんで来て、喜助は息苦しくなった。男の沈黙が長かった。

緊張がつづいて、もう笑うか叫ぶかするしかないという気持になりかけたとき、土間に物音がした。男が踏みこんで来たのだ。男は上がり框の板をぎいと鳴らした。障子をあける音がした。喜助は口にあてた拳を噛んだ。もうおしまいだと思った。喜助は、自分が小便を洩らしているのを感じた。小便をちびりながら涙を流した。

だが、外から来た男は、畳の部屋まではあがって来なかった。しばらく部屋の中をのぞきこんでいる様子だったが、やがてぱたりと障子を閉めた。そして今度は荒い足音をたて、入口の戸をぎいぎい鳴らして閉めると、外へ出て行った。

男と女の話し声が、少しずつ遠くなって行くのを喜助は聞いた。うむを言わせずひとを裁く、重々しいものが遠ざかって行くところだった。その気配に耳を澄ませながら、喜助は自分の身体が、不自然にびくつくのを感じた。こみ上げて来たのは笑いだった。喜助は身をよじって笑いが声になるのをこらえたが、それでも笑いは押さえた掌の隙間からぐふぐふと外に洩れる。笑いながら、安堵の涙をこぼした。

奇妙な笑いがおさまったあとに、胸の中が空っぽになったような気分がおとずれて来た。喜助は膝を抱いてうずくまったまま、ぼんやりと障子にうつる日の色を眺めた。

おしんのことを考えていた。おしんは三つ齢下の幼な馴染の女だった。夫婦約束をしたというのではないが、お互いも、またまわりの人間も、二人がいずれ一緒になることを疑わなかった。そういう仲だった。

だが喜助は、何度も何度も女を裏切った。もうこれ以上は待てない齢になったとき、おしんが言った。

「喜助さんが待てというならいつまでも待つけど、その気持がないのなら、よそにお嫁に行くしかないわ」

「縁談があるのか？」

「……」

「いい話だったら行けよ。おれみたいな男とつき合ってても、ろくなことにならないぜ」

上っ調子で喜助は言った。おしんが涙を流しているのを横目で眺めながら冷淡な気持になっていた。また新しい女が出来ていたのである。

——だが、けっきょく……。

どの女も長続きしなかったな、と喜助は思った。おしんは気性がおとなしく、顔も十人並み以上の美しい娘だった。そのころはまだ生きていた喜助の母親は、お前には

もったいないような娘さ、と言い言いしたものである。

それは喜助にもわかっていたのである。所帯を持てば、おしんは利口でおとなしく、申し分のない女房になるだろうと思われた。それがわかっていながら、喜助はおしんとはまるで反対の、気性も荒く顔もよくない、時には男を手玉にとったりするしたたかな女に惹きつけられるのだった。

何度かやけどを負うような目に合いながら、そういう女に出会うと、おしんには感じないいきいきしたものが胸の中に動くのが不思議だった。しかし、最後にはおせんという女に出会い、今度こそ手当てもむつかしい大やけどを負ったわけだった。

だが、こうして追いつめられた身の上になってみると、それでも手をさしのべて助けてくれるような人間は、この世におしんしかいないと思われたのである。ほかの、これまで浮名を流した何人かの女たちは、喜助がひとを殺したと聞けばおぞ気をふるって逃げ散るだろう。喜助などは知らないという顔をするだろう。

追手をのがれて走りながら、とっさにおしんに助けをもとめる気になった自分を、うしろめたく思わないわけではなかったが、喜助にはそれで間違っていないという気持もあるのだった。その気持の中には、肉親に対するような甘えと我ままが混じっている。

だが、おしんは三年前にとついでいた。相手は小体な小間物屋だった。喜助は、さっき強く噛んだために、歯の形に血がにじんだ手の甲をさすりながら、それでもおしんは来てくれるだろうかと考えた。見つめている障子が、いつの間にか白っぽくなっていた。日はようやく西に傾いたのだが、暑さは少しも変りがなかった。新しい汗が流れはじめた。部屋の中はいくらかうす暗くなって、その中に洩らした小便の匂いがかすかにただよっている。喜助は身動きもせず、手をさすりつづけた。

三木蔵を帰すと、おしんは茶の間に引き返した。驚きが鎮まったあとに、こみ上げて来たのは怒りだった。

「ずいぶん勝手なことを言うじゃない」

おしんはその怒りを口に出した。

「いい気なもんだわ」

え？　と言って、台所から手伝い婆さんのおくまが顔を出した。おしんはあわててひとりごとだと言った。

一応は表に店を持つ小間物屋だが、小さな店である。家の中のことは夫婦二人で十分なのだが、この春おしんは身ごもった。そのあとのつわりがひどかったので、心配

した夫が手伝いばあさんをやとって来た。そのばあさんが、まだいるのである。おしんはもういいと言うのに、夫がなに大したお金がかかるわけじゃないと断わる気色がないから、ばあさんはおしんが身二つになるまでいることになるだろう。

客が来たので、おしんは店に降りてしばらく相手をした。だが客が去ると、また喜助のことが頭にもどって来た。

「冗談じゃないよ」

おしんは小さな声でののしった。おしんはほんとうに喜助の嫁になりたかったのである。喜助の気持に実がなく、あちこちで浮気しているのは知っていた。おしんはそういう噂を聞くたびに胸を痛めたが、それでもほかの男の女房になることなどは考えられなかった。

おしまいには、泣きながらかみさんにしてくれと頼んだのだ。だが喜助は露骨に迷惑そうなそぶりを見せただけだった。心がはなれた男の冷たさをまざまざと見た。

それなのに助けてくれなどと言えた義理かと、おしんは思った。お使い小僧で来た三木蔵も三木蔵だと、おしんはそちらにも腹が立った。三木蔵も幼な馴染で、喜助とおしんの仲は一番よく知っている。三木蔵はむかしもいいように喜助に使われて、おしんとの逢瀬を取り持ち、二人が結局別れてしまったいきさつまでよく知っている。

「逃げるには金がいるんだよ」

と三木蔵が言った。三木蔵は鍛冶職の父親を手伝っていて、力はありあまるほどあるが、一文の金も自由にならない身分だった。気はいいが、少し頭がのろい。

「お金？　いくらだって？」

「二両か三両だって言ったな」

「そんな大金は、あたしだってありませんよ」

おしんがかっとなって言うと、三木蔵は自分が叱られたように大きな身体をちぢめた。

「でも喜助は、その金がないと逃げられねえんだとよ」

おしんは火のない長火鉢のふちに肱をついて、三木蔵が言い残して行った言葉をぼんやりと考えつづけていた。

捨てた女に金を無心して来るのもあつかましい話だが、二両だの三両だのという金を持ち出すことが土台無理だった。おしんの夫は働き者で、店をおしんにまかせると自分は小間物を詰めた風呂敷包みを背負って、せっせと屋敷回りにはげんでいる。

それだけに金銭にはことにこまかい。稼ぎからもどって来て、女房は留守、金箱の銀が減っているなどということになれば、びっくりして腰を抜かしかねない。

そんな無理なことは出来ないし、やってやる義理もない。行ってなんかやるものか、自業自得じゃないの、と思った。おしんは三木蔵の伝言をすっぱり忘れようと思った。立って台所に行くと、ばあさんを手伝って葱の皮を剝いた。

だが助けを求める喜助は、台所まで入りこんで来た。おしんは、話しかけるばあさんに、何度か見当違いの返事をして不審げに顔を見られた。

障子にうつる日の色が白っぽくなったのに気づいて、おしんは胸を衝かれた。

「いま、何刻かしらね」

「さっき六ツ（午後六時）の鐘が鳴りましたよ。聞こえなかったんですか」

とばあさんは言ったが、おしんはその鐘の音を聞かなかったのだ。ちょっと買物を忘れていたから出て来る、と言って台所を出た。仏壇下の押入れに隠してある金箱から、一分銀と二分金できっちり三両の金を取り出し、紙につつんだ。

金を包む手がふるえたが、喜助をこのまま見殺しには出来ない、と思いはじめていた。齢でいえば十ぐらいのとき、裏の川に蛍とりに出て、水に落ちたことがある。そのとき喜助は一瞬の間もおかず、暗い川に飛びこんで助けてくれた。喜助はその年奉公に出たのだ。喜助に、はじめて口を吸われたのはいつだったろう。あれは十七の夏だ。いずれあのひとのおかみさんになることを、少しも疑わなかった。

おしんは、眼に涙が溢れるのを感じた。あのころから、もう何十年もの月日が経ったような気がして来る。すばやく涙をふくと、おしんは帯裏に金をはさみこんで、立ち上がった。いそがないと間にあわない、と思った。台所のばあさんに、もうひと声かけて家を出た。

「おしんさん、いまごろお出かけかね」

家を出るとすぐに声をかけられた。向かいの油屋の女房だった。背中に子供を背負って店の前に立っている。おしんが立ちどまると、女房は待っていたように、背中の子供をゆすり上げながら近寄って来た。

「暑いねえ、ひと雨来ないのかねえ」

「ほんとに」

「旦那さんは、まだかい？」

「ええ、もうじきもどって来るでしょうけど」

「ほんとにいい旦那さんだねえ、おとなしくて働き者でさ。大きな声出したのなんか聞いたこともない。仲がいいんでしょ？」

おしんは笑った。そんなこともない、と答えたが、油屋のおかみがこのあたりで名うてのおしゃべりだったことを思い出してぞっとした。

「それにくらべたら、うちの亭主なんかどうだろ。毎晩酒をくらって、帰りと言えばあんた、町木戸が閉まる間ぎわだよ。おまけに着物の襟に白粉などくっつけて来るんだから、いやらしいったらありゃしない」

女房は立板に水の勢いで亭主の悪口を言った。おしんは愛想笑いで相槌を打ちながら、少しずつ後じさりした。すると油屋の女房は、そのたびにおしんのそばまでにじり寄って来てしゃべり立てるのだ。

次第に、おしんは顔がこわばるのを感じた。空を見上げると、さっきまで一面に夕焼けていた雲が、あっという間に灰色に変っているのが見えた。薄闇が町を包みはじめている。その中で、油屋の女房はまだ口を動かしていた。

「だからね、あたしもおきよさんに言ってやったの。亭主が大事か、おっかさんが大事か、ここはあんた、腹の決めどこだよって。だってあれじゃご亭主も子供も、あんまりかわいそうだものね」

女房のおしゃべりは、内に揉めごとを抱えている近所の古手屋の話になった。

「あの……」

おしんは、また後じさりした。

「あたし、買物がありますので……」

「そう、行ってらっしゃい。ところで、おなかの赤ちゃん、元気？　旦那さん、喜んでるでしょ？　そりゃ当然だわ、はじめての子供なんだから。あんた、うちのあのぐうたら亭主でさえもね、一番上の子が生まれるときは、そりゃやさしかったんだから」

おしんはつのるいら立ちに、眼もくらむ思いで立っていた。

喜助が隠れている裏店に近づいたおしんは、そのあたり一帯の異様な明るさに、胸がとどろいた。灯のいろは提灯だった。木戸にも、裏店の路地にも提灯の光があふれて、いそがしく動いている。

その光の中を、一人の男がすすんで来た。男は左右から身体をささえられ、背を折り曲げて歩いてくる。時どきがくりと膝を折って、そのたびに身体をつかんでいる男たちが、あわれな男をつかみ上げるように助け起こすのが見えた。

喜助はその姿でおしんの前を通りすぎて行った。おしんの姿は見なかった。深くうつむいて、足どりは酒に酔っているように心もとなかった。通りすぎるとき、背にまわされた腕に、縄が喰いこんでいるのが見えた。

おしんはぽかんと口をあけたまま、遠ざかる喜助の姿を見送った。いつの間にか、

裏店から大勢のひとが溢れ出てきて、騒々しくしゃべりつづけていたが、その声も耳に入らなかった。

怠け者

一

目ざす店が見えて来たところで、甥の佐吉は足をとめると弥太平を振りむいた。
「伯父さん、覚悟はいいね」
「なにがよ？」
「辛抱して、ちゃんと勤めてくださいよってこと。今度はウチの旦那の口ぞえももらってることだし、ひと月やふた月の勤めで、ふらふらやめられたりすると困るんだ」
「わかってるさ」
と言ったが、弥太平はそいつは丸子屋に行ってみての話だと思った。朝から晩までこき使うような店だったら、辛抱もへちまもありやしねえ。
「口先だけじゃ、だめだよ伯父さん」
佐吉は不安そうに弥太平を見た。弥太平の軽がるしい返事を聞いて、よけいに不安がつのったという顔いろだった。佐吉は小心な男である。
「もう齢なんだから、丸子屋さんに勤め通して、そこで死に水をとってもらう。そのぐらいの気持じゃないと、勤まらないからね」
「わかってるって。おめえや美濃屋の旦那の顔をつぶすようなことはしねえよ」
と弥太平は言った。美濃屋というのは、日本橋左内町にある糸問屋で、佐吉はその店で手代をしている。一年ほど前に嫁をもらい、通い勤めになった。

その、まだ新所帯とも言うべき家に、どう嗅ぎつけたのかころがりこんで来た伯父を、佐吉はもてあました。美濃屋の主人の口利きももらって、ようやく伯父の雇われ口をさがしてもらったものの、弥太平はひと筋なわの男ではない。
弥太平は十五の齢に経師屋に奉公に入った。だが二年ほどしかつづかず、今度は油屋に奉公し直したが、そこも一年しか勤まらなかった。そのあとは転々と奉公先を変え、一度などは旗本屋敷に中間奉公していると言って、腰に木造りの刀を差して現われ、親や妹である佐吉の母親をおどろかしたという。
そうかと思うと、姿を隠したかと思うほどぱったりと消息が絶え、数年してそのころは所帯を持って佐吉という子供がいた妹のところに、突然おもらいのような恰好で、ころがりこんで来たこともある。博奕でおまんま喰っていたんだよ、お話になりやしない、と母親は佐吉にそのときのことを話して聞かせたものだ。
そのあとのことは、佐吉も自分の眼で見て知っている。博奕こそやめたらしかった

が、弥太平は相かわらず落ちつきのない暮らしを送っていた。どこかの店に勤めたと言って、前垂れかけでたずねて来たかと思うと、半年後には東両国の手妻の小屋掛けの前で、高いところに坐って客の呼びこみをしているというぐあいだった。弥太平は、そうやってついぞ自分の所帯というものを持ったこともなく、五十の坂を越えてしまった男である。

弥太平が佐吉の家に姿を見せるのは、妹に小遣いをせびりに来るときだけだった。佐吉の母親は、そういう兄にそのつど、マメに文句を言いながら、なにがしかの小遣いを渡していたが、夫婦そろってはやり病いで死ぬひと月ほど前に、まるでその死を予感したかのように、佐吉にこう言った。

「あのひとは曰くつきのひとなんだから。もしもあたしが死にでもしたら、もうつき合うことはいらないんだよ」

母親もサジを投げた身内なのだ。弥太平を見つめる佐吉の眼には、不信がちらついている。その不信は、弥太平にも見える。弥太平は言った。

「心配いらねえよ。たとえ仕事がきつくてもよ、それじゃよそに鞍替えしようかという齢じゃねえ。そいつはわかっている」

「……」

「おれも、もう若くはねえ。辛抱して勤めるさ」

佐吉はうなずいた。それがわかっていればいいのだというふうに、佐吉はもう一度うなずくと背をむけて歩き出した。

丸子屋は、美濃屋の同業で、親しくつき合っている店である。主人はむろん佐吉を知っているし、美濃屋の口ぞえもあったので、下男奉公の口ながら、二人は茶の間に通された。

「あんたの伯父さんだって？」

丸子屋の主人幸右衛門は、弥太平の顔をしげしげと眺めたあとで、顔を佐吉にむけるとそう言った。

「はい。なにぶんよろしくお願いしとうございます」

「これまで、何をして来たおひとだって？」

「はい、これでも、ちょっとは油屋なんかに勤めたこともございまして……」

佐吉がしどろもどろに言いかけたとき、足音がして、茶の間に四十前後の女が入って来た。佐吉は向き直ると、その女にもバッタのように頭をさげた。

「おかみさん、これがこの間お話しいたしました、私の伯父です。さぞお世話になることと存じますが、よろしくお願い申します」

弥太平も、佐吉のうしろで、這いつくばって頭をさげた。そしておそるおそる顔を上げると、こちらを見ている丸子屋のおかみとばったり眼があった。

弥太平は、あわててもう一度頭をさげた。

――なんと、お品のよいおかみさんではないか。

弥太平は何となく胸がさわぐような気がしながら、そう思った。ちろちろと顔を上げて、おかみを盗み見た。

旦那の方は、商人には不似合いな、けわしい眼をした色の黒い小男なのに、おかみの方は、色白でふっくらした大柄な女だった。巾着切りのような眼を持つ旦那には釣りあわない、おっとりした品がにじみ出ている、顔立ちも娘のように若わかしい。

だが、女は顔かたちじゃ測れねえもんだからな、と弥太平は思った。顔立ちがうつくしくて品があるといえば、若いころ一年ほど勤めた旗本屋敷の奥方がそうだったが、これが殿さまも手を焼く悋気持ちで、おまけに金銭に細かかった。金をもたされて買い物になどやられると、そのあとしつこく釣銭のことをただされてうんざりしたものだ。

もっとも二、三度お釣りをごまかして懐に入れたことがあるから、奥方があやしむのも無理なかったが。

お品がよさそうなこのおかみだって、少しつき合ってみねえことにはわかるもんじゃねえ、と弥太平が思ったとき、咳ばらいして旦那が言った。

「仕事はまず外回りの掃除。家の中は女中がやるからいいが、店先、裏庭はあんたの受持ちできれいにしてもらう」

「へい」

「それから、あんた釘打つぐらいのことは出来ましょうな？」

「へい、そのぐらいのことなら」

と言ったが、弥太平はほんとは大工の真似ごとめいたことが嫌いなのだ。だがそういうのは嫌いだなどと言えたものではない。

「それはよかった」

旦那は満足そうにうなずいた。どうやら釘を打つというのは言葉のアヤで、もっと何かやらせるつもりらしいのだ。はたして旦那は言った。

「一軒の家というのは、大工を呼ぶほどのこともないが、そのままにしちゃおけないといった修繕仕事がけっこう多いものです。羽目板が落ちたの、戸の走りが悪くなったのといったことです。これもあんたの仕事。こないだまでいた六蔵という年よりはそういうつくろいがうまかった。あんた、大工仕事は嫌いかな？」

「いえ、大好きで」

「けっこう。道具はひと通りそろってますから心配はいらない。あとは、ま、おつねという女中頭がいるから、これに言いつけられた用を足したり、そんなもんかね」

旦那はおかみを振りむいた。品のいいおかみはおっとりした声で、そんなものでしょと言った。大工仕事というのが難だが、そうちょいちょいあるわけでもなかろう。何とかおれにも勤まりそうじゃないかと弥太平が思ったとき、旦那が言った。

「そうやって、ボチボチこの家に馴れて来たら、あたしや家内が外に出るとき、おともで一緒に行ってもらうこともある。なに、ふだんは小僧で間にあうのだが、重い荷があるときは子供じゃ持ちきれない。あ、それから……」

「……」

「月に二度、外から荷がとどく。大八車に二つもだ。月に車四つ」

旦那は鼻をうごめかすような顔をした。顔のつくりが平べったいので、大した鼻でもないのに、弥太平の眼にはたしかにうごめいたように見えた。

「そのときは家中の者が荷を運びいれます。これも当然手伝ってもらう。それから寝る前の戸締り」

仕事はあとからあとから出て来るようだった。まだ何か言いつけることがないかと、

旦那は宙をにらんだが、どうやらそれで終りらしく、はたりと手のひらで膝を打った。

「ま、こんなものだな。寝るところはひと部屋とってある。いまおつねに案内させましょう」

旦那は手を叩いてひとを呼んだ。そうしてから、急にひくひくと鼻を動かした。旦那はおかみを見、佐吉を見、最後に弥太平をじっと見た。

「さっきから、どうも何か匂うような気がするんだが、何だろ？　おまえ、匂わないか？」

「何も匂いませんよ」

おかみがおっとりと答えたとき、痩せて頬骨が出ている顔の女が来て、何かご用でございますかと言った。こわい顔をした、三十半ばのその女がおつねという女中らしかった。

二

旦那は、ひと部屋とってあると言ったが、それは台所口の外にあるおろしかけだった。

「六蔵じいさんが自分でこしらえた小屋でね、ここは」
と案内したおつねが言った。
「いえね、はじめはお店の横にある三畳にいたんです。だけど、そのうち品物がいっぱいになっちまって、その三畳にも品物を置くようになったもんだから」
「その六蔵さんというひとは？」
と佐吉が聞いた。
「今年の春に死んだんですよ。まだ元気だったのに、ある朝いつまでも起きて来ないから来てみたら、ぐあい悪くなってて、それからいくらもいなかったね。三日ぐらいして死んだかしら」
「ここで？」
「そう。じいさんは身よりがなかったひとですから、あたしらが死に水も取り、おとむらいもここのお店から出しました」
なんだかぐあい悪い話になったようだった。来る途中で、佐吉は勤めた家で死に水を取ってもらうぐらいの気持でなくちゃだめだ、などと弥太平に説教したが、さすがにこんなに手近なところに見本がいるとまでは考えなかったようだ。
佐吉がむっと黙りこんだのをみて、おつねも少ししゃべりすぎたのに気づいたらしい。

「だけどこのひと、弥太平さんと言うんですって？　よろしくね。このひとはまだ若くて元気そうだから、当分病気の心配はないわ」
おつねはがらがらした口調で言った。
「とにかく中に入って、荷物を解いてください。それで一服したら、あたしのところに来てもらおうかしら。いろいろとやってもらいたいことがたまっているし」
この女も、何か仕事を押しつけようと待ちかまえているらしい、と思ったが、弥太平は神妙に頭を下げた。おつねはにこりともせずうなずいたが、急に鼻をひくひくさせた。
「なんか匂うわ。朝のうちにざっと掃いたんだけど、しばらくしめ切りにしておいたからかね」
「……」
「じゃ、あたしは台所にいますから」
おつねが家の中に入って行くのを見送ると、佐吉は弥太平を押しこむようにして、小屋の中に入れた。
「だから言ったじゃないか、伯父さん」

佐吉は声をひそめて弥太平をなじった。佐吉の顔が、怒りで赤くなっている。

「明日はお目見得なんだから、湯屋に行って垢を落としてきなって言ったのに、無精するから匂うんだ」

だが、おめえの嫁は湯銭をくれなかったぜ、と思ったが、弥太平は黙った。

「ほんとにはずかしいったらありやしないな。旦那に気づかれたんじゃないかと、おれ、ひやひやしたよ」

「……」

「来る途中に湯屋があったのを見たろ？　今晩ひまをもらったら、すぐにも行っといでよ」

ひととおり文句を言ってから、佐吉ははじめて小屋の中の暗さに気づいたというふうに、立ったままあたりを見回した。弥太平も見た。

おろしかけといっても、一応は床を上げた三畳の部屋で、ケバ立ってところどころ中の芯がのぞいている古物だが、畳も敷いてある。だが、いかにも部屋の中が暗いのは、明かりとりの窓がひとつきりしかないためだった。その窓枠もかしぎ、羽目板は隙間だらけで、そこから外の日射しが入りこんでいる。天井は低くて、背のひょろ長い佐吉など、首をすくめ気味にしている。

これじゃ、冬は風が入って寒かろうと弥太平は思った。六蔵というじいさんが自分でこしらえたというが、器用だといっても素人の手前細工じゃこんなもんだろう、と弥太平は思った。部屋の隅に、その六蔵が使ったらしい薄い夜具が置いてある。

「ちょっと狭いなあ」

佐吉が呟いた。佐吉は何かを我慢するように、額にしわを寄せている。その顔のまま、しばらく黙って窓の方を眺めていたが、不意に言った。

「じゃ、おれお店に帰らなきゃならないから、行くよ。ま、辛抱して働いてみるんだね」

「わかった」

弥太平が答えると、佐吉は板戸をあけて外に出た。そして振りむくと、懐に手を突っこんで財布をひっぱり出した。弥太平が言った。

「銭くれるのか？」

「うん」

佐吉は手のひらにあけた金の中から、二朱銀二つと、三十文ほどのバラ銭をつまんで、弥太平に渡した。そして財布をしまうと、無言で背をむけ、台所口まで行ったが、そこで振りむいて、入口から顔だけ出して見送っている弥太平をみると、佐吉はまた

もどって来た。

「いいね、伯父さん」

と佐吉は言った。

「何度も言うようだけど、いままでのような暮らしぶりじゃだめなんだから。少しは落ちついて、自分の口は自分で養わなくちゃ」

「わかってるって。おめえのお説教は、もう耳にタコが出来ちゃったい」

佐吉はうつむいて顔をしかめた。無言でそうしていたが、顔を上げると、皺の深い弥太平の顔をのぞきこむようにして、小声で言った。

「だが、身体がきつくて辛抱しかねるようなときは、いいからもどって来いよ。いざとなったら、伯父さんひとりぐらい、何とか喰わしてやるから」

佐吉の姿が、台所口から家の中に消えるのを見送ると、弥太平はすばやく小屋の戸を内側から閉めた。そして長々と畳の上に寝た。

——佐吉のやつ……。

弥太平は仰むけに寝ころんで天井を眺めながら、うす笑いをうかべた。嫁に気を遣って、早々に家から追い出したひけ目があるからあんなことを言いやがったかな。それとも普請の人足部屋みてえな、部屋の中を見て胆をつぶしたか。

だが甥なんてものは、やっぱりかわいいもんだと弥太平は思った。文句の多いところが難だが、あれは母親ゆずりで仕方ない。あいつの母親も、顔さえみれば文句を言ったが、根は善人だった。おれを、世の穀つぶしとみていたに違いないが、それでも頼って行けば飯も喰わせ、小銭もくれた。

あんな善人がころっと死んじまって、おれのような世の中の足しにもならない屑のような人間が、ろくに風邪もひかずにぴんぴんしている。世の中というやつは妙な仕掛けのもんだ。もっともおれのような人間もいなくちゃ、世間というものも成り立つめえ。

弥太平は深いため息をついた。いい部屋じゃないかと思っていた。佐吉はびっくりしたようだったが、落ちぶれてどん底に落ちたころは菰にくるまって寺の縁の下に寝たこともある。ちょこちょこっと仕事をして、あとはここにもぐりこめば自分の勝手である。御の字だと思った。家の中と違って、ここならひとに気兼ねもいらない。

——何たって、あいつは味方さ。

と弥太平はいざとなれば喰わしてやる、と言ったときの、佐吉の思いつめたような顔を思い出している。長い間世の中を渡りあるいて、弥太平は人をみると、すぐにこいつは敵か味方かと思うくせがついている。文句は多いが、佐吉は心を許していい味

方だった。そういう人間はめったにいなかった。

——あとはみんな敵だ。

巾着切りのような眼をした旦那も、がらがら声のおつねも、ちょっとでも怠けたりすれば、たちまち咎めだてしてさわぐような気がした。あの品のいいおかみにしても、旦那の女房であるからには、やっぱり油断のならない敵だろう。うっかり心を許したりしちゃならねえ。

そう思ったが、弥太平は、それだから一所懸命に働いて、叱られないように勤めようと思っているわけではなかった。いかに抜け目なく骨を休め、楽をしようかと、はやくもそのことを思案しているのである。弥太平は骨の髄からの怠け者だった。

荷をほどいて、とおつねは言ったが、ほどくほどの荷があるわけではない。佐吉の嫁が支度してくれた、着替えの入った風呂敷包みがひとつあるだけである。

その風呂敷包みを枕にして、弥太平はのうのうと寝そべっている。しびれを切らして、おつねが声をかけて来るまでは、そうしているつもりだった。

三

丸子屋のおかみおこんのうしろから、弥太平は汗をふきふき歩いている。寺詣りのおともで、おかみの羽織が入っている風呂敷包みをひとつ持っているだけだが、歩くだけで息が切れた。

齢だ、と弥太平は思った。七ツ（午後四時）を回っても、いっこうにおとろえない日射しのせいもあるだろうが、むかしは暑いのなどは平気だった。暑さがこたえるというのは、年取った証拠だ。

おこんはすいすいと歩いて行く。ふっくらした身体つきなのに、背丈があるのでうしろ姿など娘のように若わかしく形よかった。そんなおかみのおともで町中を歩くことに、弥太平はかすかに誇らしいような気持を抱きながら、うしろからついて行く。満足していた。

おかみのおともが楽しいのは、ほかにわけがある。丸子屋に下男奉公で入ってから、まだ二月しか経たないのに、弥太平の怠けぐせはすっかり見破られてしまった。

無理もない。言いつけられたことにはちゃんと返事をし、すっかりのみこんだような顔をしてみせるが、仕事にかかるまでが遅い。一服も二服もする。いざかかると目立たない程度に巧みに手を抜く。時には返事だけして、仕事をすっぽかすこともある。そしてひまさえあれば、穴ぐらのようなおろしかけの小屋にもぐりこんで寝ているの

だ。

最初に気づいたのは、おつねだった。おつねは腰の低い弥太平をすっかり信用していたようである。それだけに裏切られた気持が強かったらしい。このごろは仕事を言いつけるたびに、すごい形相をして念を押す。

「いいね。言われたとおりにちゃんとやっといてくれないと、あとが困るんだから」

台所で喰べるおかずの品がぐっとさがった。どうやらおつねは、店の奉公人と差をつけることに腹を決めたらしい。飯の盛りも悪くなった。それだけでなく、飯を喰っているときに、おつねはほかの女中相手に、聞こえよがしにいや味を言う。渡り奉公人ていうのは信用ならないもんだねえ、などと言うのだ。

おつねの注進で、旦那の方にもすっかり正体がバレているらしく、旦那は弥太平と顔が合っても声をかけない。まるで忌まわしいものを見るような眼で、じろりとにらむだけである。この間などは、弥太平が店先を掃いていると、潜りから旦那が外に出て来たが、おはようございますという挨拶に、ぷいと顔をそむけてどこかに行ってしまった。弥太平の方で間がわるくなったぐらいである。

だが弥太平は、店先だけは毎朝掃くものの、裏庭は十日に一度ぐらいちょこちょこっと掃除をし、荷がとどく日には、ひとが一どきに三つ運ぶ荷を、かけ声だけは人なみにひとつだけ運んでお茶をにごし、飯時にはちゃんと台所に顔を出して飯を喰う日を送っている。

そして、だんだん居辛くなって来たが、もうひと月ぐらいは何とかこの家で喰えるだろうなどと、虫のいい胸算用をしているのである。ここまで来ても、弥太平には、それではここらで心を入れかえて働こうかなどという気持は、少しも動かないのだ。早い話が、弥太平はそういうやり方で、三十年も四十年も世の中を渡って来たのである。

そうかと言って、弥太平は佐吉にはじめから嘘をついたわけではない。辛抱する、もう若くはないと言ったとき、弥太平はほんとうにそう思ったのである。だが佐吉の姿が見えなくなるとすぐに、長年胸に巣喰っている怠けの虫がむっくりと顔をもち上げて、とどのつまりはいつものやり方にもどってしまった。

――なあに、空におてんとさまがあるかぎり……。

人間ひとりぐらい何とか喰っていけるだろうさ、と弥太平は胸の中でうそぶく。うそぶくのは弥太平ではなく、怠けの虫なのだが、弥太平はこの虫のそそのかしに身をまかせるのが快い。いずれ丸子屋をおん出されることは目に見えているが、そのときはそのとき、またどこか、もぐりこむ場所はあるだろう。そういう考えにふけってい

るときの弥太平は、甥の佐吉の迷惑など、露ほども気にかけていないのである。

そんなふうだから、旦那は弥太平を外出のおともに連れ出すなどということは、一度もしたことがない。一度おつねに大工道具を持ち込ませたが、それもすぐに取り上げてしまった。旦那のように、長年人を使って来たひとには、弥太平のような人間はとっくにお見通しで、つまり見限られたということだろう。

そう思っていただけに、おかみに呼ばれてはじめておともを言いつけられたときは意外だった。天下の怠け者と自分で承知しているくせに、まわりの白い眼に会うと弥太平はひがむ。気持がどんどん拗ねる方にかたむく。そのうちに拗ねる気持と怠け心がほどよく釣り合ってきて、弥太平はなげやりな快感に身をまかせ、いっそどうにでもなれと思うのである。

だから、おかみからおともを言いつけられたとき、弥太平は外に連れ出されて説教でも喰らうのかと身構えたぐらいである。

だがそういうことは起きなかった。おかみは、丸子屋の奉公人の中で一番の怠け者をおともにして、涼しい顔ですいすいと町を行く。案外に無口な女子で、歩きながら弥太平に話しかけたりすることもない。用があるときだけ、澄んだ声で短く用を言いつける。だが愛宕山の近くに行ったときは、そこでところてんを喰わせてくれた。

おともに連れて行くとき、おかみは台所口から顔だけ出して、「弥太平」と呼ぶ。低い声だが、澄んで透る声だからすぐわかる。その声に呼ばれたときだけ、弥太平はちゃんとおともしなきゃと思うのである。そう思うのは、丸子屋の中でたった一人、おかみだけは自分を白い眼で見ていない気がするからである。白い眼で見られて当然なのに、もったいないと人なみな気持になる。

だがそう思う一方、弥太平は、おかみのおこんが平気でおともに連れ歩いたりするのは、おれのことをよく知らないからではないかと疑ってもいた。いまにすっかり正体がばれて、おかみは仰天し、やがておともにも呼ばなくなる。そういう日がきっと来ると、弥太平はむずがゆいような気持でその日を待ちのぞんでいるときがある。

そんな弥太平の思惑などには、まるで気づく様子もなく、おかみは小幅だが、けっこう早い足どりで歩いて行く。少し離された弥太平が、いそいで追いつこうとしたとき、うしろから来て弥太平とならんだ人間がいる。ならんだだけでなく、その人間は弥太平の脇腹を肱でつついた。

弥太平はむっとして、横の男を見上げた。というのは相手が弥太平より頭ひとつ高い男だったからである。とたんに弥太平はびっくりした声を出した。

「何だ、善助じゃねえか」

善助はにやりと笑った。名前は善助だが、この男はごろつきである。女からしぼり、男からしぼり、その金を手慰みにつぎこむ。旗本屋敷や大名の下屋敷の中間長屋では、よく賭場がひらかれ、若いころに一度そういう屋敷の飯を喰ったこともある弥太平は、数年前までは金をにぎると賭場に駆けこんだものだ。善助はそういう賭場で知り合った男である。

だが一度むりやりにおどしの片棒をかつがされてひどい目にあってから、弥太平は善助にはなるべく近づかないようにしていた。そのうち弥太平は落ちぶれて手慰みどころでなくなったので、自然に会うこともなくなった。そうなってから五、六年経つ。

善助は四十を二つ三つ過ぎたはずだった。だがそれで若いころと生き方が変ったということでないらしいことは、顔をみればわかる。善助は鉛色にすさんだ顔をしている。

「あれが丸子屋のおかみだな？」

善助は、前を行くおかみの臀のあたりにじっと目をとめた。弥太平は何となくいやな感じがした。いまはどうか知らないが、弥太平が知っている善助は、聞こえた女たらしだったのだ。娘、女郎、人妻。善助と知り合った女たちは、まるで魅入られたように善助に貢ぎ、いれ揚げたものだ。

「そうだよ」

「ふん、なかなかいい女じゃねえか」

そう言ったが、善助はおかみのことにはそれ以上触れなかった。近々と弥太平に顔を寄せた。

「丸子屋の下男奉公とはうまくやったじゃねえか」

「まあな」

「勤めてどのぐらいになる？」

「ふた月ちょっとてえとこさ」

「すると、そろそろお払い箱だ」

け、け、けと善助は笑った。弥太平が返事をしないでいると、善助は足をあわせて歩きながら、声をひそめた。眼は前を行くおかみのうしろ姿を窺っている。

「夜の戸締りは、誰がやるんだい？」

「おれさ」

「よし、弥太平。おめえに話がある」

善助はあたりにも眼をくばった。二つならんだ長い影が、二人が歩いて行く先に踊るように動いている。

「おめえ、今晩湯屋に行くと言って外に出な。といっても、湯屋になんぞ入ることはねえ。その前を通りすぎると、右手に麦湯売りのおやじが屋台を出している。知ってるか？」
「ああ」
「そこへ来い。そこで待っている」

四

弥太平は迷っていた。さっきまで、明かりとりの小窓を染めていた夕日のいろがさめて、青白い光に変っている。日が落ちて、善助と約束した夜が来たのだ。

五日前の夜、麦湯の屋台で会った善助に、今夜手引きして丸子屋に引きいれると約束した。半ばは脅されてうなずいたのだが、分け前はたんまりやるぜ、と言った善助の言葉にも、心を動かされたのだ。

「どうせ長く勤まるおめえじゃなかろう？　汐時だろうぜ、弥太平」

そう言われたとき、弥太平は善助の言うこともっともだと思ったのである。先が見えていた。どうせお払い箱になる店なら、行きがけの駄賃に、善助の手引きをしてもいい。

むろん、こんなことははじめてだったが、そうかといって、これまでもそれほどきれいに世渡りをして来たわけではない。盗んだり、盗みの手引きをしたことはないというだけの話で、紙一重の危ない橋を渡って来たのだ。

弥太平は腹を決めた。だが、引きいれても人は傷つけない、弥太平が一枚噛んだと知れるようなことは一切してもらいたくない。この二点だけは善助に念を押した。旦那やおかみの身を案じたわけではない。また世話してもらった美濃屋や甥の佐吉に気を遣ったわけでもなかった。弥太平はひたすらにこわかったのだ。盗みがあらわれて、その一味として十手に追われるなどということを考えると身の毛がよだつ。

「そこんとこはよ、おれの顔を立ててもらわないことには、手引き出来ねえよ」
「おめえの顔か」

善助はうす笑いして弥太平を見たが、承知したと言った。

盗みに入るのは三人。弥太平は裏木戸から三人を引きこむが、盗みには加わらない。そして三人が仕事を終ってもとの裏木戸から外に出たら、鍵をかけて自分の小屋にもどり、あとは一切知らぬ顔の半兵衛を決めこむ。そのあと家の中で騒ぎが起こっても、起こされるまでは寝ている。それでいい、ぬかりなく塀の下にも足跡をつけておいて

やるから、誰もおめえが噛んでるなんて思いもしねえよ、と善助は言った。

——だがそんなにうまく行くだろうか。

弥太平は、寝そべっている畳の上で寝返りを打った。じっとりと汗ばんでいた。入口の板戸をあければ、いくらか風が入って来るのだが、弥太平の頭は今夜これから起きることで一杯で、そこまで回らない。うす暗い部屋に、身体を伝い流れる汗を感じながら、じっと横になっている。

いつもだと、いまごろの時刻になると腹がすいて、呼び声もかからないうちに台所をのぞき、おつねにさげすむ眼で見られたりしているのだが、今日は腹もすかなかった。胸のあたりに大きな塊がつかえているようで、時どきかすかな吐き気が動く。

——大仕事だからな。

と弥太平は思う。だが、それだけではなかった。いまになって、弥太平は深刻な迷いに胸をつかまれているのだった。

人は傷つけない、と善助は約束したが、もしや旦那やおかみが手むかったりしたらどうするつもりだろうか。手むかわなくとも、旦那が大きな声を立て、二階にいる奉公人が駆けつけたりすれば、あとは何が起きるか、知れたものではない。

そうして、そういう修羅場になれば、知らぬ顔の半兵衛で済むことではない。裏から盗っとを引きこんだのがおれだぐらい、今夜のうちにもばれてしまうだろう。そうなったときは、じゃ善助と一緒に逃げるしかないのか。

——逃げたってだめだ。

明日にも岡っ引の手につかまってしまうだろう。

しかしそうだからと言って、いまさら手引きはやめたとも言えまい。そんなことを言えば、善助と仲間に半殺しの目にあわされるだろうし、第一もう間にあいやしない。

息苦しくなって、弥太平は戸をあけ、蒸し風呂のように暑い部屋の中から外に出た。気づくと髪の毛の根もとまでびっしょり汗をかき、背中を汗がしたたり落ちるのがわかった。

外にも、まだ昼の暑熱が残っていたが、部屋の中にいるよりはよかった。黄ばんだ空にひらひらと動いているのはこうもりだった。あるかなきかの風が、裏庭の木の葉をそよがせている。塀ぎわの木の下も、植え込みのある庭のあたりも、乳のようなうす闇に包まれている。台所からは、魚を焼く匂いが洩れ、時どききんきんと甲高いおつねの声が洩れて来る。

弥太平が茫然とつっ立ったまま、その声を聞いていると、外で誰かがひとを呼んでいる声が聞こえた。

何気なく、弥太平は小屋を回って、声がした植え込みの方に歩いて行った。すると縁側の外のうす闇の底に、白いものがうずくまっているのが見えて来た。何だろうと思ったとき、ぽちゃぽちゃと水音がして、その白いものがおっとりと声を張った。

「およしは、いないのかえ?」

おかみさんだ、と弥太平は思った。大変なものを見ちまったと思った。おかみのおこんが、庭にたらいを出して、行水を遣っているのだった。縁側の戸が一枚はずれているが、家の中は、まだ灯をともしていないらしく真暗だった。ほの暗い外の明かりの中に、たらいに坐ったおかみの姿だけが、ぼんやりと浮かんでいる。弥太平は、しのび足で引き返そうとした。すると、その気配を聞きつけたらしいおかみの声が、弥太平のうしろでした。

「そこにいるのは、だれ?」

「あたくしです」

「ああ、弥太平」

と言ったが、おかみは訝しむような声を出した。

「おまえ、そんなところで何してるのだえ?」

「へい。お声が聞こえたもので」

弥太平はすくみ上がっていた。のぞきでもしたと疑われたかと、汗も引く思いだった。

「お湯あみとは存じませんで、ご無礼しました」

「ああ、そうなの」

おかみはぽちゃぽちゃと湯の音をさせたが、やはりおっとりした口調で言った。

「背中を流してもらおうと思ったら、誰も来ないから」

「いま、およしでも呼びますです、はい」

「いいよ、いいよ」

とおかみは言った。

「来たついでだから、弥太平に流してもらおうか。女たちはいそがしいだろうから」

「へ」と言ったが、弥太平は絶句した。身体を硬くして立っていると、おかみがまた訝しむように言った。

「どうしたの? おまえもいそがしいかえ?」

「いえ、いえ」

弥太平は頭をかがめて、おそるおそる白いものにむかって近づいた。おぼろな闇に、丸い肩、白い背がひっそりと光って沈んでいる。

「これをお使い」

おかみは振りむいて、手拭を渡した。弥太平は地面にひざまずいて受け取った。眼を落とすと、見事にくびれた腰が見えた。弥太平は一度しっかりと眼をつぶった。そして眼をひらくと、静かに背中に湯をかけながらつぶやいた。

「では、お流し申しますです」

弥太平は、心をこめておかみの背中を流した。この世ならぬものに手を触れているという気がした。またこんなに心をこめて仕事をしたのは生まれてはじめてだな、という気がした。背中の隅から隅まで、丁寧に洗った。

おかみが、ありがとうと言うまで、弥太平は半ば夢中で背中を流した。流し終って、自分の小屋の近くまで来ると、弥太平はおそるおそる首を回してうしろを見た。おぼろに白い立ち姿がみえたが、すぐにうす闇を横切って、姿は縁側の内に消えた。

――おどろいた、おどろいた。弥太平もまいったぜ。

ごろりと暗い畳に寝ころびながら、弥太平は溜息をついた。弥太平は所帯を持ったことがない。女が嫌いだというのではなかったがどんなやさしげな女も、一緒に暮らしはじめるとすぐに男を縛りにかかった。ああでもない、こうでもないと、声も猛々しく男を自分の思うように仕立てようとする。そんな言われたとおりになんぞ出来るもんじゃない。

弥太平はほとほとそれがわずらわしくて、長く女と一緒に住んだことはない。時にはさびしい気もしたが、結局ひとり暮らしの方が性に合うと思い、女を軽くみて生きて来た。

しかし今夜は、ほんとの女を見たという気がした。弥太平の胸は、年甲斐もなくまだとどろいている。世の中はひろい。男があがめ奉らずにはいられないような、あんなうつくしい女もいたのだ。弥太平が胸に穴をあけられたような気分になっているのは、そのせいばかりではなかった。

いくらおっとりしたおかみでも、弥太平の評判を聞いていないはずはなかった。怠け上手の大飯喰らいという弥太平の正体は、丸子屋のうちにくまなく知れわたっていて、奉公に入ってまだ一年も経たない小僧のはてまで、顔が合えばさげすむ眼で弥太平を見る。当然だと、弥太平自身うべなっていることである。おかみ一人が知らないという道理はない。おそらく旦那から、あきるほどおれの悪口を聞かされているはずだ。

それなのにおかみは、そのことを知っている気ぶりも見せたことがない。はじめはおれの正体を知らないのではないかと疑い、つぎにはいまにまとめてお説教を喰らう

ぞと身構えもした。しかしついぞそういうことは起こらず、なんと今夜は、大事のお肌の汗まで流させた。

——ひとを疑うことを知らないおひとなのだ。

さすがの弥太平も、そう思わざるを得ない。あのひとの心の中には、働きをみてひとをわけへだてする気持など、はなからなくて、どうやらこの怠け者まで、一人前の奉公人として扱ってくれるつもりでいるらしい。そうでなければ、あの真白な背中を洗わせたりするわけがないではないか。

——もったいなや。

まるで大慈大悲の観音さまだ、と弥太平は思った。旦那は知ったことじゃない。だがあのひとを裏切って、家の中に盗っとを引きいれたりしたら、罰があたる。

生きている間に、一度でもあんなひとに会えたのはしあわせというもんだと、弥太平の気持はそのことで占められ、善助との約束を破るこわさを忘れていた。

おつねが呼びに来たときには生返事をしたが、店の奉公人がまた呼びに来たので、弥太平は小屋から出ないわけにはいかなかった。

「じいさんの知り合いだそうだね」

と二十過ぎの若い奉公人は、にがにがしげに言った。

「ああいう人相の悪い連中とはつき合わない方がいいんじゃないのか。丸子屋の世間体というものがあるよ」

弥太平は返事をしなかった。台所から廊下に出て、茶の間の前を通り、店に出た。弥太平を呼びに来た若い奉公人は、そこから梯子をのぼって二階に上がって行った。

店は帳場にだけ小行燈が置いてあって、そこで政吉という手代がそろばんをはじいていた。政吉は足音を聞きつけて顔をあげたが、弥太平の顔をみると、ぐいと潜り戸の方にあごをしゃくった。政吉はふだんも底つめたい感じがする三十男だが、弥太平を見る眼が道ですれ違うひとを見るようにつめたかった。

弥太平は土間に降りると、手さぐりで潜り戸をあけ、外に出た。善助と仲間二人が、影のように立っていたが、弥太平をみると無言で先に立って歩き出した。

前を行く三人が足をとめたのは、町の灯もとどかない神明宮の裏手まで入りこんだときだった。向かい側は寺の塀つづきで、あたりはあや目もわかたぬ闇だった。その闇の中から、いきなり手と足が飛んで来て、弥太平を殴り、向う脛を蹴った。

身体の中に火花が散ったような気がしながら、弥太平は地面に膝をついた。だがすぐに手がのびて来て、弥太平の襟をつかみ上げ、立たせた。

「おい、弥太平」

と善助が言った。笑いをふくんだような声だった。

「なんで手引きしなかった？　おめえをあてにして、おれたちは丸子屋の裏に一刻（二時間）も立ちんぼだったんだぜ。足がしびれた」

「……」

「おめえも、まっさらの素人というわけじゃあるめえ。いざとなっておぞ気をふるったか、それともはなからその気がなかったかは知らねえが、仁義を欠いちゃいけねえよ」

「……」

「ま、そいつはいい。済んだことは仕方がねえ。もう一度あらためて手引きしな。明日の晩やり直しだ。おれたちは金がいる」

「……」

「どうした？　声が出ねえか」

「かんべんしてくれ」

「何だと？」

「おれにゃ出来ねえよ。この話はなかったことに……」

「おれたちは金がいるって言ったろ？」

おい、少し痛い目をみせてやれと善助が言った。善助が手を放したので、弥太平はよろめいた。とたんに別の手に弥太平は襟をしめあげられ、つづけざまに頬を打たれた。別の手が弥太平の脇腹を殴った。はらわたがまくれ上がったような気がして、弥太平は吐く声を立てた。つづいて、いやというほど地面に叩きつけられた。休みなく足蹴りが襲って来て、弥太平は顔を蹴られ、背を踏まれた。

――殺されるところだ。

と弥太平は思った。顔がいつもの倍ほどにふくれ上がった感じがある。口の中が切れたらしく、しょっぱくぬるりとしたものが口に溢れた。両腕をつかまれて、弥太平はひょろひょろと立ち上がった。口の中に溢れるものを吐いた。

「どうだ？　考え直したか？」

「いやだ。おれにゃ出来ねえ」

熱っぽくふくらんだ頬に、また裂けるような痛みが走って、眼の中に火花が散った。その火花の中に、弥太平はまぼろしのように、おっとりとほほえんでいるおかみの立ち姿を見た。

歳

月

「家を出てどうするつもりなの。それで信助さんは、どう言っているの」
おつえはたたみかけるように聞いた。ただ遊びに来たとばかり思っていた妹が、帰りがけになって、とんでもないことを言い出したのだ。
問いつめながら、おつえの胸はひどくさわいだ。あの信助と妹が、いつからそんなふうな仲になったのだろう。
「あのひとは……」
妹のさちは、信助のことをそんなふうに言った。
「すぐに住む家を支度するって、言ってるの」
「どこ？　場所はどこ？」
「兄さんや母さんには、言っちゃだめよ」
さちはにらみ据えるような眼で、きっと姉を見た。
「言いはしないから、あたしにだけ教えて」
「深川の八名川町よ。この間、二人で見に行って来たわ。裏店だけど、まだ新しい家なの」

おつえは、ぼうぜんとさちの顔を見まもった。
さちは三つ下の妹だが、異母妹である。おつえの母親が、おつえを生んで間もなく肥立ちが悪くて死んだあとに、いまの義母のたつが来た。さちはこの義母に似て気が強い娘だった。
「姉さん、少しお金貸してくれない？」
と、さちは言った。突然にたずねて来た、ほんとうの用事はそれだったようである。
「いくらいるの？」
「十両ほど」
さちは小さい声で言った。おつえは顎を襟にうめて思案した。金をやれば、妹の家出に手を貸したことになるだろう。あとで実家の義母や兄に叱られるかも知れなかった。しかしさちは、おつえが四年前に、日夜思い描いて、ついに出来なかったことを、いまやろうとしているようにもみえる。
「いいよ。お金はあるから、あげる」
「ありがとう、姉さん」
さちは、ぱっと顔をかがやかせて笑顔になった。金のこともさることながら、家を出て筆職人の信助と一緒になることを、おつえに認められたことを喜んでいるように

みえた。やはり一人でした思案に、心細さがあったのだろう。

おつえは立って、床の間の棚から手文庫をおろして来ると、中にしまってある金を数えた。さちが言う金を包みながら、小判二枚を足した。

「大金だから、帰りに落とさないようにおし」

さちはうなずいて、内懐にしっかりと金包みをしまった。さちは浅黒い細面の顔をし、眼にも薄い唇にも気性のはげしさがあらわれている。母親が違うから当然だとも言えるが、色白でふっくらしているおつえには似ていなかった。

さちだから出来るのだ、とおつえは思った。気性がはげしい娘だから、そんな思い切ったことが出来る。おつえは、前より幾分頬が痩せ、そのかわりに、どこか生ぐさいほど女らしさがにおうようなさちの顔を、じっと眺めた。

恋している女の顔だと思った。さちはいま信助に夢中なのだとわかる。生きものの衝動に動かされて、男に走ろうとしている娘を、兄も義母もとめることは出来ないだろう。でも、この娘はむかし信助と自分の間にあった心の通いを、知らなかったのだろうか。

おつえは微笑した。

「打ち明けてくれて、姉さんうれしいよ」

「……」

「でも、よく決心がついたね」

さちはほほえもうとした。だがその顔が急にゆがんで、さちは不意に手で顔を覆った。そのまましぼり出すような声で言った。

「だって、おなかに赤ちゃんがいるもの」

「さち、おまえ……」

と言っただけで、おつえは絶句した。顔を隠したまま、小さく肩を顫わせているさちの姿を、おそろしいものをみるように見た。

そのとき廊下を静かな足音が近づいて来て、襖の外にとまった。襖はひらかれずに声だけが聞こえた。

「おつえさん、わかっていますね。そろそろ支度なさらないと間にあいませんよ」

底つめたい感じの声は、姑のはまの声だった。おつえは今夜、はまと一緒に門前仲町にある料理茶屋に行って、客を接待することになっている。客は幕府の御材木奉行の下役だから、手落ちのないようにと夫の芳次郎に言われている。

酒肴、芸妓の手配は全部済んで、あとは姑とその茶屋に行って指図するだけだが、おつえは、今夜は自分も酒席に出なければならないだろうと思っていた。芳次郎は外

に妾がいて、心が通うことのない夫婦だが、芳次郎はおつえの器量だけは自慢で、そうするように強いるのである。

姑の声には、長っ尻の客に対するいらだちが含まれている。おつえは、さからわずに返事した。

「はい、すぐに支度いたします」

さちが顔をあげた。すばやく鼻をかむと、帰ると言った。

さちを店先で見送って、自分の部屋にもどって来たが、おつえはすぐには支度にかからなかった。まっすぐ床の間に行って、違い棚の上から硯箱をおろすと、静かに坐った。

硯箱は黒漆に、日輪とまさにとび立とうとする鶴を、金、銀と朱漆で描いた蒔絵細工で出来ていた。蓋をあけると、おつえはその中の筆を一本取った。軸はめずらしい斑竹で、筆毛は実家の兄の見立てでは、信濃産の馬毛を使っているらしいという。品のいい巻筆だった。

筆は四年前に、深川蛤町のこの家、材木問屋上総屋に嫁入って来たとき、調度の中に加えられたものだったが、おつえは時どき出して手入れしたり眺めたりするだけで、一度も使ったことはない。

おつえは筆を硯箱の中にもどすと、廊下に出て女中を呼び、支度にかかった。嫁入る日の三日前に、この筆をとどけて来た信助のことを考えていた。

そのときおつえは、信助が心をとどけて来たのを感じたのだが、今日のさちの話で、おつえは信助がもう一度遠いところから心をとどけて来たのを感じている。さちにどんな成行きから信助と結ばれたかを、おつえは聞かなかった。聞かなくとも、おつえにはわかったのだ。

——あのひとは、まだ私を忘れていない。

だがそのことは、誰にもさとられてはならないことだと思った。廊下に女中の足音がした。おつえは自分がうっとりと笑顔になっているのに気づいて、あわててその笑いを消した。

ひところおつえには、いつか信助の嫁になるのだと信じて疑わなかった時期がある。佐賀町にある船宿橋本は、屋根船二艘、猪牙船五艘、船頭二十人を抱える家で、おつえはこの家で生まれ育った。信助をいつごろからそんなふうに思いさだめるようになったかはわからない。

ただおつえの小さいころ、橋本は近所の子供がよく寄り集まって遊ぶ場所だった。

広い裏庭があり、また家の中にもどこかに空部屋があったから、子供たちは遊ぶ場所に事欠かなかった。おつえが子供たちを連れて家に上がりこむと、義母のたつは顔をしかめたが、先年病死した父の儀平は、家の中がにぎやかでよいと言って許した。

そういう子供のころの遊び友だちは、しかし十三、四になると奉公に出る子、家業を手伝う子、稽古ごとに通う子と、いつの間にかわかれて、群れて遊ぶことはなくなった。そしてある者は町を出て行って、顔をあわせることもなくなった。

信助も、神田の田所町というところにある筆屋に奉公に行った。信助の父は小名木川の南河岸にひろがる海辺大工町で働く船大工だったが、信助の兄には自分と同じ仕事を継がせるものの、次男の信助にはべつの職人の道を選ばせたのである。

信助は一たんおつえの前から姿を消したが、ある年の夏の藪入りの日に、ひょっこりとおつえの家にあらわれた。見違えるほど背がのび、大人びて見えた。そのとき信助が十五で、自分が二つ下の十三だったのをおつえはいまでもおぼえている。

遠慮する信助を家の中に招きいれて、何を話したかはおぼえていない。信助はもともと無口なたちだったが、そのときはことに何もしゃべらなかったような気がする。色白だがきりっとしまった顔に、ときどき微笑をうかべていたのが記憶に残っているだけである。おつえが一人でしゃべっただけである。多分奉公先のことでも聞いたに

違いない。

あのとき信助が立ち寄らなかったら、そのあと二人が会うこともなかったに違いないと、おつえはいまでもそう思う。だが信助はそのあとも、藪入りのたびに、おつえの前に顔を見せた。二人で下佐賀町の森島屋に行って生そばを食べたこともある。

おつえが、自分と信助を結びつけて考えていたのは、船宿の娘だったせいもあるかも知れない。船宿は、船で客を送り迎えするばかりでなく、男と女がしのび会う場所でもあった。おつえたちは、家の者に二階にのぼるなと口やかましく言われたが、様子ありげな男女が二階に消えて、そこで何が行なわれているかは、子供心に知っていたようである。

だがおつえののぞみが、無残に砕かれる日が来た。

蛤町の材木問屋上総屋の主人喜左衛門は、もてなす客を深川の遊所に運ぶために、あちこちの船宿と契約していて、橋本もその一軒だった。橋本では上総屋の用が出来ると何を措いても船を出し、大川を横切って客を迎えに行く。

年に何度か喜左衛門は、橋本に来て金を払い、もてなしを受けて帰った。家の造作を変えたり、新しく船を仕立てるのに金がいると聞けば、即座に催促なしの金も貸した。一代で店をおこした人間らしく、豪気に金を遣った。その喜左衛門が、おつえを

見染めて息子の嫁にと言い出したとき、おつえは自分の運命が決まったのをさとった。上総屋は義理のある家だった。

信助に打ち明けて、家を出ようかとひそかに思わなかったわけではない。だが思ってみただけだった。信助はまだ年季も明けていない修業中の身である。

――それに、約束が出来ているわけではない。

とおつえは思った。信助の嫁になりたい、というのは自分の胸のうちのことだけだった。そのことで二人が話し合ったことはなかった。信助がどう考えているかは、わからないことだと思ったのである。

婚礼の日どりが決まり、やがて次つぎと嫁入りの調度が運びこまれて、周囲がざわめいて行く中で、おつえはぼんやりしていた。そういうときに、信助が一本の筆をとどけて来たのである。

部屋にいるおつえに、箱に入れた筆をとどけて来たのはさちだった。信助が来て、お祝いだと言って置いて帰ったとさちは言った。

「帰った……」

おつえは顔色を変えた。

「どうして上がってくれって言わなかったの？」

「言ったけど、いそぐからって」

さちは姉の剣幕におびえたように小さい声で言った。おつえは、さちの言葉をおしまいまで聞かなかった。部屋から走り出た。

橋本は油堀に架かる下ノ橋のきわにある。おつえは道に出るとあわただしく左右を見回した。日暮れ近い道には、いそがしげに人影が動いていたが、その中に信助の痩せた長身は見あたらなかった。

おつえは橋を渡り、下佐賀町の町通りを抜けて、永代橋まで行った。おそらくただならない顔をしていたはずである。小走りに橋をわたって行くおつえを、すれ違う人が、何人か振りむいて見た。

だが永代橋を半ばまでわたったところで、おつえは走るのをやめ、のろのろと欄干に寄った。

秋の日射しが斜めに川の水を染めていた。橋本があるあたりから下佐賀町の白壁の蔵がならぶあたりまで、河岸の家々は赤くやわらかい光に包まれ、霊岸島から中洲（なかす）にのびる西河岸の家々は黒ずんだ影を川に落としている。その間を二挺櫓（にちょうろ）の猪牙船が三艘ほど、矢のように滑って行く。上流にも船の姿が見えた。その中には橋本の船もいるかも知れなかった。

——あのひとは、私が嫁に行くことを誰に聞いたのだろ。

と思った。今年の藪入りに、信助は橋本に顔を出さなかった。去年だってちょっと顔をみせただけで、上にはあがらなかったのだから、仕方ないとおつえは思っていたのだ。信助はもう大人なのだから、と自分に言いきかせたが、さびしい気持は残った。だがあのひとは、遠くから忘れずに自分を見まもっていて、こうして心をとどけて来たのだ、と思った。だが、もう遅いと思ったとき、川景色が、不意にあふれ出る涙にぼやけた。

しかし、門前仲町の料理茶屋尾花屋に着いたとき、おつえは今日来たさちのことも、信助のことも胸の中から消していた。材木問屋上総屋のおかみになっていた。

舅の喜左衛門が、一昨年の暮に急な中風で倒れ、十日と寝ないで亡くなったあとは、芳次郎が上総屋の当主だった。客のもてなしに采配をふるうのは、当主の女房である。姑のはまも来てはいるが、ひととおり眼をくばるだけで、酒席に顔を出したりはしない。

おつえは茶屋の主人夫婦、番頭、女中頭にあらためて挨拶し、もう一度もてなしの手はずを打ち合わせた。部屋の外に出てから、女中頭に多目に心づけも渡した。そして酒席がととのい、芳次郎が客を案内して来ると、自分もその席に出た。

その夜の客は、御材木奉行の下役だという武家が五人で、はじめの間は気づまりな感じがしたが、ころあいをみておつえが頼んでおいた芸者を呼ぶと、座はいっぺんににぎやかになった。

酒が入った客は、芸者の三味線にあわせてしぶいのどを披露したり、手踊りにあわせて自分も立って踊ったりし、けっこう遊び馴れているのだった。

最後に箱の底に小判をしのばせた菓子折りをさし出すと、それが合図のようになって、三人が帰ると言った。帰る客を玄関先の駕籠まで見送り、いそいでもとの部屋にもどって、残っている上役二人を別の部屋に送り込む。その二人には、それぞれ芸者がつき、あらためて飲み直して泊ることになるのである。

そこまで始末をつけると、おつえはようやく上総屋の者の控え部屋に帰った。姑のはまは先にもどったらしく、行燈の光だけが部屋にまたたいていた。ぴんと張りつめていた気がゆるんで、一どきに疲れが押しよせて来るのを感じながら、おつえはもの憂い手つきでお茶の道具をひき寄せた。

湯がぬるくなっていて、お茶はうまくなかった。強いられて飲んだ酒が、身体の中をとくとくと走り回っている。一刻もはやく家にもどって眠りたいと思った。

廊下に足音がしたと思うと、すぐに襖がひらいて夫の芳次郎が入って来た。

「ごくろうをかけたな」

めずらしく芳次郎は、坐りながらそう言ったが、おつえは返事をしなかった。芳次郎に腹を立てていた。

酒席での芳次郎は、商いの話らしい話も出来ず、ただへらへら笑い、唱えと言われれば唱ってまるで幇間のようだったのだ。

舅の座持ちはこんなふうではなかった、とおつえは思う。舅の喜左衛門は、十分に客を遊ばせながら、その間に商売向きの話は話できっちりとつけた。楽しませてあげるからには、元は取らせてもらいますぞ、という気迫がにじんでいて、一瞬相手が酒がさめたような顔になる場面も、手伝いに出たおつえは見ている。

それでいて喜左衛門は、最後には愛嬌のある胴間声を張りあげて、とっちりとんなどを唱い、客にやはり十分もてなされたと思わせるコツも心得ていた。芳次郎にはその貫禄がない。吉原だ、近間にある岡場所だと、二十前から遊びに精出して来たというのに、酒席の客あしらいも満足に出来ないのかと、おつえは歯がゆくなるのだ。

芳次郎は酔っていた。小ぶとりの上体をゆらゆらとゆすりながら言った。

「おれにもお茶をくれ」

「湯がぬるいから、おいしくありませんよ」

「なんでもいいや」

芳次郎は投げやりに言い、おつえがついで出したぬるい茶を、がぶがぶと飲んだ。そして空の茶碗をつかんだまま、じっとうつむいている。

おつえは気づまりになって来た。三十になる芳次郎には、油堀のそばの一色町に妾がいて、三日に一晩はその妾の家に泊って来る。おつえは妾のことなど何の興味もないが、女中のおなかの話によると、女はおつえが嫁入って来る前からの馴染みで、芳次郎よりひとつ年上の芸者上がりだということだった。

その女のことがわかったときから、おつえは芳次郎に言って寝間を別にしてもらった。客の前でこそ上総屋の主人夫婦という体裁をつくっているが、眼の前にいる男と、しみじみと夫婦の語らいなどしたことはない。

「お先に帰らせてもらっていいかしら」

とおつえは言った。

「お支払いのことで、ちょっと下で話もありますから」

「ちょっと待てよ」

膝を起こそうとしたおつえを、芳次郎は手をあげてとめた。だがそう言っただけで、

またうつむいてしまった。

「何か、ご用があるんですか」

「磯村さんのことだがな」

芳次郎は顔をあげると、おつえの顔を見た。酔いにそまった肉の厚い顔の中に、臆病そうな眼が光っている。

「おまえを何とかならないかと言ってるんだ」

「何のことですか」

「芸者じゃ気にいらないらしいんだよ」

「何を言ってんですか」

立ち上がりながら、おつえは思わず鋭い声になった。

磯村というのは、残った上役のうちの一人である。飲んでいる間中、変にからみつくような眼でおつえを眺め、くどく酒を強いたあの男だ。おつえは寒気がした。

「バカなことを言うもんじゃありませんよ。お前さん、それでも男ですか」

「……」

「そんな商いしか出来ないんですか。なさけない」

おつえの罵りに、芳次郎は顔をあげなかった。問答無用だと思って、おつえは立ち上がると部屋を出ようとした。

襖に手をかけて、そこでふと芳次郎を振りむいたのは、思わず口を出た自分のひと言に不安をおぼえたからである。

――ほんとにこのひとは、そんな商売しか出来ないのだろうか。

喜左衛門がいなくなったといっても、店には嘉七という老練の番頭がいる。おつえは店の商いのことまで心配したことはなかった。だが、いまの芳次郎の言葉で、その確信がにわかにくずれるのを感じた。

もてなした相手にそこまで言われたということは、芳次郎がよほど嘗められているのか、それとも上総屋に、女房が身体を売らなければならないほど、せっぱつまったことが起きているか、どちらかだろう。

どっちにしろ、尋常なこととは言えない。そう思いながら、おつえは丸く盛りあがった肩をみせてじっとうなだれている芳次郎を、少し無気味なものを眺めるように見た。芳次郎は、おつえが襖をあけて廊下にすべり出ても、振りむかなかった。

一度はたずねてみようと思いながら、実際におつえが八名川町の妹が住む裏店をたずねたのは、それから三年近い月日が経ったある日だった。

上総屋からみればむろん、実家の橋本とくらべても小屋みたいに狭い家だったが、さちは家の中を小ぎれいにして住んでいた。

「もっとひどいところかと思ったら、案外にちゃんとして住んでいるじゃないか」

おつえはよちよち歩きで近づいて来た子供を抱き取りながら、家の中を見回した。子供は女の子で、何度かおつえの家にさちに連れられて来ているので、臆せずにおつえの膝に乗った。

「狭くってね」

お茶の支度をしながら、さちは笑った。

「このごろは馴れたけどさ。はじめのころはあっちこっちにぶつかりそうになって往生したわ」

女は男によって変るというが、さちは職人のかみさんが板についた口ぶりでそう言った。

「信助さんは変りない？」

「それが相変らず」

さちはくすくす笑った。しあわせそうだった。

「朝出かけるのも、夕方もどるのも測ったようにきちんとしててね。家にいてもあんまりものをしゃべらないし、何がおもしろいんだかと思うけど」

さちは幸福そうに亭主の悪口を言った。

「神田のお店でもそんなふうかと思うと、気がひけちゃうわ」

「もともと口数が少ないひとだったからね」

おつえは仕方なく相槌を打った。

「でも腕はいいらしくてね」

さちはおつえにお茶をさし出しながら言った。

「いま親方さんに、そろそろ一人立ちしてはどうかって、すすめられてるんだって」

「おや、そうかい」

「芝の方に、いま売りに出ているお店があるのよ。表店なの。でもあたしも少しはお金をためてあるけどさ、とてもお店を買うってお金じゃないから、親方さんは、うちのひとにその気があるんなら、お金の面倒はみるって言ってくれるんだけど」

「だったら迷うことはないじゃないか。いい話じゃないの、さち」

「じつはこないだ、うちと二人で見に行って来たのよ、そのお店。そしたら少し手を入れなくちゃと思うところもあるし、まだ決心がつかないのよ。なにしろ、これまで小さく暮らして来たからねえ」

「佐賀町だって、そういう事情なら少しぐらいのお金はつごうしてくれるんじゃない？」

おつえは実家のことを言った。

「もう大丈夫なんだろ？」

「兄さんも、前のように家の中に上げるなとは言わないけどね。でもあの家は苦手だ、あたし」

さちは言って、台所に立って行った。眼の前を横切った妹の下腹のあたりが、少しふくらんでいる感じなのを、おつえは見た。すぐに間違いない、と思った。おつえの胸に羨望の思いがあふれた。台所で庖丁の音をたてているさちに声をかけた。

「また、赤ん坊生まれるのかい？」

庖丁の音がやんで、一瞬台所が静かになったが、すぐにさちの明るい声が聞こえた。

「気がついた？」

「……」

「あたし、はずかしい」

「はずかしいことがあるものかね。姉さんうらやましいよ」

おつえがそう言ったとき、入口の戸があいた。さちが茶の間をのぞいて、おつえに

「ほら、ね」と言った。そして入って来た信助にお帰りなさいと言った。

信助は茶の間に入っておつえがいるのをみると、ぼうぜんと立ちすくんだが、おつえがおじゃましています、と言うとあわてて膝をそろえて坐り、いらっしゃいと言った。その様子を笑いながら見ていたさちが言った。

「お前さん、ちょうどいいところに帰って来た。あたしちょっと表で餅菓子でも買ってくるから、お相手してよ」

「……」

「姉さんがはじめて来たというのにさ。お茶菓子もないんだから、この家は」

「いいよ、そんな気を遣わなくとも。それにあたしもそろそろおいとましなくちゃ」

おつえはとめたが、さちは履物をつっかけて出て行った。

信助が長火鉢のむこうにあぐらをかくと、子供はおつえの膝を降りて、父親の方に移って行った。しばらく沈黙がつづいた。おつえは信助にむかって、言うことがあふれるほど胸につまっている気がする一方で、もう言うことなどひとつも残っていないような気もしていた。

お茶道具をひき寄せて、信助にお茶をついでやりながら、おつえはつとめて明るい顔をつくって言った。

「今度、表店にひっこすそうじゃありませんか」
「表店？」
信助は子供をあやしながら、怪訝そうな顔でおつえを見た。そして苦笑した。
「まだ、先の話ですよ。あいつ、もうそんなことを話したんですかい」
また沈黙が来た。おつえの胸に、また信助にむかって言わなければならないことがある、という気持があふれる。
「お店のほう、どうですか」
不意に信助が言った。顔をあげると、信助の眼がじっとおつえを見ていた。あたたかく包みこむような眼のいろだった。
「いろいろ、噂を聞いてますよ」
「だめ。上総屋はもう終りですよ」
とおつえは言った。
上総屋は、舅が死んで芳次郎が家業をついだ当時、すでにあちこちに少なからぬ借金があった。その穴埋めを焦った芳次郎と番頭の嘉七が材木の思惑買いに手を出し、それがひどい見込み違いを来たしたために、一度に傷口をひろげることになった。そのことをおつえが知ったのは二年ほど前である。上総屋は再起不能に陥っていた。

大きな店だから、一度につぶれるようなことはない。芳次郎は洲崎にある別宅や木場に残る土地を売ったりして、当座の催促のきびしい借金を切り抜けて来たが、それでもまだ払い切れない借財が残っていた。まだ夢みるようなことを言っている芳次郎に、おつえは半月ほど前にようやく、もう住んでいる家を売るしかないのだと諦めさせたばかりである。蛤町の上総屋は、間もなく人手にわたるだろう。
「こんなことになるんだったら……」
信助がうつむいて、低い声で言った。
「いや、こうなるとわかってたら、あのとき……」
「だめよ」
おつえは鋭い声でさえぎった。
「それを言っちゃだめ、信助さん」
町にたそがれいろが立ちこめるころ、おつえは妹の家を出た。来るときは駕籠を雇ったが、帰りは歩いた。間もなく気軽に駕籠に乗る身分でもなくなるという気持が胸の中にあった。家屋敷を売って、残る借財をきれいにしたあと、せめて小さな商い店でもひらけるほどの金をのこそうと、おつえはいまその才覚に必死になっている。
小名木川に架かる高橋にのぼると、四方に平べったくひろがっている町が見えた。

西空にかすかに朱のいろが残っているだけで、町も大川の水も青黒く暮れいろに包まれようとしていた。家々の窓に、ぽつりぽつり灯がともりはじめている。四月半ばの一日は、暮れてもまだあたたかかった。

信助が言いかけた言葉を思い出したとき、おつえは不意に眼に涙があふれ、頬を伝うのを感じた。信助が何を言おうとしたかはわかっている。だが、過ぎた歳月は、もう取り返すことが出来ないのだとおつえは思っていた。

だが信助の言いかけた言葉で、押しかける債鬼との応対で擦り減り、乾き切っていた気持がわずかにうるおったようでもあった。すれ違うひともいない、ほの暗い道をさいわいに、おつえは涙があふれ出るままにして歩いた。

奉公人が去った大きな家は、夜になるとがらんとして無気味なほど静かだった。

家に入って茶の間をのぞくと、手酌で酒を飲んでいた芳次郎が、弱よわしい声で言った。

「帰って来たのか」

「ただいま」

「もうどこかへ行っちまって、もどって来ないのかと思ったよ」

「もどって来ましたよ」

すがりつくような夫の眼を振り切って、おつえは病気で寝ている姑に挨拶し、自分の部屋に帰った。

仕事に失敗し、妾にも捨てられ、借金取りに責められてすっかり意気地がなくなった芳次郎は、ともするとおつえにすがりつく気配をみせる。わずらわしく腹立たしかった。だがそう思う気持の中に、おつえはかすかに、これまで知らなかった夫婦の情愛らしいものが動くのを感じる。手ごわい借金取りが来る日は、おつえは自分から出て行って、夫をうしろにかばい、猛だけしく応酬するのだ。昔を思うと、夢のような変り方だとおつえは自分を思う。

部屋に坐りながら、おつえは茶の間でひとり酒をのんでいる男のことを考えた。意気地なしでも、夫婦は夫婦だ。いまさらどうなるものでもない、と思う。むかしは吉原で豪奢な遊びをした男が、酌をするひともなく、ひっそりと盃をすすっている姿は、やはりあわれだった。

おつえは思いついて、床の間の棚から硯箱をおろして来ると蓋をあけた。そして思わずあっと声をあげそうになった。信助にもらった筆の根元が虫に喰われていた。そろそろと持ち上げてみると、無残に毛が散った。この二年ほど、傾く家の始末にかま

霜の朝

けて、手入れするひまもなくそのままにしておいたのが悪かったらしい。

——あのひととのことが終ったということかも知れない。

おつえは、帰り道で思いきり泣いたあと、少し遠ざかったように感じる信助の顔を思い出しながら、そう思った。

おつえは指に力をこめて筆を折ろうとした。だが、不意に思い直して、傷んだ筆をそっと箱の中にもどした。みるかげもないその筆に、かがやくようだった若い時分の残光をみたようにも思ったのである。それはそれで、大切にしまって置くものかも知れなかった。

硯箱を棚にもどすと、おつえは芳次郎に酒を切り上げさせるために部屋を出た。ほって置けば、芳次郎は酔いつぶれるまで飲みつづけるのである。夫婦と病気の姑のほかは、女中一人しかいなくなった家の中は暗く、ひっそりとしている。

暗く長い廊下を歩きながら、おつえは夫に何かやさしい言葉をかけてやりたい気持になっている。

一

廊下に足音が聞こえたとき、奈良屋茂左衛門はすぐに眼ざめた。年寄りは耳聡い。

近づいてくる灯が障子を染める明るみの中に、半身を起こした。

「喜兵衛か」

「はい。喜兵衛でござります」

障子の外に蹲った者が答えた。声は、この向島の別邸を差配している老人のものだった。

「ただいま宗助が戻りました」

「よし。離れに通しておきなさい。火桶を忘れないようにな」

「はい。すぐに支度致します」

「いま何刻かな」

「そろそろ七ツ半（午前五時）になりましょう」

「宗助に白湯をやりなさい。寒かろう」

「はい。わかりました。では灯は置いて参ります」

手燭の灯を残して、喜兵衛が忍び足に去ると、茂左衛門は起き上がって着物を着た。

喜兵衛と問答した、僅かな間に肩が冷えている。お楽が寝ている夜具の裾を回って、廊下に出た。お楽は気づかないようだった。軽い寝息が聞こえた。

――この女は、わしが夜中にぐあいが悪くなっても、知らずに眠っているかも知れない。

と思った。

愛くるしい顔をしているが、利発な娘ではない。若々しく温かい身体と、年寄りの添い寝をいやがらないことだけが取柄の女である。嬉々としてまつわりつき、茂左衛門が命じるまで自分の床に戻ろうとしない。

昔は朝まで女を抱いて眠った。しかし近頃は、抱いていながら不意に、若い女の体臭の激しさを耐え難く思うことがある。茂左衛門は、女を床に帰らせ、ひとりで眠る。

――それだけ老いたということだ。

江戸の人間に、奈良茂と呼ばれその巨富を指さされる男はそう思う。

長い廊下を歩いて行く間、茂左衛門は二度ほど身顫いし、首に捲いた獣皮の襟巻をかき合わせた。離れの部屋に入ると、若い男が坐ったまま茂左衛門を迎え、畳に額を

すりつけるほど丁寧な辞儀をした。
「宗助、もっとこっちへ来なさい。そこでは寒かろう」
火桶のそばに坐ると、茂左衛門は宗助を呼んだ。
「いえ、ここで結構でございます」
入口に坐ったまま、宗助が言うと、茂左衛門は顔の前で手を振った。
「話が遠くてはまずい。ここへ来て話せ」
「かしこまりました」
宗助は腰をかがめて寄ってくると、火桶をへだてて茂左衛門とむかい合った。色の浅黒い俊敏そうな身体つきをした男である。
「わかったか」
「はい」
宗助は顔を上げて茂左衛門をみると、低いがはっきりした口調で言った。
「宝永通宝は通用お取りやめと決まりました」
「おう」
茂左衛門は低く声を洩らした。
宝永六年と年が改まった一月、病床にいた将軍綱吉が薨じた。ただちに甲府三十五万石から従三位中納言徳川左馬頭綱豊が後を継ぎ、六代将軍家宣を称したのが、つい先頃である。家宣は間部詮房を側用人に据え、実務の執行者に侍講の新井白石を登用していた。

生類憐れみの令が廃されるだろうという噂があった。綱吉治世下で、最大の悪法といわれたこの法令に、江戸市民はうんざりしていたのである。
だが、奈良屋茂左衛門の眼は、別の一点を見つめていた。前年に幕府は京都の銭座で宝永通宝と呼ぶ大銭（十文銭）を鋳た。量目わずか二匁五分に過ぎないこの新十文銭は、裏面の外輪に「永久通用」の文字を刻んだが、新銭に対する庶民の非難はすさまじかった。
これより先元禄十三年にも、幕府は江戸、京都の銭座で、寛永通宝の一文銭を改鋳している。これは従来一匁あった通宝銭を七分あるいは八分に量目を減らしたもので、この小型銭を、人々は勘定奉行荻原重秀の名前を冠せて荻原銭と呼び、憎んだ。
宝永通宝は、荻原銭の三倍余の量目しかないものを十倍に使わせようとしたものであった。将軍御代替りの新政のはじめに、この悪銭廃止が論議されない筈はないと茂左衛門は睨んでいた。
――これで紀文も終りだな。

茂左衛門は、宝永通宝の新鋳で巨利を懐にする筈だった、まだ四十になったばかりの小肥りの男の顔を思い出していた。その顔は若いに似合わず、五臓のどこかを病んでいるように青白く膨らんでいる。その腫れぼったいような瞼の陰から注がれる眼の光が、刺すように鋭かったことも、いまは気にならない。

――紀文は終りだ。意外に短かかった。

ともう一度思った。その断定には、ためらいがなかった。

紀ノ国屋文左衛門は、材木請負として富を積み上げる一方、勘定奉行荻原重秀と結んで、元禄から宝永にかけて幕府が数度にわたって行なった金銀、銭貨の改鋳にも手を出し、巨富を得ている。

それは材木の商いが以前のようでないことから、見通しのきく紀文らしいやり方で乗り出した仕事のようだったが、今度は命取りになったと茂左衛門は思った。

「確かだな」

茂左衛門は念を押した。

「はい。昨日ご城内でご相談がありまして、そのように決まりました」

「確かめた先は？」

「大久保さま、井上さま、本多さまでございます」

「間違いない。ごくろうだったな」

茂左衛門は宗助を犒った。

大久保加賀守忠増は小田原十二万六千石の領主、井上大和守正岑は常陸笠間の城主で四万三千石、本多伯耆守正永は沼田四万石を領する。いずれも老中だった。茂左衛門は彼等の周辺にも常に金をばらまいている。

「柳沢さまは駒込の方にお引き籠りで、昨日のお集まりにはお出にならなかった由でございます」

「そちらはいい」

茂左衛門は冷淡に言った。

柳沢吉保は、終始前将軍綱吉の傍らにいて、側用人でありながら、若年寄、老中、宝永三年には大老に準じる位置にのぼり、権勢をふるった。紀ノ国屋文左衛門も、奈良屋茂左衛門も、この人物に近づくために鎬を削った時期がある。今日の二人の巨大な富は、柳沢吉保と繋った糸から紡ぎ出されている。

だが、時代が変わった、と茂左衛門は思う。間部詮房という能役者上がりの切れ者が、側用人に登用されたと聞いている。また新井白石というこれも儒者上がりの経世家が、天下を仕切ろうとしている形勢だとも言う。

柳沢吉保は隠居するだろうという噂が町に流れていた。だが、その噂にも、茂左衛門は興味を持たない。柳沢に繋っている荻原重秀は、まだ勘定奉行の職にとどまっていたが、これもそう長くはあるまい、という気がした。ひと時代の、ひと盛りが過ぎたのだ、と茂左衛門は思い、いま手もとに残っている自分の富を覗き込むような気持になる。

——あれが、悪い知らせだった。

と、ふと思う。

一昨年、宝永四年の暮れ。富士が火を噴いた。厚い雲のために火は見えなかったが、夜になると遠い夜空の雲が、赤々と染まっているのが見えた。この世の終りがくるかと思われた。江戸の町にも夥しい灰が落ちた。

「では」

宗助が丁寧に辞儀をして立上がり、部屋を出て行こうとしていた。

その背に、茂左衛門はふと夢から覚めたように声を掛けた。

「お里は、まだ見つからないか」

「はい」

宗助は閾際に膝をついて答えた。

「探しておりますが、まだでございます」

「続けて探してくれ」

宗助ははい、と言い、無表情に主人の顔を見返したが、一礼して部屋を出て行った。

茂左衛門は廊下に出て、雨戸を、一枚開けた。寒気と明方の白い光が茂左衛門を包んだ。

お里は七年前に吉原の揚屋から霊岸島の本店にひき取った女中である。お里が霊岸島にきて四年たち、小柄な身体と、美しい眼を持つ十六の娘になったとき、茂左衛門は無雑作に手折ろうとした。

が、思いがけないことが起こった。お里は茂左衛門を拒み、手首を切って自殺をはかったのである。運ばれた医者の家から、お里は姿を消した。親元は深川海辺大工町で、大工の手間取りをしていたが、お里はその家にも帰っていなかった。

——宗助も、お里が好きだったのか。

ふと茂左衛門はそう思った。部屋を出るとき、こちらを見た宗助の顔が、ことさらに表情を殺したように見えたのである。

宗助は、頭が切れ、胆の据わった若者である。町の噂を探ったり、賄賂を遣った先との連絡をつけたり、己れの耳目となり、時には手足となる人間を、茂左衛門は五、

六人使っているが、宗助の仕事ぶりは迅速で正確だった。宗助が、三年もの間、お里の行方を探れないというのも不審だった。

——だが好きだったら、一所懸命探すことだ。

と茂左衛門は思った。お里にもう欲望は抱いていなかった。金の前に、すべての女が転んだ中で、お里だけ拒んだことが、茂左衛門の心を棘のように刺しているだけである。その痛みは快いものだった。

二

茂左衛門が、紀ノ国屋文左衛門の名を聞いたのは、元禄十一年だった。

この年上野寛永寺の根本中堂が落成した。この造営木材の調達を請負ったのが、紀ノ国屋だった。

「ざっと五十万両という噂ですよ」

商売の上の密談が終ったあと、その話を持ち出した深川の材木屋冬木屋が言った。この請負いで紀ノ国屋が得た利益のことだった。

「どういう男かいね、その紀ノ国屋というのは？」

茂左衛門は訊ねた。

二人は柳橋の料理屋「天の川」で飲んでいた。茂左衛門も、冬木屋も、すでに豪商と呼ばれる材木商人で、蔵の中にはうなるほど金箱を蓄えている。五十万両という金高には驚かなかった。

「紀ノ国屋というから、紀州生まれだろうと思いますよ。しかしくわしいことは何も知りません」

と冬木屋は言った。

「ただ、若い。まだ二十九か三十だと聞きましたよ」

「三十だと？」

茂左衛門は盃を置いて冬木屋の黒い顔をみた。険しい顔になっていた。

——三十というと、俺は担い売りに毛が生えたような商いをしていた。

と思ったのである。

茂左衛門は軒が傾いたような裏店に生まれた。父親は材木屋に勤めて車力をしていた。大八車に材木を積み、江戸の町を牛のように背を丸め、足を踏みしめて車を曳くのが仕事である。

子供の頃、茂左衛門は父親に戯れていて、肌脱ぎになった父親の右肩が、瘤のよう

に固いのに気づいたことがある。茂左衛門の問いに父親は煙管をくゆらせながら答えようとしなかったが、母親が、それは綱ダコというものだ、と教えた。車力は綱を右肩にかけ、腕と足だけでなく全身の筋肉を使って車を曳く。固く盛り上がった右肩にくらべ、左肩が痩せて骨ばっているのを、茂左衛門は長い間見くらべ、手で触った。無口な父親のしている仕事が、そうしているとおぼろげに見えてくるような気がしたのだった。

宇野という材木問屋に丁稚奉公に上がったのは、父親の手引きだった。明日は奉公に出るという前の晩、茂左衛門の父親は珍しく家で酒を飲んだ。

「商人になれ。いいか、辛抱しろ」

父親は低い声で、同じことを言った。酒くさい息を浴びながら、茂左衛門は父親の酔いが深いのに傷ましさを感じていた。

宇野に十年余り勤めて、二十八のとき漸く一軒の店を持った。少量の丸太、竹材を並べただけだったが、父親が念願した材木屋であるには違いなかった。だがそうして商売をしている間に、茂左衛門が覚ったことは、大きな材木屋が、どこかで幕閣の要所要所に喰い込んで、割のいい仕事を受けているということだった。当然金を使っていた。その金が莫大な利を運んで来て彼らの富をふやしていた。材木屋の間でも、幕

府の御用筋の工事になると、請負権を争って、陰湿で凄惨な争いが行なわれているのが見えてきた。

その争いに敗れて、分限者と呼ばれる家がみるみる傾いていった例もみた。栄華の裏に没落の顔が貼りついていた。それが商売というものだった。

——きれいな商売など、もともとありはしないのだ。

そう思った。

奈良屋茂左衛門が、木曾檜を一手に請負っていた御用材木問屋、茅場町の柏木伝右衛門を巧妙悪辣な手を廻して失脚させたのは、天和三年のことである。

その日、外から店に帰った茂左衛門は、茶の間に入ると、妻のお捨に向かって、

「はめた」

と言った。立ったままだった。

「お坐りなさいな」

お捨は静かに言って、お茶を入れた。

「どうかなさったのですか」

「柏木をはめた」

茂左衛門は漸く坐ると、お捨が渡した茶碗を受け取ったが、それに口をつけようと

はせず、障子の一点を見つめて言った。
「これで、奴は終りだ。もう二度と立ち上がれない。見ていろ、お捨。二、三日中に、俺にお上の御用達の沙汰が来る筈だ」
「……」
お捨は暗い眼で、眼が凹み、頬が痩せた顔や、骨太で大きい夫の身体を見回した。
五月に日光で大地震があり、東照宮が倒壊した。神宮の修理材を請負の材木商人を集め、幕府は入札を行なおうとしていた。
そのことを妻に話し、「邪魔なのが一人いる」と茂左衛門が言ったのは、半月ほど前である。そのあと、茂左衛門は手代の銀蔵を連れて、毎日外に出た。夜になってから二人で出ることもあった。銀蔵が提げた風呂敷包みの中には多額の金が入っているようだった。
夫が何かを企んでいることはうすうす解っていた。だが、それがひとを陥れることだとは、お捨は考えつかなかったのである。ひとを陥れるために、このひとはこんなに痩せるほど動き回ったのだろうか、とお捨は思った。
思わず言った。
「いまのままで十分ではありませんか。そんな、ひとを罠にかけるような商売はやめて下さいな」
店を持ってから十年近く経っている。奈良屋はひとに知られる材木商人になっていた。
「馬鹿言え」
茂左衛門は眼を妻に戻した。鋭い、斬りつけるような視線だった。
「これが商売というものだ。戦よ。柏木屋が俺にはめられたのは、むこうに油断があったからだ」
茂左衛門は、気がついたようにごくりと茶を飲み、声を出さずに笑った。
「うまくいった。見ていろよ、お捨。いまに倉が立つ。俺も四十だ。このあたりが正念場よ」
お捨は恐れるように夫の笑顔を見、無言で夫が置いた茶碗に、茶をつぎ足した。
奈良屋が幕府の御用材木問屋にのし上がったのはこの時である。一度幕政の内部に繋りが出来ると、面白いように仕事が来た。惜しまずに金を使った。それは大八車の心棒に油をくれるようなものだった。油が潤沢なほど滑らかに車が回った。幕府自身が営む寺社の建築、橋梁工事などは、規模が大きく、利幅も大きかった。
名古屋の神戸分左衛門と大量の取引きを行なったのは元禄六年頃である。分左衛門

は飛騨、木曾の材木仕出商人の頭領格の位置にいる大きな商人だった。奈良屋の財は膨れ上がった。御用商人となったとき、神田の姓を許され、茂左衛門は神田茂左衛門豊勝と名乗ったが、世間は奈良茂と呼び、その巨富をもてはやした。

柳沢保明という、将軍家の側用人で異常に出世の早い男と繋りがついたのも、この頃である。

何度か莫大な賄賂を使った後で、茂左衛門は保明に会った。

「奈良茂というのは、そなたか」

保明は彫りの深い顔をし、風采の立派な人物だったが、神経質なところは見えず、のんびりした口調で言った。

「おぼえておこう」

「恐れ入ります」

茂左衛門は深々と辞儀をしたが、射た矢が的をはずさなかったのを感じた。眼の前にいるのは、紛れもなく幕政の中枢にいる自信が、顔にも身体にもにじみ出ている人物だった。

綱吉は、元禄五年には東大寺の大仏殿を再建し、十年には護持院、護国寺の伽藍を完成させた。幕府が施主になっての土木工事が盛んに行なわれて、茂左衛門、冬木屋らの材木商人は巨利を得た。

上野寛永寺の根本中堂の造営もその間に行なわれていたが、それを請負った紀ノ国屋文左衛門の名前を、茂左衛門は聞いていなかった。自分の仕事に夢中だったのである。

「冬木屋さん、素姓は解りませんのですか、その男」

茂左衛門は、もう一度冬木屋に言った。冬木屋が何も知らないらしいことにいら立っていた。その若さでそれだけのことをする以上、男は賄賂を使ったのだ。それもはした金ではない。

「その紀ノ国屋という男、金がなくてはそれだけの仕事は出来ませんよ。ええ。その金をどこから持ってきたかです」

「それが皆目解らんのですよ」

冬木屋は首をかしげた。

「ただ、妙な噂を聞きましたな」

「……」

「紀州から蜜柑を運んできて、それで大儲けをした男だという噂があります」

「みかん？」

言った冬木屋も半信半疑らしく、二人は狐につままれたような顔を見合わせた。

「よろしいですか、そろそろ」

襖を開いて、顔馴染の仲居が顔を突き入れた。

「あ、いいですよ。もう話は済みました」

茂左衛門は言った。

忽ち廊下から部屋の中に嬌声がなだれ込んできた。芸妓が二十人ほど、華やかな色彩をまとって部屋に入って来たのである。すぐに三味線が鳴りはじめた。

——紀ノ国屋は、誰にわたりをつけたのかな。

と思った。その男にいままで気付かなかったのは迂闊だったという気がする。芸者の首を抱えて、唇を吸おうとしている冬木屋は、もう競争相手ではない。

——だが、その男は手強い競争相手になるかも知れない。

茂左衛門は、芸妓に囲まれて、盃を持ったまま、少し怖い表情になって部屋の中を見回していた。

三

やがて紀文が、吉原で豪奢な遊びをやっているという噂が聞こえた。三浦屋四郎左衛門の遊女几帳が贔屓で、いまに身請するだろうという噂も聞いた。

本八丁堀の家には、毎日畳屋が七人来るという。客を迎えるたびに、畳を新しく変えるのが、この畳屋たちの仕事だというのであった。

こうした噂に、奈良茂は驚かなかった。奈良茂も深川黒江町に御殿のような家を建て、客を呼ぶ。おきん、およう、おまんという美女を揃えて、客をもてなした。幇間の五、六人はいつでもごろごろしていたし、三年前三宅島に流されて行った絵師の英一蝶や杵屋小四郎、狂言作者の中村清五郎などが自分の家のように出たり入ったりしていた。

吉原の遊びならげっぷが出るほどやっている。紀文が座敷で小判をまいて遊んだと聞いたときも、俺が昔やったことをやっていると思っただけである。

——頭の悪い男ではない。

ただそう思った。

茂左衛門の考えに誤りがなければ、紀文は、そうやって江戸に自分の名前を流しているのだった。その噂はたちまち町に流れ、やがて要路の役人に出入りする町人の口から、大江戸城の内部まで聞こえて行くのである。

財力の誇示は、賄賂する力の誇示でもあった。城中の人間が、分限者の財力に抱く興味は、座敷で四つん這いになって小判や小粒を拾う、妓女や幇間の気持と底においては別のものではない。

その財力に対する日頃の期待が、賄賂の滑りをよくするのである。

――つき合わねばなるまいよ。

茂左衛門はあるとき、そう思った。

揚屋茶屋の清十郎に行くと、清十郎に大見世の加賀屋に差紙を送らせ、馴染の君花を呼ばせた。君花は太夫である。間もなくやってきた。

茂左衛門はざっと酒を飲むと、茶屋に言いつけて広間にひとを集めさせた。

「小判をまくが、お前も拾うか」

と茂左衛門が言うと、

「わちきは性得、小判が嫌いでありんす」

君花は澄まして言った。そのくせ、久しぶりにみる奈良茂の小判まきに興をそそられたらしく、よく動く黒眸を瞠って、茂左衛門のすることを見のがさず見張っている。

茂左衛門は店から連れてきた若い者二人に箱から畳に金をあけさせた。燭台の光に、山と積まれた小判、小粒が光ると、集まった三十人ほどの芸妓、茶屋の女中、男衆な

どが一斉にどよめいた。

「手で拾うのは興がない。どうせしまいには四つん這いになるのだから、口でくわえてみるか」

興奮した笑いが起こった。

壁際に並んだ芸妓が撥をきらめかして、一斉に三味線を鳴らしはじめると、茂左衛門は店の若い者に、金を撒かせた。宙に飛び交う金銀の光に、集まった人数はわっと声を挙げて飛びついた。一たん畳から口でくわえ上げて、手で受け懐に入れる。用意がよく小袋を持って来ている者もいた。身体と身体がぶつかり合い、倒れた弾みに乱れた裾が開いて、白い太腿までさらけ出す女もいた。

――こんなことが面白かったのは、五、六年前までだな。

と茂左衛門は、にこにこしながら心の中で思う。その頃は、自分も拾う人数の中に入って遊んだ。女たちと身体をぶつけ合いながら、金を拾い集めていると、金銀の香りに酔うようだった。

だが、こうした遊びも、二度、三度となると次第に興醒めした。眼の色を変えて畳の上を這い回っている男女が、金餓鬼のように、ただ浅ましい生き物に見えた。金を撒きながら、心は醒め、金などという珍しくもないものの前に、欲をさらけ出して恥

じない人間たちに微かな憎しみさえ感じた。

いまは、茂左衛門の心はもっと索漠としている。

——紀文が余計な真似をしなければ、べつにこんな芝居を興行することはないのだ。

と思う。ただ明日になれば、江戸の町には、奈良茂が吉原で豪儀に金を撒いたそうだ、と噂が流れる。紀文という成り上り者が、今更らしくやっている小判撒きなどというものは、奈良茂が何年も前にやって江戸の市民を驚かしたことだったのを思い出すだろう。そして彼等は言う。やっぱり奈良茂だと。

「もっと撒け」

茂左衛門は陽気に言ったが、その眼が、ふと部屋の隅にとまった。

そこに小さな娘がひとりいる。娘は部屋の隅に立ち、胸を抱くようにしている。

茂左衛門は立ち上がってその娘のそばに行った。

「お前は、小判を拾わないのか」

娘は茂左衛門の顔を見上げて泣きそうな表情になった。

「この家の娘か」

「……」

娘は首を振った。

「ここで働いているのだな」

「はい」

初めて娘が声を出した。

「名前は何という」

「お里」

「年はなんぼだ?」

「十二」

「なぜ小判を拾わない? え?」

娘が何か言ったが、小判拾いの喧噪で声が聞こえなかった。

「おかしな子だ。金が嫌いか」

茂左衛門は微笑した。

「お金は、働いてもらいます」

娘は茂左衛門の顔を見上げると、きっとした表情で言った。

一瞬茂左衛門は気押されたように黙った。清冽なものが、心の中を走り過ぎた気がした。茂左衛門は腰を折って娘の顔をのぞいた。

「わたしは神田茂左衛門だ。店の人達は奈良茂の旦那と呼んでいる。知っているな、

わたしのことを」

「……」

「大きな店がある。そこに行くか。この店にいるより仕事が楽で、お金も沢山頂ける」

娘は黙って茂左衛門の顔を見ているだけだった。

紀文を見たのは、その年の師走だった。

江戸の町を雪が覆ったその夜、茂左衛門は清十郎茶屋に駕籠を走らせた。お伴は歌舞伎役者の嵐喜代三だけだった。

灯は細蠟燭二本にとどめ、障子を開いて雪を見ながら酒を飲んだ。喜代三が三味線を爪弾きながら、古い隆達節を唄った。

逢うまでの、命もがなと、思いしに

くやしや、君の、つらければ

喜代三の声は艶だが、どこか哀調が籠っている。

――隆達節は、一蝶がうまかった。

茂左衛門は、ふと三宅島にいる一蝶のことを思った。一蝶が唱う隆達節は、無雑作なようでいて、いつの間にか聞くひとも引き込む天性の味があった。

喜代三の声は若い。喜代三は女形で、そうしていると姦しいだけの芸妓などより、よほど女っぽく見える。

「いい雪だ」

小止みになりながら、なお一片、また一片と夜の空から落ちてくる雪を見て、茂左衛門は言った。

雪はつもって、庭続きの隣の揚屋、和泉屋半四郎の店の軒先まで一面に埋めている。真向かいの和泉屋の部屋が明るく灯をともしている。三味線の音がにぎやかに籠り、唄う声が聞こえているが、少し騒々しい。雪は、その部屋の縁先では白く灯の光に浮いていた。

その部屋の障子に、不意に男の影と、灯火が映ったと思うと、障子が開いて、男がひとり、手燭を手にして濡れ縁に出てきた。

手燭の光で、その男の顔がはっきり見えた。男は小肥りで、持っている灯の加減か、顔が少しむくんでいるように見えた。

男は手燭を掲げて、縁の下の雪をみたが、ふと気づいたようにこちらを見た。眩しそうに眼を細めて、こちらをみたが、ふと灯を吹き消した。だが、部屋にはいろうとしないで、まだこちらを窺っているようだった。薄暗い中で、男の眼が鋭く光ってい

る感じである。

「あの男、こちらをのぞいているな」

と茂左衛門は言った。不愉快だった。

――覗き見とは不粋な男もいるものだ。

と思った。

「戸を閉めるか」

「あれは、紀ノ国屋さんですよ」

三味線をとめて、細い艶のある声で喜代三が言った。

「……？」

振り返ったとき、身をひるがえすようにして、紀ノ国屋の姿が障子の中に隠れた。

紀文が夜の雪の中に、小判、小粒をばらまいて、座敷の中にいる人間を雪の中に這わせ、茂左衛門の雪見酒をめちゃめちゃにしたのは、それから半刻（一時間）もした頃だった。

雪はすっかり踏み荒され、その後も笊を持ち出して残った雪を掬って金を探す騒ぎが続いていた。

――ふん、田舎者が。

茂左衛門は女のようにしなやかな喜代三の指を弄びながら、閉めた障子の中で嘲った。

紀文は向かいの茶屋の客が茂左衛門だとわかると、わざと雪見の邪魔をしたに違いなかった。その趣向を考えついたときの、紀文の笑いが眼に見えるようだった。

「いつか仕返しをしてやらないとな、喜代三」

「あい」

喜代三は、眼を閉じ、微かに息を弾ませている。上気した頬をし、首筋が仄かに紅くなっていた。喜代三の膝から、それまで抱えていた三味線が滑り落ちて、弦が小さく鳴った。

四

――紀ノ国屋と本気で競り合う気になったのはあれからだった。

と茂左衛門は思った。

庭に霜が降りている。霜は庭から塀まで這い上がり、塀の屋根を白く染めている。まだ日が昇った気配はなかった。明け方の寒気が、茂左衛門には快かった。

吉原揚屋町を舞台に、二人は次々と豪奢な遊びを繰りひろげた。遊びは世間や賄賂先に対する財力の誇示には違いなかったが、茂左衛門の胸にはそれだけにとどまらない気持があった。

——若僧が！

と思った。相手になってやろうという気負いがあった。仲間の冬木屋が、商いで損を重ねて、このところ元気がないのも、茂左衛門の心を紀文との競り合いに駆り立てていた。

紀文が、初鰹を買い占め、その噂が江戸の町を湧かせたのもその頃である。

大巴屋に行った紀文が、大枚の金を大巴屋十兵衛の前に積むと、江戸の町に一本も見えないうちに初鰹を喰いたい、この金で工夫してみないかと言った。

十兵衛はすぐに肴問屋に駆けつけて手を打って回った。残らず前金を打って、初鰹が入港する日、積み荷ごと船をことごとく買い占めるようにはからったのである。

やがてその日紀文が来ると、十兵衛は船に使いを走らせ、買い占めた魚の荷の中から、一本だけ見事な鰹を取り寄せて料理した。この十兵衛の機転を、紀文はひどく喜んで、当座の褒美として五十両の金を与えたが、さらに町屋敷を買ってやったという噂だった。

この話を聞いたとき、茂左衛門は首をかしげた。少し腑に落ちないところがある気がしたのだった。

張り合いながらも、茂左衛門は紀文をどこかで許していた。紀文はあらゆる材木御用に手を出し、莫大な賄賂を背景に、その請負いにかなり成功していた。一方この頃吉保と名を改め、側用人のまま老中格に進んでいた柳沢保明との繋りから、勘定奉行荻原重秀と結んで、銭座請負まで手をひろげようとしていた。

豪快に儲け、豪快に使う紀文に、奈良茂は自分の血に近いものを感じている。

日光東照宮の用材請負いで、柏木伝右衛門を蹴落し、巨利を得た天和三年に、茂左衛門は、駿河町に越後屋という呉服の店を開いた、三井八郎右衛門という男に眼を注いだことがある。

その男は、伊勢松阪からきて、はじめ本町一丁目に店を開いた。越後屋というその呉服屋は、江戸の商人がこれまでやったことがない奇妙な商売をしていた。店前売りである。

普通、呉服屋の商いは、見世物商い、屋敷売りである。とくい先を回り、注文を取って後で品物を持参する。また呉服物を持って屋敷を訪ね、奥向きに説明して品物を置いて帰る。後で、買い上げにならなかったものを持ち帰るという商いである。代金

を頂くのは、六月、十二月の二節季払い、あるいは年一度の極月払いである。それが普通の商売だった。

ところが越後屋は、店先に呉服物をならべ、買いにきた客に即金売りをした。持ち歩く手間、代金をとりに行く手間が省けた分だけ、品物は安く売られる。それが江戸の人間の人気を集め、莫大な利を蓄えたという噂だった。

越後屋は、もうひとつ新しい商売をしていた。諸国商人売りと称し、地方にいる呉服屋に品物をおろしたのである。京都薬師町に開いた仕込み店から来る呉服は、地方でたちまちもてはやされ、越後屋の財力は急速に膨れ上がっていた。

その繁昌を憎んだ江戸の呉服屋仲間が、さまざまな手で越後屋を脅迫し、商売の邪魔をしたということもあり、また本町の店では手狭になったため、越後屋は駿河町二丁目に店を移したのである。

脅迫はまだ続いたが、越後屋はさらに繁昌し、新しい駿河町の店に「現銀かけねなし」の看板をかかげた。すでに富商であった。

茂左衛門は、そのとき越後屋が江戸市中に配った「現金安売掛値なし」の引札を見ている。

奇妙な商売をするものだ、と思った。しかし引札で口上を述べている三井八郎右衛

門という、松阪から来た男が、ただ者でないことはすぐに解った。間口九間、奥行き四十間の店の中には、金襴、羽二重、紗綾、麻、手織の品物が並び、そのひと種類の品ごとに手代一人がつき、店先は常に混雑していると、妻のお捨の話である。

茂左衛門は、その頃耳目の役目をしていた喜兵衛を使って、越後屋の財を測らせた。それは予想以上の巨富だった。

しかし、三井がひたすら商売に熱心で、奉公人にも勝負事は一銭といえども禁じ、遊里への出入りを禁じていることを喜兵衛が告げたとき、不意に三井に対する興味が醒めた。

――金は使うためにある。

と思ったのである。溜めるために金があるという考えは、異物のように茂左衛門の喉につかえる。三井はそのあと両替商にも手をひろげ、その財力は量を増す一方のようだったが、以後茂左衛門は関心を持ったことがない。

三井にくらべると、紀文は同じ道を歩いていた。豪快に金を撒く。その評判を背に、有利な取り引きを手におさめて、さらに儲けるやり方だった。

だが、初鰹の一件は、どこかに茂左衛門をひやりとさせるものを含んでいた。儲けを気前よく散じるのはよい。だが、それにも越えてならない線が一本引かれている。

それはたとえば神を恐れる気持と似ていた。その線を、紀文は越えたのでないか、と思ったのである。

越えさせたものがあるとすれば、それは紀文の傲りであるに違いなかった。そして傲りほど商売にとって危険で、無用のものはないのだ。

——江戸中の初鰹を買い占めることはない。

と茂左衛門は思った。

茂左衛門が、吉原に行く材木屋仲間に蕎麦箱を二つ持たせてやったのは、その後である。その男は久しぶりに馴染の遊女に会いに行ったのである。茶屋に着いて馴染を呼び、さてそのほかの者にも喰わせようと思って、外から蕎麦を取り寄せようとしたが、蕎麦屋は残らず休みであった。

茂左衛門が手を回して、吉原五町、山谷町あたりまでの蕎麦屋を買い上げ、その日一日休ませたのである。

蕎麦二つに、茂左衛門の粋があった。が、そのために、江戸の町の蕎麦屋を残らず買い切れば、その粋が壊れることを、茂左衛門は紀文や世間に示したつもりだった。

——大銭の通用取りやめを、紀文は知っているだろうか。

霜の上に、朝の日の赤みが射してきたのを眺めながら、茂左衛門は思った。だがその疑問はすぐに消えた。勘定奉行に繋っている紀文が、そのことを知らない筈がないとすぐに思ったのである。

町のどこかで、今朝の夥しい霜の白さを、紀文も眺めているような気がしてきた。紀文の顔は、やはり若い年に似合わず、むくんだようにふくらみ、眼は放心したように外の風景に向いたまま動かない。

——この日を、あるいは紀ノ国屋は予感していたのではなかったか。

とも思った。紀文の金の使い方が、使っても減らない金の量に苛立つように、荒々しく粗野だったことを思い出したのである。

——大金を持つということも、気分の重いものなのだ。

と思った。

紀文との闘いが終ったようだった。一昨年の暮れに、赤々と夜の雲を焦がした富士の火のような、太い火柱のようなものに押されて長い間張り合った。それが、僅か十年ほどのことだったとは信じられなかった。だが、この勝ちには不思議に喜びがない。

「旦那さま」

不意に声がした。廊下に宗助が蹲っている。

「まだいたのか」
「はい」
宗助は眼を伏せたが、顔を上げると、決心したように言った。
「実は旦那さまに嘘を申し上げておりましたのを、お詫び申し上げようと、戻って参りました」
「宝永通宝のことかい」
反射的に茂左衛門は言った。一瞬身体が引き緊まるのを感じた。
「いいえ、そのことはお話申し上げたとおりです」
「……」
「お里のことでございます」
「ほう？」
「お里は無事で、あるところで大工職の男と暮らしております」
「……」
「去年の暮れ、子供が生まれました」
「なぜ黙っていた？」
茂左衛門は言ったが、すぐに言葉をやわらげた。

「いや、黙っていたわけは解る。咎めはしないよ、宗助」
「それで、今度は私のことでございますが」
宗助は眼をそらさずに茂左衛門をみて言った。
「今日かぎりで、お暇を頂きとうございます」
「なぜだ。お里のことは咎めないと言ったよ」
宗助は黙って頭を下げ、もう一度お暇を頂きたい、と言った。
「こういう仕事がいやになったかい」
宗助は答えなかったが、茂左衛門はふと、そういえば宗助の仕事もいらなくなったと思った。柳沢は隠居するだろうし、新井白石という男は堅物のようで、賄賂の用が出てくるとは思われなかった。
確かにひと時代が過ぎたようだった。
「喜兵衛に金を渡して置くから、それではあとで取りに来なさい。長い間ごくろうだったな」
と茂左衛門は言った。言いながら、なぜか紀文をひどく懐しい人間のように思った。身を削るような商いの駆引き。吉原の灯のいろ。三味線の響き、脂粉の香。紀文という相手を失ってみると、そのどれもが急に色あせ、遠い風景のように索漠と枯れて見

える。

紀文も、ひと時代のひと盛りが過ぎるのを、風を見送るような眼で眺めているのだろうか、と思った。

「……」

ふと気がついて、廊下を去って行く宗助を呼びとめようと、茂左衛門は手をあげかけたがやめた。

大工職などと言ったが、お里と一緒にいるのは宗助でないか、と思ったのだったが、それはもうどうでもいいことだと思い直したのだった。黄金の籠に、茂左衛門は彼等を飼おうとしたが、彼等はそれを拒んだだけでなく、籠など初めからありはしないことを茂左衛門に告げて、飛び去った鳥のようだった。

その鳥たちのしあわせに、微かな妬ましさを感じながら、茂左衛門はお楽がいる部屋に戻るため、ゆっくり廊下を踏んだ。

解説

皆川博子

〝「あれは、縁を切った男だ」

と孫十郎は、少し厳しい表情で言った。申し出を断わったときの、磯六の顔を思い浮かべていた。無気味な眼の光だけは、孫十郎が子供だった頃と変りなかったが、磯六は髪が真白になっていた。そういう事を続けて、その男は老いたのであった。〟（傍点筆者）

引用したのは、本作品集におさめられた『密告』の一節である。

〝そういう事〟というのは、何か。

本文の、少し前の部分を、更に引用する。

〝法に触れているが、ある事情から表沙汰にならなかった事件、法に触れる寸前で止んだ事件、やがて事件になりそうな犯罪の芽などを拾い集めてくるのが、磯六の仕事だった。（略）

犯罪の匂いを嗅いで回る岡っ引、手先を、堅気の人間は、ときにいぬと呼んで蔑むが、磯六こそ本当の意味のいぬだったのである。〃

主人公笠戸孫十郎は、定回り同心である。

亡父もまた、同じ役職にあった。

そうして、磯六は、亡父に闇の情報を提供する密告者であった。

孫十郎は、磯六の素性を知るや、きっぱりと手を切る潔癖な性情の持主である。この潔癖さは、作者自身の心性の清さが投影されていると思われる。

しかし——私が言いたいのは、ここから先である——世人は密告者を蔑むが、作者藤沢周平氏は、密告者を、ただ冷たく突き放してはいない。

〃そういう事を続けて、その男は老いたのであった。〃

この一行には、いぬとして生きてしまった、そういう生を歩み続けて年老いてしまった男への、深いまなざしが感じられる。

いぬであったことを容認するのではない。けれど、正義の刃をかざして仮借なく糾弾するには、作者は、人間の弱さ哀しさを知りつくしている、と私には思われる。

世間に起きる幾多の事件の、表面だけをみれば、善と悪、正と邪は、判然としているかにみえる。だが、奥を見とおせば、そのように黒白をくっきりと区別できるものではない。

『嚔』という一篇にも、それを熟知した作者の洞察力がよくあらわれている。

例にひいた一、二の作品にとどまらず、藤沢周平氏の作品には、常に、この深い目が根底にある。

ある雑誌に、藤沢氏は『ミステリー日記』というエッセイをのせておられるが、それによって、ミステリー好きの氏の一面がうかがわれる。ミステリーは、プロットの巧みさと文体で読ませる力が要求される——と私は思う——が、氏の作品は、ミステリーではないけれど、この二つの要求を満たしている。主題の持つ深さは、巧みに構築された物語のおもしろさによって、自然に読者の胸にしみいる。

『報復』においては、柚木邦之助の死が、小者の松平の視点から語られる。

小者であるから、事件の真相は、簡単にはわからない。隠された絵が、少しずつ覆いをはがされるように、松平の目にも、そうして読者にも、視えてくる。全貌が明らかになっても、小者という身分に縛られた松平には、どうすることもできないのだが、やがて、身分の低い者ならではの、報復に出る。その間に登場する人物の一人一人の心情に、作者のゆきとどいた目くばりが感じられる。

昭和五十三年と、昭和五十八年に書かれた氏のエッセイを読んだが、そのどちらに

も、小説を書きはじめた動機は暗いものだった、という意味の文章がある。五十八年の分から引用すると、

〝……私は、ある、ひとには言えない鬱屈した気持をかかえて暮らしていた。ひとに軽々しく言うべきものでないために、心の中の鬱屈は、いつになっても解けることがなく、生活の中に入りこんでいた。〟（『波』六月号）

そうして、酒やスポーツや娯楽に没頭して精神の平衡を回復するということのできぬ氏が、唯一つ、見出した道が、小説を書くということであった。

そのために、初期の作品は、〝物語という革袋の中に、鬱屈した気分を流しこんだ〟暗いものとならざるを得なかった、と、氏は書いておられる。

〝男女の愛は別離で終わるし、武士は死んで物語が終わるというふうだった。ハッピーエンドは書けなかった。〟（『波』六月号）

氏は、物語の形を借りて、自らの鬱屈を吐露するが、やがて、書くことによって、救済されてゆく。

そうして、〝鬱屈だけをうたうのではなく、救済された自分もうたうべきだ〟と気づく。無理に作品を改変せずとも、作者の内部が変ることによって、作品も、おのずと、読者に目をむけるゆとりのあるものになる。

ところで、本書は、昭和四十九年から五十六年までに書かれた作品を集めたものである。

オール読物新人賞によるデビューが昭和四十六年、直木賞受賞が四十八年である。〝最近私は、あまり意識しないで、結末の明るい小説を書くことがあるようになった。〟とエッセイに書かれたのが五十三年（『波』八月号）だから、収録作品のいくつかは、氏の鬱屈の時代に書かれたもの、ということになる。

作品名でいえば、

『嚔』、『密告』、『霜の朝』

の三篇が、それにあたる。

しかし、これらの作品の結末がハッピーエンドではなくとも、読者は、決して、陰鬱な読後感を受けることはない。

それは、作者自身の中に本質的に存在する、人間を視る目の暖さ、深さ、に由来する。

悲運に泣く人間は、その誠実さゆえに、悲運に見舞われることもあるけれど、誠実さそれ自体が、読者には、救いと感じられる。

冷酷、非情な人間に対しても、作者の目は、冷酷、非情に生まれついてしまった人

間への哀しさを秘めている。

〝そういう事を続けて、その男は老いたのであった。〟

この一行は、私には、限りなく重く暖い。

なお、解説文に敬語を用いるのは、読者にはわずらわしいかもしれないが、藤沢周平氏は、小説家として大先輩で、このような一文を書くことさえ、私としてはおこがましいことなので、お許しいただきたい。

（昭和六十二年一月、作家）

この作品は昭和五十六年十月青樹社より刊行された。

霜の朝

新潮文庫　ふ－11－17

昭和六十二年二月二十五日　発行
平成十九年九月十日　四十六刷改版
平成二十年九月二十日　五十一刷

著者　藤沢周平
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二－八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六－五四四〇
読者係（〇三）三二六六－五一一一
http://www.shinchosha.co.jp

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社大進堂
© Kazuko Kosuge 1981　Printed in Japan

ISBN978-4-10-124717-5 C0193